



第2回 国際文化フォーラム

文化庁

World Cultural Forum 2004

Cultural Diversity

文化の多様性

報告書

平成16年10月26日～11月23日開催

The Agency for Cultural Affairs, Japan



ごあいさつ

このたび、去年に引き続き行った第2回国際文化フォーラムの報告書を発行するにあたり、皆様方にご挨拶を申し上げます。

国際文化フォーラムは、世界の第一線で活躍する文化人・芸術家が世界の文化動向の最新情報と文化をとりまく課題に関する知見を講演・討論などを通じて交換する場を提供するとともに、日本からの文化発信の「顔」となるイベントとして開催するものです。また、関西地域で開催することにより、関西から文化を発信し、日本を文化で元気にしようとする「関西元気文化圏」の中心事業として位置付けています。

今年度のフォーラムは、昨年引き続き「文化の多様性」を共通テーマに、ジャック・アタリ氏(元フランス大統領特別顧問)と李御寧氏(イ・オリョン、梨花女子大学校文理大学碩座教授)の基調講演のほか、文化財、音楽、美術等に関するセッションを行いました。発言に込められたパネリストのメッセージが、皆様にとって、「文化の多様性」の理解と今後の国際文化交流の発展をお考えいただく一助となることを強く願っております。

終わりに、今回の開催に当たってご尽力をいただきましたすべての方々に、あらためて深く感謝申し上げます。

文化庁長官 河合 隼 雄

第2回 国際文化フォーラム 報告書

目次

| | |
|-------------------|---|
| 国際文化フォーラムの概要 | 1 |
| 関西元気圏とは | 1 |
| 第2回 国際文化フォーラム開催日程 | 2 |
| 参加行事 | 2 |

●討論「文化の多様性」

| | |
|--------------------|----|
| 開催概要・プログラム | 4 |
| 記念講演者及び鼎談出演者プロフィール | 5 |
| 開催記録写真 | 6 |
| 記念講演及び鼎談サマリー | 8 |
| 記念講演 | |
| ジャック・アタリ | 9 |
| 李 御 寧 (イ・オリヨン) | 14 |
| 討論「文化の多様性」鼎談 | 23 |

座談会報告

●座談会 I 「シルクロードと仏教文化」

| | |
|--------------------|----|
| 座談会 I 開催概要・プログラム | 52 |
| 座談会 I パネリスト・プロフィール | 53 |
| 座談会 I 開催記録写真 | 54 |
| 座談会 I サマリー | 56 |
| 座談会 I 座長講評：平山 郁夫 | 57 |
| 司会提言：山折 哲雄 | 58 |
| 司会講評：山折 哲雄 | 59 |

●座談会 II 「音楽における二つの維新」

| | |
|---------------------|----|
| 座談会 II 開催概要・プログラム | 62 |
| 座談会 II パネリスト・プロフィール | 63 |
| 座談会 II 開催記録写真 | 64 |
| 座談会 II サマリー | 66 |
| 座談会 II 座長講評：海老澤 敏 | 67 |

●座談会 III 「日韓学生サミット in 大阪」

| | |
|----------------------------|----|
| 座談会 III 開催概要・プログラム | 70 |
| 座談会 III 司会進行・アドバイザー・プロフィール | 71 |
| 座談会 III 開催記録写真 | 72 |
| 座談会 III サマリー | 74 |

| | |
|---|-----|
| ●座談会 IV 「日韓若手芸術家・文化人会合」 | |
| 座談会 IV 開催概要・プログラム | 76 |
| 座談会 IV パネリスト・プロフィール | 77 |
| 座談会 IV 開催記録写真 | 78 |
| 座談会 IV サマリー | 80 |
| ●座談会 V 「文化の多様性への対応－21世紀の美術館の課題－（その2） ～国際化時代における美術館の在り方～」 | |
| 座談会 V 開催概要・プログラム | 82 |
| 座談会 V パネリスト・プロフィール | 83 |
| 座談会 V 開催記録写真 | 84 |
| 座談会 V サマリー | 86 |
| 座談会 V 座長講評：高階秀爾 | 87 |
| ●対談 | |
| 対談：「映画と映画祭－これまでとこれから」 | 90 |
| 対談：「日韓文化交流の未来」 | 92 |
| 対談：山折哲雄と河合隼雄 | 96 |
| 対談：山崎正和と河合隼雄 | 103 |
| 対談：李 御 寧と河合隼雄 | 114 |
| ●日本経済新聞特集記事 | |
| 日本経済新聞特集記事 | 129 |

国際文化フォーラムの概要

国際文化フォーラムとは…

国際文化フォーラムは、内外の著名な文化人・芸術家が世界の文化の最新情報や文化をとりまく課題に関する知見を、講演・討論を通じて交換する場を提供するとともに、日本の文化発信の「顔」となる催しとして開催します。

「関西元気文化圏」の中心事業として…

関西の文化の力で日本を活気づけることをねらって、河合隼雄文化庁長官は「関西元気文化圏」を提唱しました。国際文化フォーラムは「関西元気文化圏」の中心事業として開催されるものです。

第2回 国際文化フォーラム…

第2回国際文化フォーラムでは、「文化の多様性」を共通テーマに8つのセッションと多数の参加行事を開催しました。フォーラムの各セッションの会場には、関係機関の協力を得て、関西が誇る歴史的建造物や現代建築を選び、関西の文化遺産を舞台に世界の文化人が刺激に富んだ議論を交わしました。

関西元気文化圏とは

「文化」で関西から元気になろう

河合隼雄文化庁長官が提唱する「文化で日本を元気にしよう」という取り組みの一環として、日本各地で素晴らしい活動をしている多くの方々の元気、底力を、そして日本の文化を、まず歴史と文化の蓄積がある関西から、力強く発信することをねらいとして「関西元気文化圏」を推進しています。ここでいう「文化」とは、いわゆる芸術や、文化財のみを指すのではなく、衣食住や生活様式、価値観など、人間の生活にかかわることすべてであり、私たち一人ひとりが「文化」の担い手であるという考えに基づき、文化の価値の再認識を目指していきます。

現在、京都府、大阪府、滋賀県、兵庫県、奈良県、和歌山県、福井県、三重県、徳島県にまたがる関西地域において、文化庁と関西の経済団体や地方公共団体等が連携し、多様な文化活動の展開による関西文化圏の一体化・活性化に一緒に取り組んでいます。また、広くこの取り組みへの参加を呼びかけ、2004年10月現在で約2800件の事業が「関西元気文化圏」に参加しています。今後はこの取り組みがより浸透し、また関西のみならず全国へ広がっていくことを目標に、推進して行きたいと思います。

第2回 国際文化フォーラム開催日程

| | |
|---------|---|
| 対談 | 「映画と映画祭－これまでとこれから」 オリベホール 平成16年10月26日(火) 16:00～17:00 |
| 討論 | 「文化の多様性」 国立京都国際会館「ルームA」 平成16年11月7日(日) 13:00～17:00 |
| 座談会 I | 「シルクロードと仏教文化」 東大寺本坊 平成16年11月8日(月) 13:00～17:45 |
| 座談会 II | 「音楽における二つの維新」 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール「中劇場」 平成16年11月12日(金) 13:00～17:30 |
| 座談会 III | 「日韓学生サミット in 大阪」 国立国際美術館「講堂」 平成16年11月14日(日) 13:30～18:00 |
| 座談会 IV | 「日韓若手芸術家・文化人会合」 NHK 大阪放送局「テレビ第2スタジオ」 平成16年11月15日(月) 13:00～17:00 |
| 対談 | 「日韓文化交流の未来」 メガボックス(ソウル) 平成16年11月17日(水) 17:00～18:00 |
| 座談会 V | 「文化の多様性への対応－21世紀の美術館の課題－(その2) ～国際化時代における美術館の在り方」 兵庫県立美術館「ミュージアムホール」 平成16年11月23日(火・祝) 13:00～17:20 |

参加行事

- 秋期特別展「古代の梵鐘」
- 特別展覧会「守屋コレクション寄贈50周年記念 古写経－聖なる文字の世界－」
- 特別展覧会協賛 特集陳列「もうひとつの守屋コレクション－中国の銅鏡－」
- 「京都文化会議2004～地球時代のこころを求めて～」
- 第56回「正倉院展」
- 開館記念展「マルセル・デュシャンと20世紀美術」
- 企画展「痕跡－戦後美術における身体と思考」
- 同志社大学 CISMOR 特定研究セミナー
「イスラーム学からみた欧米型民主主義：モハッゲグダーマード師に聞く」
- 「直島会議VII－地域における新しい美術館像－
- 京都造形芸術大学 国際文化フォーラム 「藝術から見る21世紀」

The background features a white space with several colored circles: a large blue circle at the top right, a medium green circle to its left, a large orange circle at the bottom left, a medium blue circle at the bottom right, and a small pink circle at the bottom center. On the right side, there are several thin, parallel, curved lines that sweep across the page. A horizontal bar with an orange-to-yellow gradient is positioned across the middle of the page.

討論「文化の多様性」

討論 「文化の多様性」

現在の国際情勢において、「文化の多様性」という概念が持つ意義を、内外の知識人が語り、話し合う。

開催概要

- 日時： 平成16年11月7日(日) 13:00~17:00
- 会場： 国立京都国際会館「A ルーム」
- 主催： 文化庁、京都府、京都市、日本経済新聞社、京都新聞社、NHK、関西元気文化圏推進協議会
- 協力： 国立京都国際会館、京都国立近代美術館、京都国立博物館

プログラム

13:30 開会挨拶 河合隼雄

記念講演

ジャック・アタリ

「グローバリゼーションと文化の多様性」

グローバリゼーションは人類をどこへ連れて行こうとしているのか。その中で、文化多様性を確保する努力にいかなる意義があり、また、その努力が実を結ぶためには、何が必要なのか。

李 御寧 (イ・オリョン)

「虹の色は何色か? - 東アジア文化の同質性の崩壊と多様性を考える -」

東アジア文化では、陰陽五行説をもとにして、色彩・音階・方向などは五分節になっている。だが、五色の虹の色が、近代化とグローバル化にともなって、七色とさらに数百万色に変わっていく。方角を表す言葉も、英語の影響で「東北アジア」が「北東アジア」に変わっている。アジア地域文化の解体と崩壊のさなかで、日本、中国では「韓流」と呼ばれている韓国大衆文化の新しい波がおこり、韓国では日本文化にたいする全面開放政策で新文化現象の多様性を迎えている。果たして東アジア文化の虹の色は何色か?

14:30 休憩

15:00 鼎談 / 津田和明、山崎正和、河合隼雄

17:00 閉会



国立京都国際会館

に本で最初の国立の会議施設として、かつアジアで最初に国際水準を満たした会議施設として、1966年にオープン。以来、数々の歴史的な大舞台を支えている。

●記念講演者及び鼎談出演者プロフィール



ジャック・アタリ

フランス

(作家、プラネット・フィナンス会長、元フランス大統領(ミッテラン)特別顧問、元欧州復興開発銀行(EBRD)総裁)

経済学博士。世界のマイクロファイナンス活動を支援するNGOプラネット・フィナンスを創立し会長を務める。先進技術国際コンサルティング企業A&A社長でもある。79年フランスに飢餓救済のためのNGOアクション・コントロール・ラ・フェム(飢餓対策行動)を組織。81～91年ミッテラン大統領特別顧問、91～93年EBRD初代総裁を務める。フランス語総合誌「レクスプレス」に毎週コラムを担当。



李 御 寧 (イ・オリョン)

韓国

(梨花女子大学校文理大学碩座教授、元韓国文化大臣(初代))

文芸評論家。文学博士。「朝鮮日報」などの新聞社論説委員として活動。梨花女子大学教授、韓国初代文化相、大統領諮問機関「新千年準備委員会」委員長等を歴任。現在中央日報社常任顧問。大韓民国芸術院会員。大韓民国芸術院賞、日本国際交流基金賞などを受賞。著書には、評論、小説、戯曲等作品を収めた『李御寧全集』(30巻)、日本で刊行されベスト・セラーになった『「縮み」志向の日本人』等多数。



津田 和明 (つだ かずあき)

(日本芸術文化振興会理事長、サントリー株式会社顧問)

1957年株式会社寿屋(現サントリー株式会社)に入社。ロンドン支店長、副社長を経て、現在は顧問。関西経済同友会代表幹事、大阪府教育委員会委員、内閣都市再生戦略チーム委員などを経て、現在は関西経済連合会常任理事、文化審議会委員、文部科学省中央教育審議会臨時委員、(財)大阪観光コンベンション協会会長、国土交通省社会資本整備審議会河川分科会委員、国立大学法人大阪大学経営協議会学外委員などの公職についている。



山崎 正和 (やまざき まさかず)

(劇作家、東亜大学長)

関西大学、大阪大学教授を経て、現在東亜大学長を務める。63年「世阿弥」で岸田國士賞を受賞。その後「鷗外 闘う家長」で読売文学賞、「柔らかな個人主義の誕生」で吉野作造賞、「実朝出帆」で芸術祭賞優秀賞など多数受賞。99年紫綬褒章を受章。著書「山崎正和著作集」、戯曲「言葉—アイヒマンを捕まえた男」、評論「社交する人間—ホモ・ソシアビリス」(以上中央公論新社)などがある。



河合 隼雄 (かわい はやお)

(文化庁長官、臨床心理学者)

京都大学名誉教授。国際日本文化研究センター所長を経て、現在、文化庁長官。スイスユング研究所で日本人として初めてユング派分析家の資格を取得。臨床心理学者としての立場から、教育、政治、文化に幅広く貢献。「神話と日本人の心」等著作や論文は多数。

開催記録写真



会場風景



李氏の記念講演



河合文化庁長官の開会挨拶



アタリ氏の記念講演



ユーモアをまじえた討議様子(左から河合、津田、山崎各氏)



李氏のレセプション挨拶



秋篠宮同妃両殿下レセプションでのスナップ



河合氏のレセプション挨拶



レセプションでの歓談



レセプションでの平山氏



秋篠宮殿下のレセプションでのお言葉

記念講演及び鼎談

サマリー

「文化の多様性」をテーマに、内外の著名な文化人や芸術家が語り合う国際文化フォーラム(文化庁、NHK、日本経済新聞社など主催)が11月7日より始まり、国立京都国際会館では、討論「文化の多様性」および開会レセプションが開催された。

はじめに、ジャック・アタリ元フランス大統領特別顧問と李御寧(イ・オリョン)元韓国文化大臣による記念講演が行われた。アタリ氏は「グローバリゼーションと文化の多様性」と題した講演の中で、「グローバリゼーションが進むにつれ、文化は変容への圧力にさらされる。固有の文化を守る努力も大切だが、他文化を受け入れる柔軟さも併せ持たなければならない」と文化の多様性維持の条件について述べた。

また、李御寧氏は「虹の色は何色か?—東アジア文化の同質性の崩壊と多様性を考える」と題して講演を行い、虹を7色と数える以外に、2色や5色、6色で識別する文化もあることを紹介し、是か非かの二項対立で物事をとらえる西洋の思考法で見れば、多様な文化の存在は、それ自体が紛争の火ダネになりかねないと指摘。これにひきかえ、ゲー・チョキ・パーの三者が互いに優劣を分け合う「じゃんけん」の意義を強調。大陸(中国)、半島(韓国)、島(日本)になぞらえて「互いの主張を尊重しつつ共存し合ってきた東アジアの柔軟な知恵に、新しいパラダイム(枠組み)を生む可能性がありそうだ」と述べた。

続いて、津田和明・日本芸術文化振興会理事長、山崎正和・東亜大学長、河合隼雄・文化庁長官による鼎(てい)談があり、その中で山崎氏が文化と文明の違いを、「文明は人類に普遍的なもので一つに収束していく。一方で、文化は多様さを持つ」と豊富な具体例を挙げて鮮やかに弁別した。一方、津田氏は現代の人々が歌舞伎や文楽に興味を持つことができるように国立劇場や文楽劇場で行われている取り組みや、川柳や相撲が様々な変遷を経て現代に息づいている事例を紹介しながら、「古い伝統を残しながら新しい智恵を取り込むことで、伝統が続いていく。それにより日本の文化の多様性を保つことにつながるのではないか」と発言。河合氏は「医学の進歩で多くの命が救われるようになった一方で、人知の限りを尽くしても直せない病気が増えている。これは近代化という科学万能主義に対する、人間の生物としての精いっぱい抵抗の表れではないか」と問題提起。併せて理想だけでは片づけられない人間の深淵な部分への目配りを促した。

同フォーラムは秋篠宮同妃両殿下のご臨席を賜り、約300名の傍聴者が熱心に聞き入っていた。

討論 「文化の多様性」

記念講演

グローバリゼーションと文化の多様性

ジャック・アタリ

作家、プラネット・ファイナンス会長、元フランス大統領(ミッテラン)特別顧問、
元欧州復興開発銀行(EBRD)総裁

今回、この素晴らしい討論会にお招きいただきましたことに対しお礼を申し上げます。経済とコミュニケーション手段のグローバリゼーションが進む中で、文化の多様性を維持することが可能かどうかという大変興味深く、しかも難しいテーマについてお話する機会をいただきありがとうございます。文化の多様性を維持することは可能でしょうか？それとも世界は、市場、そしてそうした市場を形成する物を中心として、専ら目先のことのみを考え、過去を忘れ、物質主義に徹した統一文明への道を歩むのでしょうか？あるいは世界共通の文明のために文化の多様性は姿を消し、あらゆる人間が団結し、尊敬し合うようになるのでしょうか？はたまた、文化の多様性の擁護が、民主主義や市場の拒否、宗教的蒙昧主義の維持、強者による弱者の支配、男性による女性の支配、そして富める者による貧しき者の支配の口実に用いられるのでしょうか？それとも、万人に資する方向で文化の多様化が進み、人々は多様性を維持しつつ他者から学ぶことができるようになるのでしょうか？

グローバリゼーションは今に始まったことではありません。いつの時代にも、社会と社会の間には交流とコミュニケーションが存在し、共に世界について考え、意見を交換してきました。社会はこうした交流を通じてお互いに文化を吸収し、その結果、滅ぼされることもありました。新たな文化を運ぶ旅人が同時に侵略者であれば、旅人は死をもたらず存在となります。

将来についても同じ質問を投げかけることができます。動物の種や文明の場合と同じように、多様性は必然的に失われるのでしょうか？それとも逆に、新たな社会が生まれるのでしょうか？数々の言語が失われるとともに文化、生活様式、過去と未来も失われ、新たな文化や生活様式が生まれ、地球語が定着するのでしょうか？言語、文化、文明の誕生と盛衰の条件が何であるかを確実に知る者はいません。ましてや、ある文明が他の文明を凌駕する際の条件などわかりません。いつの時代にあっても、文化は他の文化に対して支配的になります。たとえば、戦後アメリカ人が日本社会に対して行ったように、征服者が法律を押しつけることもありますし、敗者が勝者を支配するようになったケースもあります。たとえば、ギリシャ人はローマ人に、ローマ人はガリア人にその価値観を押し付けました。そしてローマ人を制したモンゴル人とトルコ人は、ローマ人の文化を取り入れました。

日本人は、フランス人を含む古い文化の擁護者と同じように、その文化的特性を構成する要素が失われかねないという危険を感じています。今日に至るまで、私たちは激しい変化の中であって不動の立場を貫き、自己同一性を維持することができました。私たちは力のある強国から軍事的・経済的攻撃や侵略を受けましたが、それでも私たちの文化が屈することはありませんでした。もちろん、そうした力に抗うことなく、大過に吞まれて消えていった文化もありました。新たに生まれた文化もあれば、長きにわたり姿を消した後で復活した文化もありました。こうした社会の交流、暴力、そして滅

亡の場のひとつがシルクロードでした。

今、4つの動きがせめぎ合っています。第1の動きは、市場経済における文化の画一化につながるもので、市場と時間は多様化するが、地理的・文化的多様性は失われます。第2の動きは、民主主義の法則によって、これまで抑圧されてきた新たな文化の出現と多様化の進展をもたらすもので、第3の動きは、グローバリゼーションを通じて、既存文化の異種交配との出会いにより文化を生み出すものです。そして第4の動きは、支配的な文化を認めず、グローバリゼーションを拒否し、経済と文化における対立に至る道です。どの動きが優勢になるかによって、4通りの未来が考えられます。つまり同一文化間の争い、異文化間の争い、多様性の復活によるガバナンスに至る狭い道、あるいは地球上の文化の異種交配によるガバナンスの4つです。

4つの動き

・ 第1の動き：グローバリゼーションは市場の普遍化につながり、市場製品の多様化の中で文化の融合をもたらす

市場のグローバリゼーションによって、市場以外の存在は多様性を失い、代わりに通貨の不均衡、不安定、市場の流動化が生じます。さらに貧困層が市場を構成することから、貧困層が市場に参入するようになります。富裕層向けの製品と並んで開発される貧困層向けの新製品を見ればわかりますが、そこには、文化的特色がまったくありません。この新市場に特化され、美的要素が盛り込まれた製品の出現とともに、ユニークな成功モデル、事物の集積、死への独特の反応、そしてエンターテインメントが登場します。最初に登場するのは米国の文化であると同時に、様々な要素の混合体でもある文化です。住民の5分の1が外国生まれという米国は、米国での暮らしを求めてやってきた移民や世界中の人々に米国特有の文化と生活様式を押しつけます。中国では、ルールもなく、反対する勢力もない状態で資本主義が導入されました。20年後には西欧並の生活水準になることを目指し、何の調整策も取らずに世界的規模で市場の独占を進めています。これは中国から始まり、次はインドへと進む資本主義のアジア化につながります。

また熱湯と冷水を混ぜ合わせてぬるま湯にするような均質化ももたらします。

これはそれほど悪いことではありません。均質な言語、均質な知識、相互理解、相互尊重、そして人類全体への帰属意識を強め、地球規模の環境政策や種の保護政策を立ち上げるには、均質的である方がうまく行きます。こうした社会を構成するのは似た者同士ですから、争いもありません。民主主義国2カ国の間で紛争が起こったことはありません。したがって、世界の平和を実現することができます。

しかし、同時に最悪の事態も考えられます。すべてが画一化するということは、文化や食習慣の特色も失われることを意味します。音楽も映画も画一化し、都市、ホテル、都市計画、文化、音楽、芸術、統治形態、乗り物の特徴なども見分けがつかなくなります。たとえば、その土地ならではの料理がそうです。東京で、一部の人々が「フランス料理」と呼ぶものを味わい、パリで「日本料理」とされているものを口にしてみれば、画一化の意味するところがわかります。こうした動きは多様性にもつながりますが、文化的・地理的多様性ではなく、市場の多様性、時間的な多様性であり、新しい事物の圧倒的な影響力によって文化的多様性は消失し、人と物の頻繁な往来の一般化という形で新たな多様性が生まれます。これはグローバルな多様性、時間的な多様性であり、地理的多様性ではありません。市場は絶えず新たな製品、エンターテインメント、音楽、料理を求めます。多国籍企業は今なお地域

に合わせた製品戦略を求められ、地域文化の要請への対応を迫られてはいますが、ますます普遍化する製品や、目まぐるしく変化し、入れ替わり、画一化と同時に多岐化する嗜好という間接的な要因によって文化の一極化が進みます。音楽の多様性は、もはや国立音楽学校の併殺によって保たれるのではなく、新しい様式とリズムの登場に支えられています。

最後に市場で唯一多様性が認められるのは、収入と資産の格差です。そして文化の多様性に代わるものは文化的消費の格差でしょう。こうして、進歩の原動力であり暴動の要因である不平等が多様性にとって代わります。

・ 第2の動き：グローバリゼーションは民主主義の一般化につながり、新たな文化的多様性をもたらす

植民地の開放によって国家的・文化的同一性が新たに芽生えました。同様に、民主主義の一般化に伴い新たな文化的同一性の復活がもたらされ、新しい文化が登場し、独裁政権により崩壊した古い文化が復活しました。東欧や中央アジアの国々はすべて国家の同一性を取り戻しました。ラテン・アメリカでも事情は同じです。1世紀の間に国家の数は倍増し、今も増え続けています。さらに各国国内では、市場と独裁政権によって破壊されつつあった地域や先住民の文化が民主主義によって復活しています。アフリカをはじめとする地域では国の数が激増し、1,000に及ぶこともないとは言えません。

また、新しいテクノロジーが少数民族の文化の擁護に一役買い、映画、書籍、新聞等を希少言語で、しかも格安の費用で製作し、配布できるようになることが予想されます。

古くから存在する民主主義国の中では、人口の多い国の方が文化の維持に長けており、海外から大学教員、知識人、芸術家、科学者等のエリートを引きつけています。こうした国々では定住者がノマド(非定住者)を歓迎し、概ね地域文化が繁栄しています。

そのうえ、個人レベルでの多様化も進んでいます。また理解するだけでなく、身をもって取り組みたいという願望が強まり、これが新たな創意工夫に結びついています。これに加えて、無償サービスの登場によって多様化が進み、様々な注文の可能性も開けてきます。たとえば、音楽や映画の中には、自分で聴き、ミキシングし、自分の作品として創ることのできるものがあります。これはもはや文化の多様性ではなく、個人の多様性であり、一人ひとりが異なるということで、文化としてのまとまりはありません。新世代の日本人とフランス人は、旧世代の日本人とフランス人よりも共通点が多いはずです。

・ 第3の動き：市場と民主主義のグローバル化が時間的・地理的多様性の交雑による異種交配の多様化をもたらす

この場合、グローバリゼーションや市場開放の自然律、未知の多様性の出現などが原動力となります。この二重のグローバリゼーションは、自由な通行や流通によって交雑すると思われる異文化間の交配を通じて新たな多様性を生み出します。人間について見てみると、混血の結果、体つきが一様ではありません。交雑しないグループでは欠陥の蓄積を免れないのに、交雑からはその都度多様性が生まれます。

世界中からやってきた人々で構成される米国は、ヒスパニック系やアジア系との混血など、混血のグローバリゼーションに向う大異変を示す最初の実例です。日本、中国、そしてスペインを結ぶ不思議な絆、17世紀に見られたような権力の台頭。

・ 第4の動き：文化の閉塞化

上述の3つの動きは、様々な文化の出会いや西欧モデルにもとづく市場と民主主義の一般化に通じる道です。恐らくは市場論理の支配が市場を制するという方向でしょう。でもそうした動きを拒んだり、その犠牲になる者は全力でこの変化を阻止するでしょう。なぜなら個人レベルでの多様性は実現しても、古くから受け継がれた多様性や過去の文化を保存するという側面は犠牲になるからです。したがって、過去にグローバリゼーションがこうしたリスクをもたらすと見なされた場合と同じように、人々は焦燥感を募らせ、閉塞や要塞化を期待するようになると思われます。そして市場の動きも閉鎖、拒否、保護の方向に向かいます。雑婚や異文化との共存の拒否、そして閉塞の先には孤立による死が待っています。

すでに18世紀末、19世紀末、そして20世紀半ばにこうした動きが見られました。その結果、グローバリゼーションに失敗し、戦争に至ったのです。今日でも同じように文化間の戦い、文化を原因とする戦いは起こり得るでしょう。というより確実に起こるでしょう。イスラム世界と西欧、アジアとイスラム世界、アジアと西欧の間の戦いです。

4通りの未来

上記4つの動きがせめぎあう間は、あらゆる可能性が残されています。多様性の消失は既定の事実ではありません。多様性が失われるかどうかは市場と民主主義の相対的な力にかかっています。そこで4通りの未来が考えられますが、このうち2つはとくに危険性の高いシナリオです。

・ 同一文化間の争い。

原則として、市場では発展モデル、願望、そして野心の画一化によって暴力がなくなると考えられます。ところが、これほど当てにならないことはありません。文化的背景が異なる者同士は、求めるものが違うために対立することはありません。ところが共通性の高い者同士は、エネルギー、水、現金、情報などの希少資源をめぐる対抗するのです。民主主義国の中で戦争が起こった試しはありませんが、希少資源の支配をめぐる争いの例はあります。つまりグローバリゼーションの支配をめぐる争いです。これからは富の独占と格差を原因とする争いが見られるでしょう。富裕層はトーチカ[要塞]に立てこもり、定住者はニマド(非定住者)から身を守るために防御壁の後ろに身を潜めるでしょう。こうした戦いを最も制しやすい立場にあるのが米国です。

・ 異文化間の争い

異文化間の争いは、市場と、市場を拒否する者との対立であると同時に、文明を獲得した者が引き起こす文明間の対立であると解釈することができます。このような争いは反グローバリゼーション運動からテロリズムに転じるでしょう。そこでは最も自由な社会が、その自由な文化を拒否する社会から文化を守るために独裁的な権力を振るうことになります。そして民主主義を守るという口実のもとに独裁が根付き、文化の保護が権力増強の口実になります。こうした戦いを最も制しやすい立場にあるのがアジアです。

・ 異種交配によるガバナンス

個人レベルでの異種交配によって結ばれた単一世界は、各個人がその居場所を見つけられる地球社会につながる可能性があります。ここでは、個人があらゆる文化の要素を取り込み、ノマド型の何処

にでも運べる個の文化、個人ともに生まれて途絶え、全体を構成する要素となる文化を紡ぎ出すでしょう。したがって、文化はもはや集団的なメカニズムではなく、個人の自己同一性を構成する要素であり、地球規模での異種交配が実現するのです。別にサイエンス・フィクションを開かなくても、バイオテクノロジーからナノテクノロジーに至るまで、未来のテクノロジーがこの変化を後押しするであろうことは想像に難くありません。これが長続きするためには、地球規模の政府の条件を整えなければなりません。この政府はいつの日か出現して文化共存の環境を整え、通行や流通の自由を認め、そこでは各個人がノマドに戻り、ノマド同士で異種交配を進めるのです。

・ 多様性によるガバナンス

4番目の未来は、政治・経済両面におけるグローバリゼーションが成功し、様々な文化が共存するというシナリオですが、地球規模での異種交配ではなく、複数の文化と国家の共存です。この中にはノマドも定住者も、開かれた社会も含まれます。

このシナリオで生き残るのは、ノマディズム(移動主義)と定住主義、開放と閉鎖の兼ね合いを図ることができる社会です。ソ連社会が崩壊したように、余りにも閉鎖的な社会は滅亡します。米国モデルが蔓延する社会すべてのように、過度に開放的な社会も終焉を迎えます。過去を守らずして存続する文化はありません。どのような文化であっても、過去を守らなければ途絶えてしまいます。外部からの影響や貢献を受け入れない文化は生き残ることがありません。いかなる定住文明もノマドで溢れば存続不能になりますが、ノマドを完全に閉め出しても生き残ることはできません。ですから文化の保護というのは、異文化に開放的であると同時に、国内文化の存在策を導入することが前提となります。この場合博物館のような形ではなく、斬新かつ革新的で普遍的な取り組みを国内消費者向けだけでなく海外にも提供する基盤として文化を存続させるのです。このために、文化、教育、研究を対象として大規模な助成を行います。割当政策と言語の保護により、限られた者の手にメディアが集中するのを防ぎ、国内の創造活動を奨励する政策です。

特殊な日仏のケース

こうした問題の最中であって、文化的同一性を守り抜き、次いで自らを開放し、再び閉鎖した後に世界を受け入れたフランスと日本は、近代性と伝統の合流点に留まらない限り、その同一性を維持することはできないでしょう。そのためには移民を受入れる一方で、民族共同体が併存する国にはならず、異文化の蔓延を食い止めるだけでなく、固有の文化を存続させることが可能でなければなりません。過去の歴史のみならず理想を踏まえて未来を打ち出し、創造し、築いていくことによって、フランスと日本は今後も不動のモデルとなり続けるでしょう。

討論 「文化の多様性」

記念講演

東アジア文化の多様性

李 御 寧 (イ・オリョン)

梨花女子大学校文理大学碩座教授、元韓国文化大臣(初代)

西向くサムライ

今は11月です。日本では2月、4月、6月、9月、11月、小の月を覚えるとき「西向く侍」と言いました。11月の十と一の漢字を合わせると、士という文字になるので「侍」と呼んだわけです。江戸時代には、十一月十一日を侍の日として記念したという話もあります。

日本人がいかに記念日を好んでいたのか、また大阪商人の符丁のように、意味のない数字を言葉に代える機知がいかにも日本文化らしい特性を表しています。

なによりも注目に値するのは、士をサムライと呼んだことです。偶然に作られた言葉ですが、特に意味深長なのは、西を向いているサムライ。最近人気のハリウッド映画の『ラストサムライ』の姿です。

中国では言うまでもなく、同じ漢字を使う韓国では、士と言えば、文士を意味する「ソンビ」のことです。しかし、日本では武士とか戦士の士であったのです。

『説文』には、孔子曰く「十を推して一に合するを士と為す」という言葉が引用されていますが、白川静の説では、「士は鉞の刃部を下にしておく形で、戦士階級を意味したものである」と推定されています。真否はさておいても、士の文字からすぐ、「筆を考える人」と「刀をイメージする人」の違いは、今日のトピックスである「文化の多様性」を解く重要な鍵であることを示唆しています。

文治教化と文明開化の文化

ギリシャに侵入した蛮族が略奪品を持ち帰るときに「本はそのまま置いて行こう。これが彼らの力を弱くするものであるから」といった話は、ハロルド・イニスがメディア論を語るときに引用しましたが、今は反対に、文化のメディアが刀を制圧する時代が変わりつつあります。

文化をソーシャル・キャピタルとみなし未来の歴史と文明を動かすものと予測している学者(フランス・フクヤマ)や、軍事力のハード・パワーに対して、文化の魅力を意味するソフト・パワーを強調している教授(ジョセフ・ナイ)の意見がそうです。

もともと東アジアで使われた「文化」という言葉は、「文治教化」の縮約語です。刑罰とか武力によらず、文を教えて人を治めるといった概念です。壬辰倭乱(日本では文禄慶長の役と呼んでいますが)で、韓国の士であるソンビは、豊臣のサムライに敗れて悲惨な目にあいましたが、相変わらず文で武を抑える「文勝之効」を断念しなかったのです。その結果、兵馬を忠孝に変える戦略として、徳川幕府の朱子学が誕生し、12回にわたって朝鮮通信使を受け入れ、戦国時代のパワー・ポリティクスがモラル・ポリティクスにシフトされ、250年間の「パックス徳川」の時代が開かれます。

そして19世紀に入ると、文化という言葉が年号にまでのぼります(光格・仁孝両天皇の代：1804－1818)。『易経』の賁卦「勸乎天文以察時變、勸乎人文以化成天下」からとったものと言われています。

鴻瀨館と鹿鳴館

しかし幕末の日本では「文治教化」の「文化」が「文明開化」を意味する文化になり、次第に富国強兵の「西向くサムライ」に変わっていきます。最近まで西洋風の便利な生活様式を意味する「文化住宅」や「文化施設」といった言葉がその名残と言えます。

蕪村の「白梅や墨み香しき鴻瀨館」の文化に対する、ガス灯の光でダンスを踊る鹿鳴館の文化です。よくご存知のとおり、鴻瀨館は中国や朝鮮からの使節を接待するために平安京などに設けられた宿舎です。一方、鹿鳴館は西洋の使臣を接待するために東京の麹町に建てられた明治の社交場でした。

とは言え、欧化主義のシンボルであった「文明開化」や鹿鳴館の名は、実はみな2000年も前の『易経』や『書経』から由来したものです。特に驚くことは、外交官出身の中井桜州が名づけたという「鹿鳴」は、『詩経』から取った言葉で、官吏登用の科挙試験に合格し都に上る人を送るための「宴会」を意味したものでした。

科挙と言えば、宦官と共に日本の武家社会では受け入れられなかった制度です。日本が中国、韓国よりはむしろ、西洋の封建領主制に近い独自の文明を持っていたという裏書きとして、よく引合いに出されます。

日本は東アジアの極東ではなく、西欧の極西にある、と主張している脱アジア論者の立場から見ると、欧化主義のシンボルと言われた鹿鳴館も、依然としてアジア文化の強いきずなを断ち切ることができなかった、ということになります。

そのあと、文化という言葉は、「文治教化」でも「文明開化」でもない、西洋のカルチャーの概念で換骨奪胎した訳語に変わってしまいます。今、私たちが使っている文化という言葉のルーツは、中国の四書三経ではなく、ブルックハルトの「イタリアの文化とルネッサンス」であるということです。

150もある文化の定義

今、私はこの場で、クラックホーンの調査でも明らかにされているように、150を超えるという複雑なカルチャーの定義にこだわることは不可能です。また2000年以上の東アジア文化の関係を、たった40分の間で説明しようとするのは愚かなこととしか思いません。

今、私たちが使っている西洋の「文化」の意味によると、この地球上には3000くらいの違った文化を持った人種が200足らずの国に住んでおり、東西の冷戦後ほぼその3分の1くらいの国が紛争、または内乱状態にあるということです。

富国強兵を目指した世紀には、政治・経済が紛争を起こすタネでしたが、今世紀では文化・文明がそのヒキガネだと言われています。真であれ否であれ、ハンチントンの文明衝突論が台風の目になったのも、その理由からです。皮肉的にも、グローバリズムの象徴として登場したWWWは「ワールド・ワイド・ウェブ」でなく、イラク戦争に見られるような「ワールド・ワイド・ワー」とも読まれているのです。

しかし政治・経済の衝突に対してはいろんな対応とノウハウを持っていた人たちも、文化・文明の衝突に対しては、文化相対主義か文化普遍主義かの2つの選択肢しか持っていない状況なのです。あるいは、文明と文化の定義を囲んでの論争です。

「文化の多様性」もそのうちの1つです。大雑把に言うと、文化というものは、集団の構成によってみな違う非合理的なものですから、お互いに相対的価値の多様性を認めながら、仲良く暮らしていきましょう、ということです。ここでもっとも重要になる徳目は、トレランス(寛容)というものです。

しかし文化普遍主義論者は、すべての紛争は閉鎖的な因習と偏見の主観性から起こるものであるから、それを乗り越える普遍的価値の文化によって、グローバルなスタンダードの中で生きていきましょう、というわけです。このような「多」と「一」の二項対立的な考え方そのものが、実は西洋の文化と文明の根っこに内在しているものと見られています。

ゲーテはその面において、東アジア文化の粋をよく看破した西欧の知性人でした。彼は『西東詩集』で、「二つであり、一つであるイチヨウの葉は東洋の知恵」と言ったのです。

最近、Freedom Houseの調査では、全世界の192ヶ国の3分の2が、選挙民主主義を志向しています。そのうちイスラム教徒が多数を占めている47ヶ国の4分の1だけが、選挙民主主義国家です。しかし世界価値観調査(World Values Survey, WVS2000~2002)のアンケート調査によると、宗教や文化の違いに関係なく、民主主義を最善の政府体制と思っていることが明らかになっています。文化普遍論者が正しいと思われる部分です。

しかし女性の平等に関しては、イスラムの人たちはみな否定的で意識が変わっていません。デモス(demos)よりはエロス(eros)のほうが、文化相対性にかかわっているのです。すなわち、文化の普遍性と相対性の問題で争うことは、ちょうど虹の色は何色かの問題で争うのと同じことです。

バイブルの虹は、神と人間の和解、大空に書かれた美しい平和協定のサインですが、現実には、虹の色をめぐる戦争が起こっているのです。

虹の色は何色か

時間と空間の文化の差を見る人によって、虹の色は違ってきます。ギリシャのアリストテレスのような大碩学も虹は4色、セネカは5色、マルケッリヌスで6色です。

国によってもまちまちで、言語学者の鈴木孝夫さんの調べによると、バサ(Bassa)語の2色、ショナ(Shona)語の3色から西洋の6色、7色まで、それこそ多様多色であります。

しかしこれらはみな色彩文化における相対的分節の仕方です、どちらが正しいとも言えないものです。仮に虹の色を2色に分けている場合でも、間違いとは言えません。と言うのは、現在の進んだ植物学でも、あらゆる花の色を青色系と黄色系の2色に分けているからです。しかしニュートンのプリズムの実験によって虹の色は7色になり、今日では世界中の学校で、理科の時間にみな7色と教えているのです。しかしほんとうに虹は7色でしょうか。普遍的な科学の勝利でしょうか。

ニュートンは、よくご存知のように、イギリス人で信仰心の強いクリスチャンでした。神様が7日間に天地を創造したという七分節のキリスト教の文明圏に慣れていましたので、目の前に現れた太陽の光は、無限に近い色に分光されたものなのに、7色と分けただけなのです。

東アジアでは、五行の思想からすべてのものを五分節で記号化しています。西欧の音楽が7音階で、アジア系の音楽が5音階であるのも、同じ文化のパラダイムによるものです。

今でも韓国の歌手が歌う歌詞には「五色の虹が——」というのがあります。五方色の民俗伝統が残っているからです。学校で、虹の色が7色であると教えられているのは、科学でなく、西洋の近代産業文明をグローバル・スタンダードとして受け入れているだけの話です。コンピュータを使用している今の時代には、虹の色は何万何億に分かれていることが知られています。

虹の色は何色かという問題には続きがあります。韓国や日本の人は、青色と緑色を分けません。だから、交通信号はグローバルなものですが、欧米ではグリーン・サインと言うのを、私たちは青信号と言っているのです。

「赤い鳥小鳥、なぜなぜ赤い。赤い実をたべた。青い鳥小鳥、なぜなぜ青い。青い実をたべた」は、決して普遍的な科学にはなりません。青い実を食べて青くなったというのが非科学的というのではなく、鳥は青いと言っているけど、木の実は緑色だからです。

それと同じく、欧米文化では藍と青を区別しません。藍をインディゴ・ブルーと言うのからもわかります。また文化によって、青の色彩感覚も違います。東アジアでは青は青春であり、青雲の夢です。しかし欧米の青は、ブルースとブルー・マンディの憂鬱の色です。ピカソの青年期の絵がそうです。

科学が完全に普遍的なものになるためには、文化そのものを超えなければなりません。

文化とは、その色が何色であれ、虹は1つであるということです。3色であるから虹が3つであり、7色であるから7つの虹がある、とは言えません。色々な色を持った1つの虹、これこそが多様性を持った普遍的統一性を持った文化のあり方であります。その点において、ギリシャ人が自然界(Physis)、記号界(semiosis)、ノモス(制度:nomos)の3領域に分けて考えたように、文化はちょうど言語と同じく、自然界とノモスの両極端の中間に位置するセミオシスに属するものであると言えます。

そうです。東アジアの文化は「文化」という言葉そのものの変遷に反映されていると言えます。また同じ士という漢字を使いながらも、韓国では「ソンビ」、日本では「サムライ」と自国の固有な言葉で呼んできたことを、もういちど思い出してください。

そして自分の国を世界の中心であると考えた中華文化が、いかに巨大な影響力があっても、東アジアの文化はけっして一国中心主義の漢字文化では、割り切れない多様性を持っていることを確認していただきたいのです。

それと同時に、士という漢字をお互いに共有しているという同一性に対しても、考えてほしいのです。

英文で書かれた新渡戸稲造の『武士道』は、日本特異な文化として西洋人によく読まれています。ところが、実際に書かれている侍の心とその精神は、神道に限らず、信義、忠誠、礼儀、潔白、質素など、儒教、仏教、道教に通底しているものが多く書かれています。

一言で言えば、東アジア地域文化に潜在している力は、同質性の中の異質性、異質性の中の同質性の矛盾と緊張感を調和した融通性にあり、そこから文化の多様性と創造性が生まれている、ということです。

つまり、アメリカの文化がグローバル・スタンダードになり、インターネットの80パーセントを英語が占めている今日でも、東アジアの地域文化は依然として多様性は持った虹で、グローバルな宇宙を描いているのです。

冬のソナタの韓流とは

いま東アジアの空に浮かんだ虹の1つが、『冬のソナタ』の「韓流」文化です。日本のワードでカンリュウを打つと「還流」とか「寒流」しか変換できない新しい言葉です。

この言葉は、中国の若者たちの間に熱風を巻き起こした韓国のTVドラマや大衆歌謡のブームに対する警告として、1999年11月に『北京青年報』で使われた新聞用語でした。「韓流」には寒流の意味が隠し絵にされていたのですね。

日本の大衆文化に熱狂する台湾の若者を、日射病を思わせる「哈日族」と名づけたのと同じ現象です。

韓国の文化は「哈韓族」はマラリヤなどで寒さに震える病症のイメージです。どちらになっても中国の既成人たちは、中国の文化、価値観など生活文化のアイデンティティを損なうと心配していたわけです。温湯、冷湯が健康にいいように中国を開かれた社会にして経済発展を促したと言えます。

学校で習う公式の虹の色と、個人個人が生活の場から習う虹の色にはずれがあるように、ポップ・カルチャーは、警告にもかかわらず、広がって行きます。韓国が半世紀以上、日本の大衆文化に対して門戸を閉ざしていたのも、文化を自国文化のアイデンティティを守る土堤と考えていたからです。

またはイスラエル人が、ワーグナーの音楽を聴いてホロコーストの悪夢にとらえられるように、日本の大衆文化が過去の歴史の痛い傷あとに触れるとと思っていたからです。それとまた、世界の市場に新しく浮かんでくる、文化産業における競争力の弱さを補強するには、温室が必要でもあったのです。

しかし大衆文化は、市場の原理と同じく、開放と自生力を持って広がって行きます。「韓流」は、人為的な操作、マニピレーションでは手に負えない、ということをお互いの国の人々に教えてくれたわけです。

今年に入って韓国は、日本の大衆文化に対して全面開放しました。と共に日本では、『冬のソナタ』が空前のヒットになり、韓国のテレビ・ドラマや映画などの「韓流」が流れています。

今まで大衆文化は、若者(青年文化)、ハリウッド(欧米文化)、反文化(counter culture)の三拍子であったのですが、『冬のソナタ』のブームが見せたポップ・カルチャーは、シニアの主婦、韓国(アジアの都市と自然)、ゼンダ文化の新しいエイジアン・クールの流れが始まったものです。日本における『冬のソナタ』の韓流は他者としての韓国を認識しながら、同時に日本が失った自国の文化の目を覚まさせたとも言えるでしょう。

日本の主婦は子供を失ったときは、「トンボつり今日はどこまでいったやら」と歌い、夫を失ったときは「寝てみて起きて見ても蚊帳の広さよ」と悲しんだ加賀の千代女の涙の美学、欲情の愛ではなく、生きとし生きるものに対する深い愛とやさしさの歌を盛り返したのです。

古いアジアの心にたどり着いた韓国人と日本人の間には、もう玄界灘は存在しなかったのです。

とは言え、『韓流』といっても、同じアジア圏であっても、そのとらえ方にはお互いの文化によって、違った特徴を見せています。ヨンサマの顔は、きめ細かく清潔さがあり、「きれい」ですね。線が太く荒削りの韓国型というよりは、日本型です。おかしな話ですが「日本の俳優にはあまり見られない「日本型」です。他者の中の私、異国の中の自国です。

また、冬という北志向の叙情も日本的です。「トンネルを越えると雪国」ではなく「ヨンサマがあった」んです。

日本の歌には、都はるみの『北の宿から』のヒット曲に見られるように、恋に破れた女性が北の国を旅行しながら傷を癒す、といった北志向の情緒が多いと指摘されてきました。

社会学者の山本明氏の「風俗の論理」などにも、日本人の北志向に対する研究があります。茶の間の韓国ドラマは、日本文化でタビングされたものでもあるのです。そこに韓国では見られない日本独特な商業文化が加勢して、「韓流」はCFをはじめメディア観光、キャラクター、あらゆるマーケットに強い影響を及ぼしたのです。「ヨンサマ」のCFのギャラは、アランドロン以来の最高額をマークしました。

『冬のソナタ』は、平原に現れたキリマンジャロではありません。歌謡界の「ボア」、映画の『シュリ』などの韓国と日本を結ぶ文化の山脈から、浮かび上がった山、というのが正しい見方でしょう。

ハンチントンの「文明の衝突」を掲載した同じ『フォーリン・アフェアズ』のある論文で指摘されているように、失われた10年と言われていますが、そのあいだに日本は経済大国から知らぬ間に文化大国になっていたのです。

たった一編のドラマとたった1人の「ヨンサマ」が、日韓の民衆の心を変えたのは、政治・経済のバ

ラダイムから離れ、自由に文化の多様性を受け入れる、新しい大衆が生まれてきたのです。

「かれの国、わたしは韓国が大好きだ」というキャッチ・フレーズと共に、韓国の撮影舞台を訪問し、ハンゲルを学び、キムチとビビンバを食べる数多い日本人が現れたことは、嫌韓論を生んだ政治・経済のパラダイムが、好韓論の文化・文明のパラダイムにシフトされたことを意味します。

決して過小評価したり一方的異常現象ととらえたりすることはできません。「韓流」は脱アジアから実に100年以上かかった文化の節目の変わり目を象徴しています。もちろん同じことが、韓国の若者たちの大衆文化にも現れています。

日本のアニメ、ピカチュウ、そうです。モンスターと言えば、キングコング、シンドバッド、恐竜など、みんな力強く巨大なものでした。だけど、ポケット・モンスターは懐に入る小さい、小さい、かわいい怪物です。日本文化であるから受け入れたのではありません。楽しいから、世界の子供にアピールしたのです。日本的でありながら普遍的なものです。

世界を制したミッキー・マウスは英語ですが、電気ネズミに進化したピカチュウはピカリと光るといふ擬態語とチュウチュウと鳴くネズミの擬声語からきたものと思われるグローバルな性格を持っています。これもエイジアン・クルの1つです。

そして東アジア文化のコアである「円融会通」の古いエンジンが、新しい音をたてて動き始めたのです。

飛鳥をなぜ明日香と読んだのか

日本文化の源流である飛鳥文化を、漢字で飛ぶ鳥と書いて、なぜ「あすか」と読んでいるのでしょうか。なぜまた明日香とも表記しているのでしょうか。飛鳥を明日香の地名の枕詞と解釈する人もいますが、無理な話です。しかしこれを日、中、韓の3国の文化の光で照らすと、その闇がきれいに吹き飛んでしまいます。

韓国語では「飛ぶ」という言葉と「日にち」を表す「日」も、同じく「ナル」といいます。そしてまた鳥は「セ」と言いますが、日が明けるという「明」も「セ」と言います。つまり、韓国語では「飛ぶ鳥」も「日が明ける」のも、みな同じ音の「ナルセ」になります。ということは、飛鳥と明日は、同音異語ということですから。それを裏づけているのが、「明日香(飛鳥)川 高川(たかかわ)避(よ)かし越え来しも まこと今夜は明けずも行(ゆ)かぬか」(巻12・2859)という『万葉集』の歌です。

「飛鳥おとこは愛する飛鳥娘に会いに、夕闇の迫る頃、飛鳥川をやっとの思いで渡って行って、その思いをとげた。今夜はほんとうに明けないでほしい」

という意味ですから、飛鳥を夜が明ける「ナルセ」という言葉にかけた歌であるということは明らかです。

そして韓国語の古語では、村を「カオル(골)」と呼んでいましたので、日本語の「香る」と発音が同じです。飛鳥の村を、韓国語で読めば、「날새골」(ナルセカオル)になり、明日香になります。すなわち、明日の村という意味になります。未来の村、新しく開拓した村というシンボルです。また飛鳥びとと言え、明日の人、開拓民の意味にもなるのです。

文字は中国、言葉は韓国語、そして意味は日本語です。そうです。中国、韓国、日本の文化が、1つに調和して未来の村を築いたのが、ほかならぬ「飛鳥」文化と言ってもいいでしょう。

漢字を利用して、新羅ではイド(吏読)を、大和では万葉仮名を作り、さらに韓国人はハンゲル文字を、日本人はかな文字を作り、それぞれ独自の文化を築いてきたのです。

2つの文字を使う文化の意味

そして、日本人と韓国人は、漢字とかな、また漢字とハングルを択一しないで、体系も形も違う2つの文字を併用してきました。

漢字を初めに創ったと言われている、伝説的人物、蒼頡の目は4つあったと言われています。ということは、漢字が視覚的なアイコン文字ということです。アナログ的です。

これに比べて、ハングルとかかな文字は、聴覚的な音声文字で、デジタルと言えます。性格が違う漢字と仮名を対立させ、択一したり排除したりしないで、一緒に包容することによって、日本と韓国は文化の多様性を保ってきたと言えます。

漫画は、視覚の映像と共に聴覚の音も重要な役割をしています。漫画にオノマトペ(擬音語)が多く使われているのを見てもわかります。雪が積もる音まで、「シンシン」とか「コンコン」とか擬声語で表しています。

このように映像と音、そして文字の意味がうまく溶け込まないと、アニメは作れません。またひとコマひとコマの絵は、停止していながら、そのつながりによって、動きが作られています。視覚と聴覚。静と動——すべてのものが反対の一致を示しているのが、アニメの特性です。漢字とハングル、または漢字とかな文字と一緒に併用することは、アニメ文化と同じことで、両立する文化を受容する文化の複合性、文化の寛容性を意味するものと考えても、かまわないと思っています。

中国文化は、同じ漢族でも南と北の地域によって違います。それに元と清の支配と共に流れ込んだモンゴル文化をはじめ、50以上の異民族の文化をより集めたモザイク文化と言えます。

歴代の中国の皇帝は漢族でない異邦人が40パーセントを占め、男女の愛情物語はその大部分が異民族との間で行われていると言います。見方によっては、中国は、多くの違いはありますが、アメリカのような多文化国家と言えるのです。

ハンチントンをはじめ、今、宗教の観点から「文明の衝突」を説いている論客はたくさんおられます。しかし東アジアの文化圏では、宗教の面でも異なった特徴を持っています。一神教のキリスト教に統合されたヨーロッパ文化とは異なって、儒、仏、道の三教がお互いに融合しながら、各自の独自性を失わずに多様性を守ってきたからです。

中国、韓国、日本で見られる三教習合を、卵焼きに喩えると、3つの卵をフライパンで目玉焼きにした形になります。1つ1つがそのままの形を持っている、ゆで卵、あるいは一緒に割ってスクランブルにした卵とは違います。ちょうど黄色い部分は独立した形を保っているが、白い部分だけがお互いにくっついて境界がない形になっています。そこがすなわち、多様性か画一性か、相対性か普遍性か、という二項対立的に切って文化を考えている欧米とは違ったところです。

アジアの寛容と融通性と開放性

「キリスト教が、イギリスや西欧へ行くよりもずっとまえに、ローマでさえそれが異端の国禁の宗教だった間に、インドに伝わったと聞いたら、おまえもおどろくだらう」とネールは息子に話かけています。

「イエスの死後百年ばかりのうちに、キリスト教の伝道団が海をわたって南インドに来たことがあり、かれらは丁重にむかえられ、かれらの新しい信仰を説くことをゆるされた」というのです。

そういうインドでさえ、牛肉を食べる食文化を許さない社会です。社会主義制度を取り入れ、外の文化は固く閉じられていました。最近になって、IT産業などを中心に文化の多様性開放性が進み、

経済も伸び始めました。インドを見ると、経済にもっとも影響を与えるのは、文化の寛容性だということが分かってきます。

その面で、日本はインドとは違います。歴史上長い間、4つ足の獣を口にするのをタブー視した日本ですが、近代化と共に牛肉を食文化に取り入れます。

「西洋のように牛肉を召し上って、大いにエネルギーをおつけ下さるように」と明治天皇に臣下が申し上げた。

それに対して、天皇は

「しかし弘法大師をみよ。僧侶だから野菜ばかり食べていても、あれだけ精力的な大仕事を方々に残されたぞ。だから野菜だけでは仕事ができぬという卿の論拠はあやしい。しかし牛肉を食べるのがよいというのは、理のあることと思えるから、とくと勘考しておこう」と言って、すぐ牛肉を皇室に取り入れるようになったと言います。(木村毅『文明開化』)

そしてまもなく「すき焼き」が日本食の世界ブランドになり、韓国の焼肉料理を取り入れ、西欧並みの牛肉消費国家になりました。松坂牛、神戸牛など、世界でも指折りのおいしい牛肉の産地をほうばうに誕生させたのです。

胃袋は、免疫の面で自分と違った体系のものを取り入れる唯一の器官であります。生理学では、T細胞というもので、トレランスと呼ばれているものです。自分のアイデンティティを失わずに、違った他者を取り込む胃袋の両面価値は、目を中心にした排他的文化、耳を基にした全面受け入れ型の受容型を、同時に乗り越える文化を象徴しています。

今、文化の多様性と文化の一体性をバランスよく調和させているモデルとして、東アジアは世界に貢献する時代を迎えたのです。日韓共催のワールド・カップと日本のソフト・パワー、「韓流」のポップ・カルチャーで、その兆しが見えはじめたという話です。

過去のように中華思想で均一された中国のアジアでは、軍事力で強要した大東亜共栄圏の日本のアジアでは、アジアの文化的多様性は消滅してしまうでしょう。

大陸文化と海洋文化のはさみに存在している「罅」がないと、ジャンケンは絶対できません。表か裏だけで決まるコイン投げのようなものになります。

大陸でも海洋でもないグレイゾンの半島文化があってはじめて、東アジア3国は金銀銅のランキング争いの覇道から、相互作用のバランスによる「三すくみの輪」をなして循環することになります。

ジオ・カルチャーではなく、韓国の民衆文化そのものが両極を包む特性を見せています。日本語の「引き出し」、中国の抽屜も、そして英語のdrawerもみな、外に引き出すという一方的な意味しか持っていませんが、韓国語だけが「ペダジ」という直訳すれば「出し入れ」という言葉になっています。1つ2つの例ではなく、衣食住の生活全般に現れている現象です。拙著『ふろしきで読む日韓文化』をご参照いただければ幸いです。

しかし不幸にも、韓半島は100年間占領されたり、分断されたりして、いまだ半島文化の地域的特性が回復されていません。日本には失われた10年がありましたが、東アジアの視覚から見ると、半島の喪失は失われた100年だと言えます。

統一された韓半島の再出現は、単に韓民族だけの問題ではありません。大陸文化の中国、海洋文化の日本の文化そのものを多様化して、アジアを一国文化が支配する覇権主義から、多様な色を持った美しい虹としてグローバルな空を飾ることになるということです。

外から見ると、今の韓国は強い民族主義の色彩を持った国に見えます。しかしほかの視点から見ると、韓国は今大陸から海洋に、また海洋から大陸に文化を送る変電所の機能から、独自の文化を創り

出す発電所を指向している、動きとも見えます。

「韓流」現象が一時的ポップ・カルチャーに終わらず、ほんとうにアジアのローカル文化の多様性に貢献することができるようになるには、韓半島の回復という大きな問題とかがかかっています。そして過去1000年以上、地球のイニシアティブを握っていた大陸文化と、今に至る200年間を支配してきた海洋文化、この二項対立体系を超えなければ、世界はほんとうに多様なグローバル文化を創れません。

とすると今、英国からはじまった海洋文化が日本に、そしてローマ、モンゴルが支配したユーラシア大陸文化が中国に集中する21世紀の構図では、韓国の半島文化はアジアの半島から世界の半島になる、遠大なビジョンを創っていかねばならないわけです。

歴史家エリック・ボブズボームは、20世紀の世界の歴史を極端な時代と定義しています。21世紀の文化は、それと対照的な釣り合いが取れている均衡の時代にならないと、サバイブができないのです。

もう一度申し上げますが、今は11月です。西向くサムライではありません。

「秋深き隣は何をする人ぞ」と歌った芭蕉の11月です。

今まで知らなかった他者、すぐそばにある隣の人に気がつく晩秋です。肌にしみる寒さが隣に対する関心とその細道を開いて行きます。

世界が同じ寒さを感じる心があることによって、私と隣人の違いは混雑から多様が変わっていきます。葛藤は了解に、雑音は美しい和音になります。それが昔のアジア人が夢見ていた「文治教化の力」です。

討 論

「文化の多様化」

鼎 談

津田和明、山崎正和、河合隼雄

司会 ただいまより第2回国際文化フォーラムを再開致します。後半は鼎談を行います。

それでは講師の皆様をご紹介致します。

日本芸術文化振興会理事長、またサントリー株式会社顧問でいらっしゃいます、津田和明様です。

劇作家、また東亜大学学長でいらっしゃいます、山崎正和様です。

そして文化庁長官、河合隼雄です。

ではここからの進行は河合長官にお任せ致します。どうぞよろしくお願い致します。

河合 どうもお願い致します。先ほどジャック・アタリさんと李御寧さんのお話を聞いて、大変おもしろかったと言いますか、興味深い。それと、そこから色んなことも考えられるようなお話だったと思います。我々はそれも受けまして、そしてまた我々独自の考えも色々ありますが、文化の多様性について鼎談をしたいと思っています。そもそも文化といっても、先ほど李御寧先生が言っておられたけれども、非常に定義も色々である。それからグローバリゼーションだって、定義は色々ですよ。考え方も本当に色々で、単純にみんなが言っているようなことだけではないと、私は思っているのです。一応、とかくグローバリゼーションということが非常に言われている時代である、これは間違いないと思うのです。そういうところで文化、あるいは文化の多様性ということを我々はどう考えるのか、どう考えていくのかということなのですが、先ほどの話も受ける場所もあればですが、そういう点で山崎さんからお話をして頂いたらいいと思います。

時間がたっぷりありますので、幾らしゃべってもらっても大丈夫ですから。(笑)

山崎 グローバリゼーションというのは、このところ10年ばかり、はやりになった言葉だろうと思うんです。その前は「国際化」と言っていました。インターナショナルライゼーションだったのです。じゃあ2つはどう違うのだといいますと、インターナショナルライゼーションの時代、国際化の時代というのはつまり国家の時代であったわけです。その国家が世界を動かす主な力である、あるいはほとんど唯一の力。その国家同士が争ったり仲よくしたり交渉したりして、そして世界を動かしている。これが国際化の時代なんです。今や、国はもちろん大切な仕事をしていますし、かけがえのない存在ですが、世界を動かす力が国だけではなくなった。つまり市場という、あまり顔のはっきり見えないものが今や世界経済を動かしているわけです。アメリカで、要するにウォールストリートで株が落ちると、日本の国民の家計に響くという時代になりました。そのあいだにアメリカ政府も日本政府も別に何も積極的に関与していない。それなのに世界が動く。あるいは国以外の色々な機

関、普通の町の人たちが集まってNGO、文字どおり、ノン・ガバメンタル・オーガニゼーションですか、政府ではない機関というものをつくって、これがお互いに協力をして、人権の問題から環境の問題から、あるいは国際紛争にまで色んな影響力を与えるようになってきた。そうした国家以外のさまざまな力が輻輳（ふくそう）しながら世界を動かすようになったのがグローバリゼーションなんです。現にテレビを中心にメディアが発達する。NGOの人たちが相互に交流し合うということによって、国単位ではなくて世界単位の世論というものができ上がってきている、これが世界を動かすようになってきた。そういう状況をグローバリゼーションと言っているのだと思うのです。

しかし私は、実は今言われているような意味のグローバリゼーション以前に、既に世界の文明というのは大きく1つになっていく強い趨勢と言いますか、傾向を持っていたと思うのです。それは実に長い歴史を持っていて、多分最初はヨーロッパのルネサンス時代であったと思います。その時に現在の我々の生活を決めているというか、支えている色々なものの考え方というものが確立しました。それを私は「文明」と呼んでいます。「文化」ではなくて「文明」なんです。文明とは何か、簡単に言えばものの考え方、世界をどう見るかという見方、そしてそれをさまざまな技術に翻訳したり、あるいは社会の制度として固定したものが文明なんです。そういう観点で見ますと、何も今、アメリカの支配下で世界が1つになっているわけではなくて、ずっと前からその流れは起こっていたわけです。

じゃあ一体どういう文明なのか。ごくわかりやすく言いますと、例えばアラビア数字を使うこと。アラビア数字というのは、今私たちがごく普通に家計簿をつけたり小学校で教えたりしている、あの数字です。「0」というものが入っています。これが今や世界中のどこでも通用するようになりました。それ以前はアラビア数字のほかにローマ数字があったり漢数字があったりして、地域によって違う数字を使っていた。しかし今でも、もちろんそれは残っています。残ってはいますが、どの国民もアラビア数字を理解するようになりました。それに基づいて、実は自然科学というものが発達したわけです。もし「 $1 + 1 = 2$ 」という、ああいう数字がなかったら、自然科学は成立しません。さらに近代簿記です。複式簿記というものもアラビア数字がなければ成り立たなかったでしょう。その数字をもとにして自然科学と簿記が生まれれば、当然工業化ということが始まる、産業ですね。工場モノをつくって、それを1つの組織として売ったり買ったりする企業というものが生まれます。もちろん自然科学の応用編として近代医学というものが生まれ、おかげで私たちは随分命を救われるようになりました。それから、これは良いことか悪いことかはわかりませんが、軍事もまた近代科学によって急速に発展しました。軍事技術ですね。

振り返って考えてみると、今、世界中で西洋歴、今年2004年ですが、2004年といえは今年のことだと理解する人が、おそらく人類の8割、9割を占めていると思います。もちろん暦はまだそれぞれの文化圏で違ったものが使われていますけれども、それはあくまで副次的なものであって、2004年がいつのことかわからないという人は誰もいなくなりました。暦が統一されるということは、実は文明の統一の大きなかぎなんです。それと同時に私たちは時間を数えたり、ものの分量を数えたりする単位、これも今は共有しています。1秒は、それを60足すと1分になり、60分は1時間で、24時間は1日だという、この生活の規則と言いますか、取り決めは恐らくアラブのテロリストでも共有しているはずなんです。そうでないと時限爆弾をかけるのもうまくいきませんからね。そういう生活の単位のような

ものも、もちろん文明です。

同時に近代文明というのは人間の体の苦痛をできるだけ捨てる、小さくするという方向に動いていきました。昔だったら、何しろ麻酔がなかったわけですから、拷問のような手術が行われた。あるいは全然手術ができないから、病気の人が死ぬのに任せていた。しかし麻酔が発達したおかげで、今私たちは昔は治らなかった多くの病気を治すようになりました。苦痛というのは個人のものなんです。これはどんなに親しい友人でも家族でも、人が苦しんでいれば同情はします。しかし本当の苦痛というものを分け持つことはできないわけですから、これは個人のもの。苦痛を救う、苦痛のない生活を営むというのは、実は個人主義の始まりなんです。そこから例えば家族のために個人を犠牲にするのは嫌だとか、間違っているというような考えが生まれます。次第次第に個人というものが基本的な人生の単位であるということが常識になっていて、そこから実は人権という思想も生まれますし、人権を守るためには一番いい政治制度は民主主義だという考え方も生まれてきます。

そういう大きな制度はもちろんのことですが、実は私たちのごく身近な想像力、ものを思い浮かべる力、これも今は普遍化しています。例えば遠近法というのは、皆さんどなたもご存じですね。遠くにあるものは小さく描く、近くのもの大きく描く。しかも単にそれだけではなくて、実は1つの画面の中に焦点になる部分があって、そこへすべての線が集まるように描くと遠近感が出る。これは1つのものの見方だし、見るための技術ですが、これが実は今、世界中に受け入れられています。もしそうでないと日本の漫画がパリの女の子を引きつけるはずがないです。これはイスラムの人であれ、アフリカの人であれ、ロシアの田舎の人であれ、今、遠近法はみんなわかっている。しかしこれは実は西洋のルネサンスに生み出された1つの技術である、それがずっと今、広がっている。

さらに音について言うならば記譜法——音楽を記録する文字というか記号、簡単に言えばドレミファソラシド、及びそれを記述する五線紙のことですが、これも世界中で通用するようになりました。例えば近年になってアジアの音楽ということ言うようになって、中国や韓国や日本の古典芸能、音楽を一緒に合奏しようと。気がついてみたら共通の記譜法がないんです。つまり共通の言葉がない。そこでどうしたか。西洋の楽譜を使って3者が集まって演奏ができるようになった。

これもそうですが、例えばもっとおもしろいのが、これは近代に生まれたものだから当然かもしれませんが、映像の文法というものがあります。例えばテレビをご覧になっても映画をご覧になっても、突然1本の線がしゅーっと画面を消して、突然次の場面に移ります。それを見ると「あ、時間がたったんだな」あるいは「お話変わって」ということだなというのは、誰でもわかるんです。これは本当に今、世界中の人が、その1本の線がしゅーっと消せばワイプという手法であって、「お話変わって」だなとみんな理解しています。

こういうふうに非常に、政治を運営する制度から、軍事技術から、医学から、そしてもの見方まで、今、世界は1つになりつつあるんです。これは何も近年起こったグローバル化とは関係ありません。どのくらいこれが浸透したかという、おもしろいことがあります。こういう動きは別の言い方をすると「近代化」ということになります。近代文明の普及です。もちろん近年になって近代化そのものに反対している人もいます。もっといえばグローバル化に反対する。そういう人たちは、要するに近代化というのは先進国の陰謀

であって、もっと簡単に言ってしまえばアメリカの陰謀だというのですが、それに反対している人がどうしているかを見れば明らかなんです。近代化には反対だけでも、近代的な利便、あるいは技術というものはみんな欲しがっているわけです。恐らく世界の相当頑固なイスラムファンダメンタリストにあっても、じゃあ、あなたの国に近代的な病院をつくってあげましょうか、それともモスクをつくってあげましょうかと言えば、おそらく半数以上の人は病院をつくってくれと言うに違いありません。イラクだって、あるいはアフガニスタンだって、みんな病院がなくなったとって嘆いているわけです。病院を援助してもらったと喜んでるわけです。これは近代化そのものです。

それだけじゃなくて思想的にもかなりおもしろいことが起こっている。先進国に反対する人がどういう理由をもって反対するか。これは不平等だと。あるいは民族差別、弾圧だ、貧困の押しつけだ。だけどこれはすべて近代社会の用語なんです。平等でなければならない、他人を差別したり抑圧してはいけないというのは、これは近代社会の思想です。それをみんな使っています。近代社会に反対するためにも使っている。とてもおもしろいことですが、アメリカや日本をつかまえる。これを大嫌いな北朝鮮。この国の名前がどうなっているか、朝鮮人民民主主義共和国です。3つも近代的な言葉が入っている。例えば日本やアメリカが人権の普及といいますか、実現を求めますと、ときどき反対する人がいる。そういう人が何て言っているか。人権というのは英語でいうとヒューマン・ライツですが、「ヒューマン・ライツはいけない、ピープルズ・ライツ」と訳すると、人民の人権という意味ですが、これにしなきゃいけない。でもやっぱり人権とは言っているわけです。ですから、もっとこっけいな皮肉を言えば、アメリカ帝国主義をぶち壊すためにニューヨークの町に飛行機を突っ込ませたグループがありますが、使ったのはアメリカのボーイングという飛行機なんです。決してやりでもなければ弓矢でもありません。

ですから今や近代化というものは世界文明になっているし、今後ますますそういう傾向を強めていく。この部分について我々はむしろ普遍化と統一というものを求めていかなければいけないだろうと思います。但しそうなったときに文化は別だという話を申し上げたいと思うのですが、あまり1人でしゃべっていますと興ざめですから、ちょっとお話を返します。

河合 文化の多様性というときに、今言われたように、非常に話が甘くなってしまうときがある。多様でいいな、何でもいいというような考えがあるんですが、そういう考え方に対して、まず冷や水をばっとかぶせるということが山崎さんの特徴でして、その水をかぶったところで、津田さん頑張ってください。(笑)

津田 今日の私の役割というのは、立派なこういう本がありますが、本文はみんな山崎先生に書いて頂く。私は挿絵をちょっと入れていくという役目で徹していきたいと思うのです。しかし挿絵担当も少しは言い分があるので、まずはじめに申し上げたいと思います。

控室で先ほど文化と文明について山崎先生にご意見を聞いていたのですが、これを論ずるとこれだけで3時間、あるいは半日、優に使ってしまいそうなので、今のところは申しわけないのですが、私なりに文化と文明の理解について、それをもとに少しお話をさせていただきたいと思うんです。文化というのは人間が自然に対して、あるいは自然と共生して何らかの方法とか考えとか、あるいは衣食住、そういったものすべて文化というのじゃ

ないかと思うんです。そういう意味で考えますと人間ができて以来、文化というのはあるわけでありまして。日本を例にとっても縄文文化、あるいは弥生式文化というふうにして、それぞれの文化をある意味では個人個人で持っていたわけでありまして。そのようにして、そういったものの成果として道具とか考えとかシステムというふうなものが文明じゃないかと思っているんです。そういうふうにして考えてみますと、人類の歴史というのは文化の多様性を決して、どんどん数を減らして均一化するというのか、多様性をなくしつつあって今日まで来ているのじゃないかと思うのです。あるいは先ほど李先生のお話にもありましたように、文明、人間が考え出したいろんな生活の器具、そういったものが便利がいいからということで、人間の生きざまも変わってきていますから、それによる生きざまというのが、そういうふうにして数が減ってきているというのが現実じゃないかと思えます。

例えば私が子供のとき、ちょうど私は山崎先生と小学校に入ったのも卒業したのも同じ学年なんですけど、私どもの子供のころというのは、各家庭は洗濯板というのがあって、石けんをつけてごしごしやったんですが、今は民俗博物館へ行かないとなかなか見当たらない。これは何も日本だけでなしに、東南アジアを旅行してまだ経済程度ではかなり苦しい国であっても洗濯機で洗濯をしているというのは、あまり変わっていない。そういうふうにと考えると、人間のライフスタイルというのか、文化生活というのかは数が減ってきて今日まで来ていることはご理解頂けると思うんです。

ただここで考えたいのは、文化の多様性というものを大切に維持してきた国というのが幾つかあります。古くはローマという国は、塩野七生さんの『ローマ人の物語』を読んでいますと、ローマ人というのは征服しても、例えばギリシャを征服してもギリシャの優れたところは取り込む。あるいはゲルマンとかそういったところを征服しても、その国の人たちにローマの市民権を与えて、その文化を守るということで、そういった時代のローマ、ちょうど西暦0年の少し前から前後だと思うのですが、非常にローマは栄えたわけなんです。まさに日の出の勢いで世界の、そのころの世界というのはヨーロッパが主体ですから、そこで屈指の大国になっていった。ところがローマがキリスト教を国教と定めて戦争に勝った国にはキリスト教を信じろというふうにして文化の多様性を急速に人為的に絞るようになって以来、だんだん国がおかしくなってきたり、遂にゲルマン民族に西ローマから、いわゆるゲルマンの大移動というので国勢が傾いてだめになっていくわけです。そういういったことがあります。

それから最近、船戸与一さんという方の小説を私は極めて好きで、全部書かれた本を読んでいるのですが、その中に最新作として『降臨の群れ』という小説があります。インドネシアを舞台にして書かれた小説であります。インドネシアというのは農耕民族、典型的な農業国ですから穏やかな人たちで、イスラム教の信者が多いのですが、いわゆる農業をやっていると、森も水も社、お日様すべて神様ですから、そういった土俗的な信仰が非常に強い、いわばそれを許したイスラム教であった。ところがイスラム原理教、要するにアラームの神を唯一神とあがめる宗教、それを奉ずる人たちがインドネシアに、ある意味で入ってきて、その勢力が拡大するにしたがって、今もインドネシアの内戦。バリ島で爆破されたりとか、そういうふうなことになって、そういう騒動が好きでアルカイダという組織がありますから、便乗してインドネシアは今大変なことになっているわけです。そういうふうにして強制的に均一化していこうとすると、世の中がやはりおかしくなってくる。

そういうふうには考えていますと、やっぱり改めて文化の多様性というものは、これから非常に人類が守るべきことであるし、ある意味では意図して文化の多様性というものを大切に、むしろ軍事力とか経済力でなしに、その文化の多様性を守っていくというのが、まさに文化力じゃないかなというふうには思うんです。そういった方向で地球全体がいけば、現在各地で起こっている紛争ももっと減るのじゃないかというふうには考えております。その辺、言葉の使い方が間違っているとかいうことは、また山崎先生にあとで挿絵の訂正をして頂こうと思えますけども、最初の発言としてはこういうことで終わります。

河合 どうもありがとうございました。文化の多様性ということが、特に今は軍事力ということを言われましたが、確かに山崎先生も言われたけれど、文明というものの強さというのが軍事に結びつくというところが、すごく1つの典型なんです。これに対してやっぱり1つの抵抗としての文化という言い方をされて、非常におもしろかったです。これを何と名前をつけるかはともかくとして、山崎先生が言われたような、みんなに共通に普遍的にずっと起こってきていることがあるわけです。これを例えば文明という呼び方をしますと、エジプト文明とか、それからローマ文明とか言うでしょう。あの辺の文明は榮えて衰退するんです。そういう考え方をすると、今の文明も衰退しますかね。その辺のところは山崎先生はどう思いますか。

山崎 それはどのくらいの時間の幅で考えるかによると思えますけども。将来的なこと、あまり先のことはわかりません。ただ、今、津田さんもおっしゃったように、ローマという国は統一するという力と、その中に多様化をもたらすという両方の面を持っていたんです。実は今の近代文明の大もとのさらに大もとというのはローマでできている。要するにヨーロッパでできた。どういうふうにしたか、まずローマはそれ自体の中にギリシャ的な要素というのを持っていました。美術なんていうのはほとんどギリシャをそのままいただいている。新しいものもつけ加えました。例えば法の思想、法律で統治する、法は統一されている、ローマ法という考え方、これはローマ人のもの。さらにユダヤ人、これはユダヤ文明というのがあるわけですが、そこから結局めぐりめぐってキリスト教をいただけてきた。ギリシャ文明とユダヤ文明というのは、ある意味で水と油なんですけれど、それを非常に上手に統一しました。そして破竹の勢いで今の西ヨーロッパほとんどと、さらにインドの近くまで支配をしました。

実はヨーロッパというのは、先にローマだった、1つの国だった。道路が統一され、貨幣が統一され、言葉もラテン語というのが共通語になり、キリスト教という宗教も統一しました。これは学者によって言うことですが、ほぼ8世紀ごろに分裂が始まるんです。これはイスラムに押されたというか、地中海をアラビアの商人に押さえられてしまいましたから、ヨーロッパ人は陸地の方に上がった。陸地に上がると農業を起さなきゃいけない。農業というのは土着の文化ですから、それぞれ土地によって多様性が生まれてきた。大体8世紀ごろに今のいわゆるヨーロッパ語、英語を含めて、が成立していくんです。それからしばらくの間は多様化の時代で、並立の時代です。

しかしおもしろいことにきちんとヨーロッパは統一を守っていたのです。それは例えば私たちが建築の歴史を見ます。すると、大体ヨーロッパの建築の歴史というのは、どの国でも同じ手順で、順番で発展していきます。ロマネスク、やがてゴシック、それからルネ

サンス、それからバロック、いろんな名前がついていますが、それがほぼ同じ順序でどの国でも発展します。音楽もそうです。ですから統一を守って多様性を保っている。そこにはほぼ12世紀ごろに大ショックがくる。それが再度のアラブとの接触でした。政治的にはヨーロッパがアラブに勝ちます。悪評高い十字軍というような形で勝つんですが、文明的にはアラブから非常に多くのものをもらいました。さっきアラビア数字と言いましたけれど、文字どおりアラブから数字をもらったんです。それまでのローマ数字、おじいさんの時計に書いてあるあの文字では、とても近代科学なんかやられていなかった。それをアラビアからももらいました。さらにケミストリー、あれはアルケミスという、もとはそういう言葉ですが、これはアラビア語なんです。だから化学というのもアラブからです。あるいは代数学というのも来る。もっと驚いたのは、古いギリシャ文明がいったんアラブの方に伝えられて、そこからぐるっと迂回してヨーロッパに戻ってくるということも起こりました。

そんなわけでアラブとの接触で色んなものをヨーロッパ人は学びました。自然科学もそうですが、実は恋愛という考え方も学んだんです。今、私たちは恋愛って当たり前のことだと思っていますが、古いヨーロッパにはありません。要するに肉欲か、それでなければ神のような愛、博愛、どっちかで、ある特定の異性を、しかも精神的に愛するなんていうのは非常に難しいことで、今でも難しいから、「冬のソナタ」ができるわけですけどね。あの難しいものを発明したのはヨーロッパなんです。だけどそれはアラブからの影響で起こった。これは西洋の学者の説になっている。ですからそこで異文化を受け入れたんです。そしてさらにそれが既に各国に分裂していたヨーロッパを次々と伝播していきます。そうすると何が起こったか。要するに異質のものが入ってきたわけですから、受け入れた側からいうとそれは説得されたわけです。文明の側からいうと異質の人を説得して、時には暴力も振るいましたが、暴力だけではなかなか人間は心服しませんから、結局これの方がいいよ、これの方がわかりやすいよ、あるいはこれの方が統一的に物事を説明できるよという考え方を説得してあげた。だからルネサンス以後の西洋文明というのは、実は多様なものを説得してできた思想なんです。したがって説得力が強いんです、普及力も強いわけ。

これがどんどん、やがて北の方に行きますとロシアまで行きました。これには随分時間がかかっている。東欧とかロシアというのはヨーロッパではなかった。それを少しずつ説得します。説得すると、逆にそっちから入ってくるものもある。音楽なんていうのはまさにそう。例のショパンなんていうのはポーランドの人です。そこから後、ロシアの音楽家というのはたくさん出てきて西洋音楽を豊かにしました。実はそこでとまっていたのです。もちろんアメリカには行きましたよ。アメリカというのは要するにヨーロッパ人が行ったわけですから続いています。世界で最初にそれをヨーロッパでない、白人でない民族が受け入れたのが日本だった。明治維新というのは世界史的に見るとそういう意味があるんです。最初にあの文明を受け入れました。かなり上手に受け入れた。つまりあの文明は白人だけのものではないということを実証したのが日本の近代だった。かなり長いことそのままとまっていたんですが、20世紀に至って、今やアジア全体に広がっているし、さらにアフリカの一部、それからアラブ諸国の中でも幾つかの国々はそれを受け入れた。ますます私はその傾向が続いていく。それは理由があるんです。さっきも言ったように多様の統一というものを持っている。残念ながらアジアには長いこと、多様はありましたが、統

一がなかった。逆にイスラムには、少し乱暴な言い方をすれば統一はあったけど多様がなかった。この両方のバランスを持っていた文明というのは、いわゆる近代文明。これを西洋文明なんていう必要はないんです。もともとアラブを含んでいるんですから、非西洋を含んで成立しているんですから、これは近代文明という特別の名前をつければいいと私は思っています。

河合 その近代文明というものが非常に強い、さっきおっしゃったようにそれだけの普遍性を持っているので、どんどん入ってくる。それがそのままいけば、やはり近代文明の強いところが強いということになって、下手をすると一様化が起こる。それはおもしろくない、どこかで。李御寧先生も言っておられたし、ジャック・アタリ先生も言っておられたんですけど、何かそれに対して抵抗するというか、それとぶち当たる、そこに文化の多様性ということがあるんですが。

また、津田さんのお考えも色々聞かせていただきたいのです。私が1つ非常におもしろいと思っているのは、先ほど近代文明の中で順番に言われた中で、近代医学というのが入っているんです。近代医学のおかげで確かにものすごく病気が治って、確かに今、病院をつくるということはどこの国でも受け入れて、大事なんですけども、いま1つの大きな問題は、近代医学で治らない病気が大分たくさん増えてきたということなんです。これが近代文明に対する人間の体の抵抗だと僕は思っているんです。体の方が近代文明以外のものも要りますよ。大分人間の頭の方は近代文明化しているんですけど、これは1つ非常におもしろいことだなと私は思っています、それは私の考えですが。

ところで今までのお話で、もうちょっと続きどうですか。津田さんから、文化ということで。

津田 今、お話があって。ちょっと柔らかい話をさせていただきたいのですが。先ほど李先生からヨン様の話が出ておりました。私はごく最近、先月体験したんですが、私は観光協会の大阪の会長をしているものですから、釜山と友好都市で行ったのです。ワールドカップのあとも行ったのです。その前ももちろん行ったんですが、本当にとってもいいほど、感情的にも日韓の関係が今ほど良いときというのはあまりないというぐらいに、良いんじゃないかと思うのです。親近感、友情とか。こういったものを、なぜそういうふうになつているかということをおし上げると、ワールドカップで日韓の若者が随分交流しました。そのときにたくさん韓国の青年も日本へ見に来たわけですが、彼らが小学校・中学校で習っている日本人観と、実際に来てみると随分違うわけですね。日本人というのは韓国人を差別して非常に狡猾でとか、そういうふうなことを聞いていたのが、思わぬ親切だし、何ら違和感なしに友情関係が結べるということで、非常にそのあたりから良くなってきたわけですね。それは私だけが言うのではなしに、釜山側の観光協会の会長さん、元日本の統治時代に中学校の英語の先生をされていたような方ですが、本当にそういうふうな実感を持っていらっしゃった。

良くなっていたのですが、先月行ったときに本当に良くなっているなと思ったのは、これはやっぱりヨン様効果なんですね。このヨン様効果というのはどういう意味でかということ、日本の、特に女性が多いのですが、先ほどもおっしゃったようにソウルの近くの、本当に何でもないところへ「冬のソナタ」を撮影したというだけで、たくさん日本人が行

かれる。しかも釜山なんてほとんど「冬のソナタ」と関係ないんですが、釜山のデパートに行ってお土産の景品に石けんをくれるのですが、全部ヨン様の写真が張ってある。日本人が買うと、その石けんがついてくるわけです。飛行場に行って売り場に行くと、「これ、冬のソナタのネックレスよー」と言って売りつけてくる。日本人を見たら買うと思っているんです。僕は男ですから「そんなのは要らない」と言ったら「奥様、お嬢様に」とか言って。要するにそういうふうには韓国を見る日本人だということで、過去のわだかまりというのは、本当にこれは軍事力や経済力では絶対にできない親近感みたいなものが、わだかまりを溶かしてしまっている。これはやはり本当の文化の力。あの国に行ってみてみたいとか、あの国の人と知り合いになってみたい、あの国で売っているようなものを買ってみたい、食べてみたいというふうな、そういう自発的に起こる心を誘い出すというのが、まさに文化力じゃないかと思うんです。

先ほど加藤清正が韓国へ行って色々お寺を焼いたりしたりとかいうようなことの、本当に積年の塊というのが溶けているということをもっと感じたんです。教科書の方はまだ直っていないようなので、現実の方に合わせていつか直っていくと思うのですが。やっぱり日本と同じですね、教科書を直そうという大変な声が起こるらしいです。「けしからん、そういうのは非国民だ」というふうなおしかりが出るらしいので、教科書の方はそのままになっているけども、現実にはそういうふうにして、本当の長年のしこりが溶けていく。こういうふうなことを、やはり文化の力というのがあるんだということ、我々文化に少し仕事上携わるものは、本当に自覚すればいいなというふうに思っているんです。

私はたまたま芸術文化振興会というお仕事をいただいているんですが、そこで出てくる芸術文化というのは先ほど申し上げたような大きな文化じゃないです。話があって来なくなるので。ここの芸術文化というのは私の扱っているところでいえば、いわゆる芸術を分けると表情芸術という、お芝居とか戯曲。それから歌や音楽の音響芸術というのがあります。それ以外に美術関係、造形芸術とか、もう1ついえば、詩とか小説の言語芸術があって、4つ言われているんですが、私の扱っているところは2つ、音響と言語芸術です。しかも国立劇場というのは伝統芸能の継承、維持と普及。片一方の新国立劇場というほうは、いわゆる西洋との交流によって日本に入ってきたオペラとかバレエとか、そういったものを主体にやっているんですが。これがまさに文化の多様性を守る非常にいい仕掛けになっているんです。こういうふうにして2つつくられているということは、私自身中に入ってみて、それ以外にも能楽堂とか演芸場とかあるんです。まさに文化の多様性というのは、ある意味では意思を持って守っていかないと守られないという気が、特に最近ではしております。何もしないでいたら、やはり今、音楽というと連想するのは、日本の方に「音楽って何だ」と聞いたら、まずクラシックとかで、伝統音楽の三味線とか琴を思い出す人は今はやっぱり少ないと思うんです。だからやはりそういう意味での日本の持っている伝統芸術、伝統芸能というのを守る仕掛けというのは、やっぱりしっかりしておかないとグローバル化に飲み込まれてしまって、日本の貴重な多様化された文化というのが消える危険があるというふうに思っているんですけどね。それはやっぱり基本には、文化というものは大切だし、文化の多様性を守ることが、結局はグローバル化の中で日本人らしく生きていくためには非常に必要なことだと。一目置いていただける日本人になる、日本国になるには、やはりそういう部分も絶対力を入れて守っていかないとできないことだなということを感じております。

河合 やっぱりある程度 of 意思力というか、そういうものがないと守れない。というのは、先ほどおっしゃいましたが数字とかそういうものが絶対的な強さを持つてくるということは、お金というの一番数字とはっきりします。そうすると、お金でくると全部一樣になってくるので、それでいくらもうかるかとか、そういうことになってくると、昔のものはあまりもうかりませんよというだけで、それが危なくなってくる。その辺は相当強い意思をもって守っていく必要もあるし、それは実際守られてもいる。またこのごろ、そういうのを見直しておもしろさがわかるというところも出てきているという感じもします。そういう点で、そちら側の文化のほうから、あるいは日本の文化のことなんかを考えて、山崎さんはその辺はどんなふうと考えておられますか。

山崎 今の「冬のソナタ」の話は、先ほど李御寧さんは「他人の中に自分と同質のものを発見する」ということが文化交流の基本で、この場合もそうだと。もちろんそういうところがあるんですが、同時に私はやはり日本人の多くが「冬のソナタ」というものに感動した基本には、我々が同じ文明を共有しているということがあったと思うんです。つまりあそこに出てくるヨン様も、その恋人も、チマチョゴリではないんです。洋服を着ているんです。しかもやっていることは、それこそルネサンス以来のプラトニック・ラブなんです。この観念も実は日本にはなかったんです。プラトニック・ラブという考えは明治になってからでき上がってくるので、それまで日本人は男女の間には色という関係しかなかった。そういうわけで西洋という近代文明の一環として日本人はプラトニック・ラブを勉強しました。それから大分すれっからしになって、最近私たちの身边にあまりプラトニック・ラブはないんですね。(笑) だけど日本人の心の底には近代文明がしみ込んでいる。そうしたら絵にかいたような、つまりもう西洋にもない、アメリカにもない、フランスにも多分ないようなものが突然韓国に出てきた。これでみんな引かれたんだろう。

そうすると基本的にあるのは、これは近代文明なんです。プラトニック・ラブという考え方なんです。ですからそれが新たな文化交流につながっていったということを、私は非常に教訓になることだろうと思います。

ちなみに、わざわざあとまで置いてしまったのですが、私の文化についての考え方を申し上げます。実は基本的には文明なんです、その文明をよくよく習熟して身についたものにしますと、その身についた文明は文化。非常にわかりやすく言いますと、例えばピアノというものがあります。あれは1つの機械、道具です。それから楽譜、ベートーベンでもチャイコフスキーでも結構ですが、音符に書かれた楽曲というものがあります。これはどちらも文明です。すぐに理解できます、ピアノが何であるか。楽譜を読むというのは少し勉強が必要ですが、しかしこれはわかるんです。ただし、そのピアノを楽譜に合わせて自然に流暢に弾きこなすということは、簡単にはできません。長年習熟して訓練に訓練を重ねてやっと身につくわけです。これは身についたら今度はなかなかとれません。子供のときにピアノが上手に弾けた人は、長年休んでいてもすぐ思い出せますが、私のように不幸にしてピアノを教えてもらわなかった子供は一生右手と左手が一緒に動いちゃうんです。ですから身についた音楽、これは文化です。

私たちのもっと身近な例を挙げます。日本人は山を見ると、何か神々しいとか、あるいは親近感とか、ありがたいような感じがします。啄木の歌にあります、「ふるさとの山に向ひて 言うことなし ふるさとの山は ありがたきかな」。この感じを日本人は大抵

持っています。これは身につけているんです。ですから文化です。しかしその基本には、実は古くからあった山岳信仰という文明があったわけです。これは文明です。山岳信仰は随分発達しまして、複雑な発展を遂げて、今、世界遺産になった熊野街道というのは、そういう山岳信仰に支えられている。この信仰自体は文明なんです。今でも私が本を読めば、それについて書かれたものを読むと頭ではすぐ理解できます。おそらく世界中の人がわかると思う。しかし山を見ると、本当に自然にありがたいとか、親しいとか思う感覚は、これは文化なんです。身につけているわけです。

これは色んなレベルで言えることで、例えば衛生観念。社会衛生を守らない、公衆衛生を守らないと社会は大変なことになるということは文明です。だからこれはみんな、色んな人に教えます。だけど、気持ちの上で、ごく自然に暮らしていて、例えば道路にたんつばを吐くのは不愉快だ、気持ちが悪いと思うようになったら、これは文化なんです。ですからもちろん文明と文化はきれいな線は引けません。だんだん身につけていくプロセスですから、色んな段階があります。やっと我々日本人も洋服を着て、この中で和服の人はほとんどいらっしやらないと思うけども、洋服を着てごく自然に振る舞えるし、また見えるようになりました。それでも、例えば靴は本当に身についたか。新幹線に乗ると、特に男ですが、靴を脱いでいる人が半分ぐらいいます。どうも靴はまだ身につけていない。これはまだ日本人にとって文明であって文化ではない。

だからそういうふうになだらかな関係ではあるけれども、文化というのはそういうものなんです。したがって、文化というのはそんなに簡単には普及しませんし、それから飛び飛びに、個人から個人へと伝えることができます。文明というのは考え方ですから、一斉にローラーでならすように面で広がっていきます。工場生産というようなものでも、そうです。アメリカから技術移転をする。機械も持っていけますし、設計図も持っていける。マニュアルまではすぐ渡せますが、しかし大変細かな、非常にデリケートなノウハウということになると、これはなかなか通じていかないということは、多くの経済人が証言してくれています。

この文化なんですけれども、これはある意味では頑固です。例えば私はイスラムの一神教について書かれたものを読めば、それは理解します。私の宗教にはならないでしょうが、理解することは簡単です、そういう考え方があるなということはいくらもわかります。でも、トンカツを食うなと言われると、これはちょっと困ると思うのです。トンカツは私の身につけていますから、大変困る。もちろんその逆もあるでしょう。私たちはある種の民族の大変好んでいる食べ物を見て、うわーと思うこともある。このレベルというのはなかなか、そう普遍化できない。ですからここに寛容さというのが必要になり、文化はおのずから多様化するんです。何しろ身につけているんですから、文化というのは本来からいけば個人のものなんです。

ところが近代化の初期に人類は1つ、おもしろいといえばおもしろいし、とんでもないといえばとんでもないことをやりました。それは国家というものをつくって、先ほど一番最初に国家の話をしました。近代国家というものをつくって、その国家の単位で文化を統一しようとしたんです。実はこれは、本当に新しい話で、たかだかフランス革命以後の話です。それまで、例えばフランス人は文化なんていうことは絶対に言わなかった。あの人は文明と言っていた。フランス語にももちろん文化という言葉はあります。シビライゼーション、フランス語で言えばシビリザシオンというものが唯一あった。あとは野蛮な

んです。それは困ると言ったのがドイツ人で、先ほどブルクハルトの名前を李御寧さんが紹介しておりましたが、まさにドイツ人がクルトゥーワ、文化ということを言い出したんです。そのころに、あるいはそのころのちょっとあとから、国家が成立すると国民文化というものをつくったわけです。

これは大変、意味もありました。実は国家というのは法律と制度でできているんです。国家というのは約束事なんです。私たちは法律に従って1票を投じて、1票の集まりで政府ができている。大変理詰めできているんです。しかしこれでは近代国家が成立したときに、力にならない。みんなで感奮興起して国をつくるぞ、頑張るぞというのにならない。もっと言えば隣の国と戦争して国を拡張しようという勢いは当然出てきません。そこで感情につながる、あるいは先ほど言った身についた習慣のようなものを全部統一して国民をつくろうとしたんです。

ですから今の日本人は、学校の新学期というのは桜の咲く時分だと思っています。実際はこんなばかなことはないので、新学期4月に桜が咲いているのは関西から関東の、要するに本州の真ん中辺だけです。沖縄ではもう散っていますし、北海道ではまだつぼみです。でも日本の場合でいえば「4月は桜だ」というのをつくったわけです。それぞれ国語、日本語というものを統一して、方言を撲滅して……、これに抵抗したのは関西人だけですから。今や日本で方言を威張ってしゃべっているのは、本当に関西人だけ。そこまで撲滅してしまった。そして教育を通じてみんなに同じ日本の神話を教える、歴史を教える。ほんとういうと、日本の神話といたって、あれは大和民族の神話で、アイヌの人も、あるいはもちろん在日韓国人の人も、多分沖縄の人も無関係です。でもあれを日本の神話として教え込みました。日本だけがやったんじゃないです、どの国もやったんです。そのときに国民文化というものができて、我々を縛った。実はそれが今、いろんな問題の名残になっている。ですから私は、要するに文化の本来の姿に戻していけば、つまり個人の身についた習慣というところに戻していけば、争いのもとになるはずはないんです。

一方、文明は普遍的な論理ですから、これも争いの理由にはならない。争いの理由にしていたのは、18、9世紀、20世紀前半までに植えつけた国民文化という迷信だと思っています。これができたものですから、これをまねして、国家のできない、まだ国家がうまくつukれない人たちも同じようなことをやるんです。それが民族主義。実は民族なんて全然学問的に根拠のない概念です。ですから見ているとわかります。民族独立運動というのが起こって国ができました。必ずその中で少数民族という人がまた反対します。特にアフリカなんかそうですが、ロシアの周辺でもそうです。民族主義が絶えず戦争をしています。本当に根拠があるんだったら民族単位でおさまるはずなんです。民族主義というのはやっかいなもので、今後の21世紀の中ごろまで我々はこの課題を背負っていくことになると思う。

そこでややこしいことが起こってくるんです。一方では民族主義という立場で文明の普遍性を攻撃する。一方で民族主義という建前で個人の持っている多様性を押しつぶす。実は民族主義というのは個人の自由を抑えてしまうんです。しかしこれは非常に火のつきやすい燃料でして、民族主義というと突然火がついてしまう。もちろん日本もその大きな間違いを20世紀の前半にしました。同様にその被害者である中国や韓国の人も、今は民族主義ということで1つの重荷を背負っているなど私は思っています。

河合 山崎先生の講義でみんな随分よくわかったと思うんですが。

山崎 あまりいじめないでください。(笑)

河合 少し講義を離れて、お話の方は津田さんをお願いしようと思うのですが。確かに文化と文明という考えの中に国家ということが入ってくる。これが、国民国家というのが近代に出てきたということで、僕らは普通に來ているんですが、この問題も非常に大きな問題になっている。しかもおっしゃっているとおりなんです。国家ということと文化ということ結びつけ過ぎるといふところに、非常に1つの大きな問題があるといふのは、私も感じているんです。そもそも文化といふのは個人のものだといふのは、僕も大賛成で、そういう点でさっきちょっと、急に医療の話をしてきたのですが、やっぱり病気だっただけは個人のものなんです。私が病気になったけど、何とか克服して頑張っただけ、あれもして、これもしてとかいって、色々思ったり。親戚のほうでは僕がいつ亡くなるか待っていたりして、色々おもしろい話があったとしても、病院に行ったら一遍に診断名というやつをつけられるんです。そうしたらピタッと決まってしまうんです。「癌です」って言われたら、もう言いようがないんです。せっかく個人として色々な物語を生きてきて、みんなとやってきたのに、ぱっと1つの名前前で終わりとなるといふのは、これはやっぱり文明の怖いところなんです。にもかかわらず、やっぱり個人が生きていかねばならないといふときに、私は文化といふのは非常に大事になってくると思うんです。

その文化も山崎さんが言われたとおりで、下手をすると、国民文化にすると、またからめ捕られてくるんです。ここも配慮しながら、やっぱり僕らは文化といふものをしていかなければいけない。

しかしそのときに、文化といふものの背後に、非常に普遍的な文明といふものもあるのだといふことも、これは否定できないんです。例えば私に、「癌だ」とお医者さんが言ったときに、「いや、癌は困るんです。私はもう5年生きたいんです」と言ったって、これはもうそっちのほうが強いところがあるわけでしょう。だからこの辺のせめぎ合いといふのは非常におもしろい。しかしその中で、さっきちょっと私がちらっと言いましたように、なかなか近代の医学でもつかまえない病気、心身症とか、色々そういうものがたくさん出てきたといふのは、病気のほうも頑張っているなという感じで、「近代文明ではつかまえませんでー」といふので、人間存在、個人といふものはなかなかからめ捕られない。そのからめ捕られない個人ということから文化が生まれてくる。

そういうふうに考えると芸術なんていふのは、本当に僕はそういう感じがするんです。以前はそういうことに対する一種の抵抗は宗教だったと思うんです。宗教といふものがあるって、「そう言われても私はこういう超越的なものを信じておるから、どうだこうだ」と言ったけど、なかなか宗教のほうも、また何々教とか何々教団とか、何々と名前がついてきた途端にかえって個人をからめ捕ってくるんです。そこからも我々は自由になりたいと思っているわけです。そういう中で文化といふものは、やっぱり非常に強い力を僕は持っていると思う。先ほど津田さんも言われましたけども、軍事力でも何でもなくて、文化といふものによっていろんなことが起こっているわけです。その辺で、少しお話に戻したところで、いかがですか。

津田 このままだと山崎さんのお声で文化と文明の夢を今晚見そうでございまして、うなされそうなんですけども。(笑)

基本的には文化というのは個人単位であるというのはよくわかるし、それだけに文化の多様性を守るということは個人の自由というのか、個人の価値を認めるという意味でいいと思うんです。あるいは民族、ちょっと民族という言葉自身にもそういったあいまいなものがあるというご指摘だったんですけども、やっぱり民族の文化というのもあると思うんです。しかしそういった場合に、いわゆる文化の多様性を規制するものがある。人類の歴史はむしろ規制を積み重ねてきている歴史じゃないかということをお願いしたんです。それは町とか国家とかいうものの形成によって、文化の多様性というものをある枠の中へはめようとしていった歴史じゃないかと思っているんです。しかしそういう時代じゃないということも、先ほどから何度も申し上げているとおりになんです。

そこで、これも本当に真剣に考えねばならないのは、文化の多様性を規制するものが何であればいいのか、何であれば許されるのか。例えば、もう今はそういう民族は少ないと思うんだけど、昔から首狩り族とかありますね。人の首を狩る種族というのか、人類。そういうのは、これも文化ですね。そこで文化だけでも、人道上はあってはならないことだということ、今はそういうことはなくなっているか禁止されているかの方向にいつているだろう。そういった、許されないことだと決めるのはどこか、誰かというのが、人類共通の規範というものだと言われても、その共通の規範というものを誰が決めるのかという、それが非常に大きな問題だと思うんです。

例えばインドのガンジス川で沐浴すると非常に身の汚(けが)れがなくなるという信仰があります。しかしそれこそ、し尿から何から上流から皆流れてくる。文明論からいえば衛生上悪いという規制がある。そういうことは規制があってしかるべきなのかどうかですね。外国の方で、もしインドの方がいらっしゃったら申しわけないので日本のことにしますと、タイガースが優勝したら道頓堀に飛び込む。これもそういう1つの文化ですね。だけどあの川の中には大腸菌がうようよしているので、警察も必死になってとめる。本来規制するものです。これは大阪市の中のことでですから、わりに規制するのでも何となく市の条例とかでやればできるような話なんだけど、国境を越えてそういうふうにして、なるほどというふうに決めるところがどこなのか。本来はアメリカではないはずですね。しかし今はあたかもアメリカが決めるようなことになっていることが、非常に今は大きな問題になる。片一方、それじゃあ国連かユネスコか。そういった国際機関によるのか。そのところが、どうすればある程度誰が考えても、まあいいなということになってくると思うんです。そこが今、抜けていると思うんです。アメリカの一国主義、大国主義がいけないとか何とか言うんだけど、それにかわるどういうものがあるのかということ、本当に真剣に考えるべきときが来ているんじゃないか。それがないと文化の多様性を論ずるとともに、ほんとうの人類の平和というのか、繁栄のために役立てられるのかどうか。この論議をする場合に本当に大きな問題じゃないかと思うのですが、ちょっと教えてください。

山崎 河合さんは文化庁長官で、津田さんは芸術文化振興会理事長なんですね。私は芝居書きですから、どちらも私の首根っこを押さえつけている役職にいらっしゃる。それで2人でさんざん私を今、いじめておられるようではありますが、立場上、従順に従うことに致します。(笑)

さっきから私が文明と文化というのをわざと分けている理由は、まさに今、津田さんが出された問題を私が意識しているからなんです。文明というものは、私は先程来言っているように近代化の1つの趨勢として、流れとして統一の方向に向かっている。その根底にあるものはやはり合理的な説明が可能であるかないか。ある徳目、あるいはある習慣がいいか悪いかということを決める機関。つまり国家であるとか、あるいは国連であるとか、何とかという、これをどうするかということは、全く私は別問題で、しかし文明に関してはおのずから結論があると思っている。多様性はないと思っているんです。文明は統一へ向かうべきで、文化だけが多様化を保てばよろしい。

例えばあまり公の席で口にするのははばかれるかもしれませんが、アフリカのイスラムのある一派の人たちに女性の割礼というのをやる人がいる。これでたくさんの犠牲者が現に出ているわけです。これは確か北京で行われた世界女性会議の席上で議論になったらしいのです。つまりイスラム文化の多様性が大事なのか、それとも女性の人権が先なのか。その場ではどうも結論が出なかったようですけれども、私はおのずからこれは女性の人権を守る、これは文明だから、それに対する抗議は許されないというふうに考えています。それは、じゃあどうして実現していくのだと。私はなかなか時間はかかるだろうけれども、こういう習慣をなくすのに何も軍事力は必要でないと思う。現にNGOの多くの人たち、あるいはNPOの人たちが現地に入って啓蒙運動をやっています。これはひどい話だと。現在いるアフリカのイスラムのお母さんたちは、年をとったお母さんたちは自分もそれを受けてきたから、娘にさせるのは当たり前だと思っている、しないと恥だと思っている。確かに価値観の対立ですが、しかしこれは説得していくと、やがて合理的なほうが勝つんです。現実には、ごく最近たしか本になって出版されていましたが、それを逃げていったアフリカの女性がいて、そしてアメリカの人権団体の援助を得て自分の体験を本にして書いて、大きな反響を呼びました。

ですからこういうのは、例えば軍を派遣して禁止するというようなことをしなくても、おのずからおさまっていく。つまりこれは統一の方向へいこうというふうに考えています。もちろんその間には微妙な線が色々出てくると思うんです。それは、そのためにこういう場がある。みんなで話し合えばいいんだと。それは1年や2年で片づく話ではないでしょう。例えば女性のスカーフの問題、これは今ホット 이슈で、フランスでは法律で禁止しています。これは私はなかなか微妙な問題で、日本なら違う方策をとるだろうと。例えば日本の公立学校でイスラムの女性がスカーフをしてきても、多分禁止はしないだろうと思います。しかし、その女性が自分の友達、あるいは周辺にスカーフを強制し始めたらどうなるかと。だってその人は正しいと思っているわけですから。そうすると多分大変な議論になるでしょうし、少なくとも強制に関しては政府は介入しなければいけない。色んな微妙な問題はあると思うんですけれども、最後に落ちつくところは、私は近代文明の持っている合理性の方向に落ちついていこう。そのための機関としては、いきなり国家とか、いきなり国連とかいうのではなくて、例えばNGO・NPO、つまり市民の集団というのが真っ先に動くべきことなんじゃないかなというふうに思っています。

河合 今、おっしゃった中で、やっぱり力というものが変に加わってくると困る。これは非常にはっきりしていますね。何の力であれ、強制力というものが働くと。

山崎 微妙なおもしろい例を、実は李御寧さんに昔聞いたことがあるんです。李御寧さんのおうちというのは大変な名家というか旧家で、大きな邸宅をお持ちだった。けどももちろん第2次大戦以前は日本の植民地になっていましたから、日本人にされてしまっているわけです。李御寧さんのおじいさんですが、その人が庄屋さんとか村長さんとか、村の長なんです。そこへあるとき日本軍の一個小隊、演習のためにやってきて駐屯した、泊まりにきた。まずおじいさんが心配したのは、日本の野蛮人が、しかも軍隊が来るんだからきっと略奪をしたり乱暴をしたりするだろうと。でもしょうがないですね。覚悟して待っていた。やがてあらわれた日本軍は実にお行儀がよくて、おまけに食料は全部自分で持ってきて、一粒たりとも略奪などはしなかった。よかったなおじいさんが思っていたら夜中に村の人たちが半鐘をたたいて大騒ぎになったんです。何だと思って聞いたら、その兵隊たちが、昼間は暑いですから、村の井戸端で裸になって水浴びをしている。日本人にとっては、男が夜裸になって水浴びをして失礼だとは思えないんですが、韓国の人にとってはこれは大変な文化の問題なんです。つまり裸を見せるということは、相手に対する侮辱なんです。それで怒りだす。だからこの場合、日本軍は文明としては許してもらえたわけです。略奪もしないし、乱暴もしないし、お行儀がよかった。けど文化という一点で許せない気になったんです。こういう事柄は今後もおそらく起こっていくだろう。

しかしそれは多分話し合いとか、それこそ理解とか、いささかきれいごとふうで恐縮ですけれども、そういう努力で何とかなるんだろうと思います。そういえば例えば日本の相撲が昔は中国の人から見ると大変野蛮な風習に見えたそうです。裸で人前で男が相撲をとる。でも今は日本の相撲協会が北京に行ったり上海に行ったりして興行をして土地の人から大いに受け入れられていますから、やがてそれは受け入れられるだろう。ですからこういう意味での文化の多様性というのは、当然保たれている。

それに、もう1つ大事なことは、世界の文明が統一される趨勢を見せるにつれて、おもしろいことに国家の力が少しずつ弱まっているんです。これは実はグローバリゼーションの一面なんですけど、国家が万能でなくなってきました。するとどうなるかといったら、昔、国民国家として統一する前の地域文化というのが、あちこちで生き返ってきている。例えばヨーロッパでもフランスのブルターニュなんていうのは、自分たちは昔はフランスではなかったわけですから、ブルターニュ文化というのをもう一度復活しようとしている。あるいはドイツの各地域、連邦をつくる前の地域。王国、村というようなのが文化の独自性を復活し始めている。それから、これは特にアメリカの場合なんかがそうですが、エスニック文化。これがどんどん今、元気を取り戻しているんです。昔、アメリカのスローガンは「人種のるつぼ」でした。ところが今は「人種のサラダボール」。サラダというのは、ただまぜてあるだけですよ、溶けてはいない。溶かすのではなくてまぜるのだという考えに変わってきている。現実には日系二世を含めてエスニックの人たちが非常に自分の特性を文化の上で発揮しています。但しこのアメリカのエスニック文化の大きな特徴は、政治的に独立を求めない。どんなにヒスパニックの人が多い地域でも、そこを別の国にしようという事は起こらないです。でも文化の上では多様化しています。

さらに世界中どこでも起こっているのは世代文化です。一番目立つのは若者文化ということですが。若者文化というのは、もう国ごとにまとまっているよりは、横に世界中つながっています。日本のマンガというのは世界中に広がっているし、アメリカのロックも、これも世界中に広がっているというふうに、世代というものは国の枠の中にいないんです。多

分、今後高齢化が進むと、今度は高齢者文化なんていうものが世界中に広がるかもしれません。

河合 それは期待していますので。(笑)

山崎 ですから、要するに文明が1つになればなるほど文化は多様化するんです。

河合 そこは非常に大事なところで、一番初めの山崎さんの話を聞いていたら、これは文化の多様性は壊されるんじゃないかという心配をされたかも知れませんが、言われたいことは、1つの線をどこかで守っていることによって、みんな多様化するんだと。

山崎 そう、そこなんです。

河合 ものすごく多様化できている根本は押さえておこう、こういうふうに言ったら非常にわかりやすいですね。

山崎 そのところは非常に大事で。

河合 ただ、これは僕は思うのですが、文明の衝突ということもありましたね。逆に文明が対話しなくちゃならない。これはイランのハタミさんが言い出して、文明の対話というのが、すごく言われ出したんです。それが今のアメリカの戦争が起こる2、3年前です。それで日本もそうだし、もちろんイランの方も来られる、アメリカも来る、色んなところが来て、中国の人も来る。そしてみんな対話しようとなったんです。そうすると難しい問題は、今言われたように誰にも共通の話をしようとなりますね。そうするとやっぱり、共通のことというのと、それこそ「嘘をついてはいけない」とか「人を殺してはいけない」とか、そういうのでしょうか。「お互いに親切にしましょう」とか、そういうことが出てくるんです。それを僕は聞いていても、何となく元気がなくなってくるんです。皆さんの言っておられるのは反対のしようがない、全然反対のしようがない。そうですね、その通りですから、「お互いに愛し合しましょう」とか、そういう話ですから、それは非常に良いと思うんですけど、こういうことだけ言っても、下手をしたら戦争はすぐ起こるんじゃないか。そこに人間の怖さがあるんじゃないかということを僕は言いたいんだけど、英語の会議ですのではなかなか。関西弁だったらもっと自由自在にやるんですけど。(笑) 英語の会議でみんながちゃんときれいなことを言ってピシッと決まっている中で、「それだけでは人間あきまへんで」と、関西弁だったら、「はーっ」となるんだけど、それを「アイ・シンク……」とか言っていたらだんだんおかしくなってくるんですよ。非常に苦勞をして、もうせりふみたいに、「こんなことだけ言っていたって戦争は防げない」と言おうと思って頑張っていたら、その後でばーんと戦争が起こって、今は文明の対話路線がぱっと消えているでしょう。この一番大事なところを押さえれば、これは絶対間違えないんです。間違えないんだけど、下手をすると今言ったようなことも起こるんです。この辺の難しさはどう思っておられますか。

山崎 私はまず、文明は1つなんだから、文明間の対話ということはそもそも成立しない。これは1つの言葉なんです。実際の政治的なやりとりというのは、私は文化の問題でもなければ文明の問題でもない。実は人間の現象の中で、色んなあり方の中で、文化・文明を忘れるというのはとんでもない話ですが、文化絶対主義、文明唯一主義で議論しても、それは現実的ではないんです。政治は政治で、それなりの妥協、それなりの論理を追求するほかはない。今、例えばテロリズム、これはどうも困るということについては、大方の理解が行き届いて。おそらくハタミさんでもテロリズムの文明とアメリカの文明で対話しようとは言わないはずですよ。

ですからそういう文明間の問題というのは、ある意味では決着済みなので、あと起こることは具体的な政治のやりとりだと。例えば私は、皆さんご存じの核不拡散条約というものがあります。これは考えてみたら不平等条約なんです。でも、この不平等を認めたほうが、今平等を競って争うよりは世界平和のために得策である、ひいては自分にとっても得策だと思うから、みんな支持しているわけです。これは純粋に政治的な問題なのであって、これは文明とは無関係です。我々としては、あえて言うならば、核を抑制するための文明的な知恵として、あの条約をつくったというふうを考え、これに逆らう人は若干実力を行使しても押さえるべきだと、私個人はそう思っています。だから北朝鮮が勝手に核開発をやったり、あるいはイランがやる、特に武器にかかわる開発をやるというのであれば、これはしょうがないです。文明・文化というきれいごととは言っていない。

河合 今おっしゃっているように1つの線が、はっきり押さえられる線が出てくるほど、文化の多様性を我々は楽しむことができるというか、多様性がむしろはっきりしてくるんだという考えなんだけど、そこで文化・文明だけで色々なことを考え過ぎても、これは無理だ。やっぱり政治とか色々そういうことは、そこでまた考える必要もあるということになってくるんですが、そういう点で津田さん、そこから離れても結構ですけども。

津田 今の話を聞いていて思い浮かべるのは、現状のイラクとかの状況ですがね。文化という、この場合は宗教の違い、あるいは人生観の違いのようなものが入ってくるんだけど、自分が信仰のために死ねば天国へ行けるといって、あの考えが改まらない限りはテロはなくなるんじゃないか。人を殺したら自分も地獄だというよりも、今は自分が大義のために死ねば天国へ行けると信じ切っているほうが強いですよ。だけど人のことを言えなくて、我々の世代というのは戦争中、お国のために死んだら靖国神社で神様になれると、半分ぐらいは思っていたはずですから、あまり人のことは言えないんですけども、今回、文化とか文明論の根底にある信仰というのか、宗教の問題というのか、本当に大きいと思うんです。

河合 今まで文化・文明と言うときに、それこそ文明開化じゃないですけど、日本なんかとくに「文明開化、文明開化」と言っていたんだけど、その背後にある宗教という問題が、だんだんみんな意識されてきた。これをどう考えるかという非常に難しいことが今出てきているというのは、これは認めざるを得ないです。これもおもしろいことですね。

山崎 しかし私が先ほど申し上げた、統一されつつある近代文明、近代化ということの中

には政教分離という非常に大きな原則があったんです。それを少なくともヨーロッパの国々も日本も、ほぼ実現。アメリカも、それは確かに宗教の団体が政治に影響を及ぼすということはやっていますが、例えば宗教裁判をやるというようなことは、やらなくなった。そういう意味において政教分離というのは今後、やはり共通の論理として我々は支持していかなきゃいけないことだと思う。今、テロリストの人が本当に何を考えているのか、これは聞いたことがないのでわかりません。しかしどう考えても、あの人たちがいつまでもそういうことをやるとは思えない。なぜなら、もしも神のために死んだら天国に行けるんだと、そしてその天国が本当にパラダイスであるのなら、まず指導者から先に死ぬはずですよ。(笑) だけど大抵のテロリスト集団で、ビン・ラディンさんみたいにリーダーは最後まで生き残っているんです。随分犠牲的精神の強い人だと思うんです、自分だけはなかなか神様のところへ行かないで若者を先に送ってやろうという親切な人。この親切はやがてばれるんだろうと思います。

ですから、いつまでも私はそういう意味での宗教の政治的利用ということは続かないだろうと思います。それを言うならば、さっきも言ったように、文明の対立ということを使う人、あるいは民族の文化的対立ということを使う人は、実はその人の利益のために、この問題を利用してはすぎないんです。仮に民族文化というものがあるとしても、本来の姿を思い浮かべてください。これは非常に小さな集団なんです。せいぜいが村単位、数百人単位。そしてそういう民族文化というのは大体において伝統主義で、新しいことなんかやろうとしません。長老支配であって、若いやつが引っ張ったりしていないんです。穏やかに暮らしている、これが民族文化。ところが民族主義というのは正反対ですよ。大抵は青年将校というような連中がリーダーです。そして非常に大きな規模で動かし、国家をつくらうとする。ですからその意味でも民族文化と民族主義というのは全く異質のもので、しばしば悪い人が利用する概念なんじゃないかと思えます。

河合 その辺で宗教のことを、あまり単純に結びつけて考えないほうがいいんじゃないかなという気もします。その点、私がアメリカに行って、嬉しく思うのは、私の友人たちのようなアメリカ人は、今一生懸命になってコーランを読んでいます。さすがだと思いました。あんなのはだめだと言うんじゃないくて、もっと本質的にイスラムということ自分たちは知ってからつき合うべきであって、もう一遍勉強しようじゃないかというので、コーランを必死になって読んだりしています。そしてイスラムの、ほんとうのそういう哲学のすごい人と呼んで話を聞いたり。

これは我々は戦争中に体験したことだけど、日本はアメリカと戦争をしたら敵国の言葉を勉強するなというので、我々は英語を習わなかったからいまだに下手ですけど、習っても下手だったと思いますけど。ところがそのときアメリカはちゃんと日本のことを研究しているんです。一生懸命やって日本文化を研究しているんです。それと同じことをアメリカでも、相当多くの人たちはもう一遍イスラムをちゃんと勉強しようというふうな雰囲気はちゃんと持っているんです。そういうことを考えていったら、単純に宗教の問題というふうにはぱっと持っていくのも、これは難しい問題。しかし背後にあることは否定できませんよ、これはもう絶対に否定できない。

さっき李御寧先生もちょっとそういうことを言っておられましたけど、やっぱり東洋というところで考えた、ジャンケンポンみたいな話ですね。こういうことも、つまり一神教

的な正誤の判断というか、そういうものでないところのことということも、どこかに入れ込んで、というようなことも言っておられたと思うんです。こういったこともまた文化を考えると、どう考えるかということも1つあると思うのです。

それともう1つおもしろかったのは、ジャック・アタリさんが煙と結晶の話をされましたね。結晶も困る、煙も困る、その間という言い方をされたのが、さっきのジャンケンポンとちょっと似ていたのでおもしろかったんですけど、この辺は津田さんどうですか。あまり決め込まないというか。

津田 決め込まないというよりも、私は先ほど四つ足を一切食べなかった日本人が——確かに1000年以上食べていないんですよ、それが明治維新で明治天皇に召し上がってもらったら、途端に牛肉屋がはやり出したという、この変わり身の早さというのか、こだわりのなさというのは、本当に日本人の美徳だろうと思うんです。これが本当に民族千年の恨みとかいって頑張っていらっしゃる民族がおると、本当にすごいなと思うんです。

河合 一長一短ですね。

津田 一長一短ですよ、本当に一長一短。僕は昭和20年までは御真影といって天皇陛下の写真の前は、本当に最敬礼して通っていたんですけど、戦後は劇場へ来られたらごくごく親しくものが言える、何も違和感がないという、本当に我ながら、このこだわりのなさというのは何だろうなと思うんです。

河合 お話中誠にすいませんが、高齢者の特権で、ちょっと私はトイレに行ってきます。(笑)

山崎 困りましたね、あとはどうしましょうか。なかなか……。 (笑) 日本人の特性とか、あるいは日本の精神とか。私は自分の属している文化についてそれを大事にしたり、あるいはある程度誇りにするという事は良いことだと思うんです。ただそれだけに、これは非常に用心をしなきゃいけない。日本人が特に異文化に対して寛容であったとか、あるいは吸収力が高かったと思ひ込むのも、若干危険な気がします。司会者のいないところで結論にいちやうとまずいんですけれども。そもそも私たちは日本人であるとか、日本文化という用語でものを考え続けることが正しいのかどうか。私個人のことを申し上げると一番無難だと思いますが、私はもちろん日本で生まれて、日本語で育って、日本語でものを書いて、そのことに喜びを覚えています。ですから間違いなく、その意味では日本人です。

例えば私が尊敬する先輩というか、歴史上の人は誰か。確かに世阿弥という人がいます。これは日本の能を大成した芸術家で、偉大な理論家だった。しかし私は、この世阿弥の能理論、あるいは芸術論というのは、本当に敬服します。客観的に公平に見て、世界のどこよりも早く演技論というものを考えた人で、それも徹底的に考えた人。当時のヨーロッパ、あるいはどの国よりも、中国よりも先に考えていました。その意味では尊敬します。しかしそれじゃあ、今私は能のファンであるかということ、嫌いではありません、尊敬もします。しかし私が芝居を商売とする人間として、本当に親近感を感じるのは世阿弥よりもシェイクスピアです。あるいはひょっとしたらチャーホフかもしれません。すると私の先祖は誰

なんだと言われたときに、非常に難しいわけです。さっきも言いましたけども、私は洋服を着ることについて和服を着るより安楽というか、なじみがあります。しかし靴になると少し自信がない。24時間靴を履いて飛行機に乗っていると脱ぎたくなります。そういう意味からいうと、もう日本人であるということ自体、非常にあいまいになってきているんじゃないか。河合さんは日本文化の、いまや守護神ですけど、でもご専門の勉強はドイツでなさっているわけで、半分ぐらいはドイツ思想の持ち主ですよ。

河合 そこが本当に大事なところで、私もナショナリズムというのは大嫌いなんです。日本、日本というのは。そんな気は全然ない。大体私の勉強してきたのはアメリカだとかスイスとかですから、もともとはあちらで勉強してきているんですが、私の体感というか実感として、やっぱり日本人だなとか、もっとひどいときには関西人だなとか、そういうのが抜けられなくて。今、山崎さんが靴の話と言われたからほっとしたんです。僕から見ていたら山崎さんなんて、パリパリで日本性がなくなっているかと思ったら、やっぱり足を地につけるときは日本人になっているなと思って嬉しかったんですが。私が本当にこういう近代化文明、こういうもの全部大事だし取り入れていくし、取り入れていく中で、何か実感としてやっぱり日本人だということにこだわっているのが一番いい言い方でしょうね。こだわり続けてものを言っているというふうに私は考えているんです。実際言われても、それはそうですね。私は浄瑠璃というのとモーツアルトと言われたら、やっぱりモーツアルトを聞くんじゃないかと思うんです、そうでしょう。そういうふうには言わないと困るんですが、といて、やっぱり日本人だなというふうには生きているんですが、この辺は津田さんはどうですか。

津田 これは私の仕事で浄瑠璃よりもモーツアルトのほうが良いと言うとちょっと問題があるんですが。(笑) 今、お話のありましたように、私自身も日本人であるから日本文化を見るべきだと、日本の芸能を見るべきだという押し売りはできないと思っています。だからむしろ日本文化を守るという意味から見れば、日本文化をおもしろく見ていただけるようにする努力を本当にしないと、おもしろくなければ見て頂けないというのは、当たり前だと思うんです。そういう意味で、私自身がこの仕事をするまで、そんなに歌舞伎ってほとんど見たことがなかったんです。大体自分の子供を殺して主君の子供のかわりに差し出すというような、「菅原伝授」とか「熊谷陣屋」って、自分の子供の方がかわいいのが当たり前じゃないかと。何で他人の子供のかわりに差し出すんだという、この抵抗感があって、初めからそんな話は聞きたくもないと。まだ主君のかたきというのはわかりますから、上司のかたきとか、今でも。そういうふうなところから、本当に見なかったんです。

ところが、この仕事柄、見る前にすごく本を読んで、シナリオから全部読んでいくと、当然自分の子供の方がかわいいのに殺さざるを得なくなる追い込まれ方というのが、ものすごくわかるんです。だから私は、先生がシェイクスピアとおっしゃったけど、近松門左衛門の話の方がおもしろいんじゃないかと思うぐらいに、その仕組みが入り組んでいるわけです。だけど、お客様に勉強してこいと、これも今の時代には合わないですよ。だからどのようにしてお客様にわかってもらうようにするかという努力を、今必死になってしないといけないなと思っているんです。だから例えば国立文楽では文楽の話を、今月は「仮名手本忠臣蔵」という8時間か9時間ぶっ続けのやつをやるんです。実際には長時間座っ

て頂くということ自体も、私も年齢のせいであちに行かなきゃならないことも多いので困るし、お尻も痛くなるので、その時間の問題もあるんですが、それよりも浄瑠璃で本当に人間国宝が熱を込めて言われるんだけど、その言葉が実際には、私にはわからない。そうすると話の筋もわからなくなって、何で自分の子供を殺すのかという話になってくるんです。それはやっぱり日本語でやっているんだけど字幕を入れるよりしょうがないんじゃないかなと。字幕を見ればわかりますから、お客様に事前に勉強してくれというよりも、字幕を出すほうがいいんじゃないかなと思って、今、1月からそうしようかなと思って努力をしているんです。

それが一例で、とにかくわかっていただけるように精一杯やってもわかって頂けなければ、もう博物館入りかなと。残念ながら「昔こういうのがあったよ」という、記録映画に残す以外しょうがないのかなというふうには思っているんですけどね。それじゃあ文化の多様性がなくなるじゃないかと思うのですが、それはまたよくしたもので山崎先生に今、随分御尽力いただいて、サントリー文化財団というのがあって、地域文化の育成というのに大変な努力をしているわけです。一例を挙げますと、今、北海道で冬の2月の雪祭り、6月のYOSAKOIソーラン祭りという、これは見物客が200万くらい出るような2大祭りです。そのYOSAKOIソーラン祭りというのは、何と北大の学生が夏休みに大学1年生で高知へ行ってよさこい踊りを見て感激して帰って、急遽北海道で北大の学生だけで実行委員会をつくって始めるわけです。そういうふうにして始めたのが、あたかも昔からあったソーラン祭りのような顔をして、今はすごい大きくなっているんです。そういうふうにしてやはり1つのものが死滅すれば、また新しいものが出てくる。この地域文化というのは、梅棹忠夫先生の話によれば、遊び心というものが育てるのだと。ところが日本人は本当に遊び心は上手ですよ。河合先生のお得意なしゃれなんて、あれは遊び心がなければできません。犬が卒倒したらワンパターンとか。(笑) 通訳の方、申しわけない、今は放っておいてください。そういうふうな心のゆとりというのか、遊び心というのは日本人は本当に豊富ですよ。川柳なんていうようなものを何百年も前からやっているわけですから。そういったものがある限り、地域文化の芽というのは幾らでもある。だから伝統文化なんてうかうかしていたら、そういうような新しい文化にとってかわられるぞという危機感もあって当然だし、そうすることによって新しい文化と古い文化がうまく混合していけるかなと。

先ほど控室で話をしていたんですが、私の子供のころ、相撲の仕切り時間というのは十何分。江戸時代は仕切り時間は制限なしですよ。相撲が始まる前に見ていて、買い物に行って2時間ほどして帰ってきたら、まだこうしていたっていうんです。だから、そんなものが今、はやるはずがないです。だけど相撲協会というのは元相撲取りばかりで、昔から日本人は「大男 総身に知恵は 回りかね」というんですが、今は賢いですよね。ちゃんと6時までに終わるんですから。

だからそういうふうにして古い伝統も残しながら、新しい知恵を盛り込むという、まさに不易流行ですけども、そういうもので伝統文化も我々は守ろうと。そして片一方の、外国から来た河合先生のお得意のフループなんかも、やっぱり大事だと思うんです。外国から見て日本人の文化程度、芸術能力の価値判断というのは、文楽や歌舞伎を見てはちょっとわからないです。自分たちもできる一緒のものをどれだけすばらしくやるかというのは、非常に説得力があるわけで。

これはJリーグですね、外国のトップ選手が日本の選手とまじって、レベルが上がって日本人が外国へ行く。そういうふうな場としては新国立劇場というのは、外国人のトップのオペラ歌手と日本人の歌手がまじって歌って、すばらしい実力になっていますから、そういう人たちがまた海外へ行くと。日本人というのは特殊な民族じゃないなど。自分らと同じものもこんなに立派にやるじゃないかという評価を得るために。だからそういうふうにして日本の文化の多様性を保つとともに、レベルを引っ張り上げるというのが、私どもの仕事かなと思っているんです。

河合 今お聞きしていてすぐに連想したんですが。ソーラン祭り、最近、関西の学生さんが学生の集まった文化力の集まりがありまして、色々みんなおもしろいことをやっているんです。

だから、やっぱりそういう中から自然発生的に、今学生さんが自分らでつくり出している。一番感激したのは、大学の壁がないんです。違う大学でも平気で一緒にやっているんです。それに僕は行ったんですけど、昔の学生運動というのはものすごいパワーがあったけど、あれはイデオロギーはよそからもらってやっていたから、どうしても長続きしなかった。今の学生さんは自分が考えたことでやり出しているから、これは本物じゃないかと。それとそういう建設するために、大学の壁を破壊するというか。破壊力と建設力が両方入ってきているところが非常におもしろい。これはもっとやってくれと言ったのです。何か日本人の持っている文化的なパワーというものが、今おっしゃっているように、どんどんもらうけれども、こっちもあるぞというのでぶつかることで、できる。そしておもしろいものはどんどんよそへ持っていけるんじゃないかなという気さえしています。

それからもう1つ、私は日本人というやつにこだわっていますので、こういう体験をしたのです。藤村美穂子さんというバイロイトで歌を歌っているぐらいの歌手の方なんです。この人と話をしていて、私はこだわるほうだから、日本人のこだわりはどうでしたと聞いたんです。そうするとおもしろいことを言われました。自分は初めに行ったときに、ワグナーをわかろうと思ったらドイツ人にならなきゃいけないと思って、あらゆる点でドイツ人のまねをした。幾らまねをしても何か残るところがあるんです、日本的に。しかしその日本的なもので勝負するというんじゃないと。どうしたかという、ワグナーが本当に言いたかったものは、これはドイツ人でもイギリス人でも日本人でもわからないぐらいのものだろう、それが山崎さんの言うておられる文明に通じると思うんです。何か根本的に絶対人類に通用するX、それをワグナーはああいうふうにした。それを歌うときには、私が歌うんだと。私はそれを歌おうとすると、ドイツ人はドイツ人で「私がそれを歌うんだ」、イギリス人はイギリス人で「私が歌うんだ」というふうにするんだというふうに思うと、日本人の私がワグナーを歌うということができるようになったと。そうし出したら一遍に評価されるようになったと言うんです。まねをしてみてもドイツ的にやろうとしたんじゃないと、しかしそこで日本人で歌ったとは言われないわけです。ワグナーが一番言いたかったことを自分が歌おうと思ったというのは、これはすごくおもしろくて。どこかにすごい、根本的なものを失うことはないけど、それぞれの個性とかそれぞれの多様性というものが生かされるというのが、文化の多様性かなというふうに思うんです。

山崎 今、河合さんも津田さんも、いわば文化行政というか、文化を援助する政府のお仕

事にかかわっていらっしゃるわけですけど、私はその観点から見たときに文化の多様化というのは2つのポイントがあると思うんです。1つは、これは色々な人が言っていることですけれども、文化の多様性というのは、ちょうど生物界における種の多様性と同じように重要である。今はつまらない、何の役にも立たないように見える動物、あるいはひょっとしたらバクテリアが将来とんでもない役に立つかもしれないから、自然の種は保存しなきゃいけない、多様性を守れということがありますね。同じように私は文化にもそういうものがきっとあると思うんです。実際に、例えば私などはいわゆる日本の近代演劇に属しているわけですが、近代演劇があるところまで来てから、日本の伝統芸能から学んだものというのは実にたくさんあったわけです。それは保存されていたから学べたわけです。そういう意味においての、少数種の保存ということは、1つの大きなポイントだと。

もう1つは、文化政策というのは不作為の作為ということがあるんです。つまり、しなかったから、えらいことをしてしまった。つまり日本の学校で、きょうは文部科学省の関係の方もたくさん来ておられますが、日本の学校で小学校以来教える芸術科目は美術と音楽なんです、この2つだけ。なぜそうだったかというのにはとんでもない冗談があるんです。これはどちらも兵隊さんに役に立つ。音楽をやると軍列行進に役立ちます。絵を習っていると、攻めていって敵の情勢を描写する、斥候に役に立つ。その他のものは取り入れられなくて。真っ先に犠牲になったのは演劇で、あんなものは役に立たないと。これは嘘ですよ。嘘ですけども、そういう具合に演劇というものは日本の教育体系の中になかった。だから日本人のほとんどの人は絵がかけるし、歌が歌えますが、芝居はできない。そうすると興味も衰える。今、単純に人口比でどれだけの人が芝居に関心を持っているかということやられると、ちょっと困るんです。そういう不作為の作為がある。ですからそこは何も教育の中に全部入れ込めという話ではありませんが、一部では私は教育の中で、例えば他国の文化とか、少数民族の文化というのに触れる機会、少なくともそれを知る機会は提供すべきだろうと。日本ぐらい近代化された国になると、お金もあるわけだから、そういう教育も取り入れなきゃいけない。それと同時に、やはり少数であっても一生懸命やっている人を見つけ出して、それを支援する。その際、それがどういうジャンルに属しているとか、どういう日本の伝統とつながっているということは、あまり考えないで。先ほどのソーランよさこい節みたいなもので、何で北海道でよさこいなんだとは言わないで育ててやるということが、私は非常に大事なポイントじゃないかと思えます。

河合 もう時間が大体来たのですが、知らない間に日本人としてとか、日本の国でとかいう話になってきて、結論みたいな感じも出てきたのですが。津田さん、まだ一言言うことはございませんか。

津田 いや、挿絵は終わりましたので。(笑)

河合 そうですね。私も、さっきも言いたいことは申し上げましたが、何かやはり文化の多様性という、非常に多様な中の、そこに流れている1つの線みたいなものは、どうもありそうだ。そこを踏み外してまで多様性ということもないし、そしてまた日本の国の持っているすごい多様性、いろんな、歴史的に見ても、あるいは本当に非キリスト教国で唯一近代文明の中にぱっと入り込んだおもしろい国なんですけど、そういう国で我々が今後また

どういうふうにしていくべきか。それは、日本が大事だということは、何もナショナリズムでもないし、民族主義でもない。ただしこの国で我々のできることを、本当に広い視野に立ってやっていこうということではないかと思います。

今日はお2人の方に来ていただいて、なかなかおもしろいお話ができたのではないかと思います。どうもありがとうございました。

司会 津田和明様、山崎正和様、河合隼雄文化庁長官でございました。盛大な拍手でお見送りください。ありがとうございました。(拍手)

以上をもちまして第2回国際文化フォーラム「文化の多様性」をテーマにお送りしました討論を終了させていただきます。長時間にわたるご参加ありがとうございました。

座談会報告

■ 座談会 I 「シルクロードと仏教文化」

■ 座談会 II 「音楽における二つの維新」

■ 座談会 III 「日韓学生サミット in 大阪」

■ 座談会 IV 「日韓若手芸術家・文化人会合」

■ 座談会 V 「文化の多様性への対応－21 世紀の美術館の課題－（その2）
～国際化時代における美術館の在り方～」

The background features a white space with several colored circles: a large blue circle at the top right, a medium green circle to its left, a large orange circle at the bottom left, a medium light blue circle at the bottom right, and a small pink circle at the bottom center. On the right side, there are several thin, parallel, curved lines that sweep across the page. A dark brown horizontal bar is positioned in the center, containing the title text. A small yellow rectangular element is located on the right edge of this bar.

座談会 I 「シルクロードと仏教文化」

座談会 I 「シルクロードと仏教文化」

ギリシャ、ローマの文化が、シルクロードをたどってインド、東アジアに伝播する過程で遂げた変遷を振り返り、その伝播の域内で育まれたギリシャ、日本などの多神教文化とユダヤ、キリスト、イスラムの一神教文化の相互関係を論じる。また、イラク、アフガニスタンでの多部族共存の歴史、日本における神仏共存などの事例を採り上げて、文化の多様性の中での人類の共生のあり方を考える。

開催概要

- 日時： 平成16年11月8日(月) 13:00~17:45
- 会場： 東大寺 本坊
- 主催： 文化庁、奈良県、日本経済新聞社、NHK、関西元気文化圏推進協議会
- 協力： 奈良国立博物館、奈良文化財研究所

プログラム

- | | | |
|-------|-------|-------------|
| 13:00 | 開会の辞 | 平山郁夫 |
| 13:10 | 歓迎の挨拶 | 松本公誠(東大寺別当) |
| 13:25 | 事例報告 | |
| 14:55 | 休憩 | |
| 15:15 | 事例報告 | |
| 16:15 | 自由討議 | |
| 17:15 | コメント | 松本公誠 |
| 17:25 | 総括 | 山折哲雄 |
| 17:35 | 閉会の辞 | 平山郁夫 |
| 17:45 | 閉会 | |



東大寺

奈良市の東、三笠山麓に燦然と鴟尾を輝かせている大仏殿を金堂とする華嚴宗大本山東大寺は、728年聖武天皇によって建てられたのがその始まり。後に盧舎那大仏の造像が行われ、752年に完成。さらに大仏殿を中心とする七堂伽藍の建設が続けられ、789年にその全貌が整った。大仏開眼以来絶えることなく続けられている二月堂の修二会は「お水取り」として親しまれ、域内の正倉院には聖武天皇、光明皇后遺愛の品等天平文化を代表する品々が納められている。平城京の東に建つ大寺という意味で「東の大寺」と呼ばれたのが東大寺の名の起こりと言われる。

●座談会I パネリスト・プロフィール

**平山 郁夫** (ひらやま いくお)

(東京芸術大学長)

日本を代表する画家。仏教伝来などのシルクロードをテーマに文化の伝播を描くとともに、世界各地の毀損や破壊の危機に瀕している文化遺産の保存・修復のために活動。東京芸術大学美術学部教授、ユネスコ親善大使、東京芸術大学長、日本育英会会長、(財)日本美術院理事長、日本ユネスコ国内委員会会長などを歴任の後、2001年より再び東京芸術大学長に就任。

**山折 哲雄** (やまおり てつお)

(国際日本文化研究センター所長)

国立歴史民俗博物館教授、国際日本文化研究センター教授、白鳳女子短期大学長、京都造形芸術大学大学院長を経て、現在国際日本文化研究センター所長。著書に、「臨死の思想」、「日本人の宗教感覚」、「悪と往生」、「近代日本人の美意識」、「鎮守の森は泣いている」、「愛欲の精神史」など多数。

**ムニール・ブシュナキ** アルジェリア/フランス

(ユネスコ文化担当事務局長補)

1965年アルジェリア情報文化省に入り、古代遺跡局および美術遺物遺跡局において各種要職を歴任。82年ユネスコに入り、世界の文化遺産に関する分野での任務を歴任の後、2000年現職に就く。考古学研究、文化遺産保護に関して多くの著書があり、2000年文化財保存修復研究国際センター(ICCROM)賞受賞。フランス、イタリア、チュニジア、コロンビア、ポーランド、ルーマニア、ベトナムでも功績が認められ多くの賞を受賞している。

**アブドゥル・アズィーズ・ハミード** イラク

(イラク共和国 考古・遺産庁長官)

バグダッド大学において過去35年間にわたりイスラム美術・建築学を教授する傍らイラク共和国考古・遺産庁長官としてイラクの文化遺産の保全に重要な役割を演ずる。2004年7月蘇州にて開催の第28回ユネスコ世界遺産委員会には、イラクを代表して出席。イスラム美術、建築に関する著作100点以上がある。

**ハサン・ハナーフィー** エジプト

(カイロ大学文学部哲学科教授)

67年よりカイロ大学哲学科教授、88年より同学科長。世界各地の大学で教鞭を取り、76年よりエジプト哲学会事務局長、83年よりアラブ哲学会副会長、英、仏、アラビア語の多数の著作があり、中でも『伝統とモダニズム』は古典イスラム学を再構築し西洋主義と真理論を解釈学的に再検討する壮大な試みである。彼の英語の最新刊は『イスラームと諸文明の対話』第1巻。

**モスタファ・モハッゲグダーマード** イラン

(シャヒード・ベヘシュティー大学教授(法哲学・法学))

イスラーム法及び国際法の研究で広く知られる。テヘラン、シャヒード・ベヘシュティー大学において法学及びイスラーム学を講ずるほか、司法・立法界の中でも重要な役割を演じている。また、イラン科学アカデミー、学術・文化研究最高会議、人文科学研究所高等評議会など国内主要教育・文化研究機関の理事会及び委員会において重要な役割を果たしている。法学、哲学、宗教に関して英語、アラビア語、ペルシャ語による著書多数がある。ルーバンカトリック大学(ベルギー)、クムセミナー(イラン)より博士号取得。

**森 孝一** (もり こういち)

(同志社大学神学部長、一神教学際研究センター長)

2003年、21世紀COEプログラム「一神教の学際的研究—文明の共存と安全保障の視点から」の中心拠点として、同志社大学一神教学際研究センターを設立。キリスト教・イスラーム・ユダヤ教とその文明・世界について、学際的・総合的な研究を行っている。専攻はアメリカ宗教史。主な著書に「宗教からよむ『アメリカ』」、「『ジョージ・ブッシュ』のアタマの中身」。

**ジェシカ・ローソン** 英国

(オックスフォード大学マートン・コレッジ学長)

大英博物館に25年間勤務し、同館東洋古美術部長を務めた後退職。1994年にオックスフォード大学マートン・コレッジ学長に就任し現在に至る。90年英国学士院会員に選ばれる。中国古代美術及びシルクロードをテーマに著書、論文が多数ある。

**田辺 勝美** (たなべ かつみ)

(中央大学総合政策学部教授)

専門は西・中央アジア美術史。トルコ、シリア、イラク、イラン、アフガニスタン、パキスタン、ウズベキスタンなどで考古学、美術史的調査に参加。ガンダーラの仏教美術、ササン朝ペルシア美術に関する研究成果が多い。シルクロードの文化交流においても、独自の分野を開拓し、その成果は画期的といわれた「アレクサンドロス大王と東西文明の交流展」(NHK, 2003年)の基本構想となった。

開催記録写真



会場の様子(東大寺本坊にて)



座談会を進行する平山氏



森本東大寺別当の歓迎の挨拶



仏教美術について語る田辺氏



森氏、ご専門は神学のご研究



仏教文化について語る山折氏



文化遺産の重要性を説明するブシュナキ氏



イスラーム文化を熱く語るハナーフィー氏



シルクロードについて語るローソン氏



イラクの文化遺産について語るハミード氏



法学、哲学、宗教的立場から意見を述べるモハッガグダーマード氏



開催風景（座談会I全体）

座談会 I 「シルクロードと仏教文化」

サマリー

ギリシャ、ローマの文化が、シルクロードをたどってインド、東アジアに伝播する過程で遂げた変遷を振り返り、その伝播の域内で育まれたギリシャ、日本などの多神教文化とユダヤ、キリスト、イスラムの一神教文化の相互関係を論じるとともに、イラク、アフガニスタンでの多部族共存の歴史、日本における神仏共存などの事例を採り上げて、文化の多様性の中での人類の共生のあり方を考える「シルクロードと仏教文化」と題した座談会が、平山東京芸術大学学長を座長として、イラクやイラン、エジプト、日英の研究者らが出席して東大寺の本坊で開かれた。

座談会の冒頭に、平山郁夫・東京芸術大学学長が「日本で仏教文化が形作られるにあたっては、シルクロード周辺諸国の様々な国々、民族の恩恵を受けた。イラク情勢は混迷しているが、人道、経済支援にプラスして文化面でも復興支援したい」と挨拶。続いて、ユネスコ文化担当事務局長補のムニール・ブシュナキ氏が、ユネスコが過去10年の間に実施したシルクロードにかかわる調査などを紹介し、「異なる文明の対話は難しくもあるが、すべての文明を尊重すべきだ」と述べた。

オックスフォード大学マートン・コレッジ学長（英国）のジェシカ・ローソン氏は、漢代中国の香炉「博山炉」のデザインに見られるイランの影響を紹介、シルクロードを介した交流が互いを豊かにしたことを語った。

また、イラク考古・遺産庁長官のアブドゥル・アズィーズ・ハミード氏は、シルクやテキスタイル・デザインを例にとり、古代中国の文物がイスラム支配以前の西南アジアに広まっていた状況を考古学的な調査結果を踏まえて説明した。続いてハミード長官はイラク戦争による混乱について触れ、「バグダッドの博物館で所蔵品の15000点が盗難にあった。しかし、ユネスコや周辺諸国の援助などにより5000点を取り戻し、さらに5000点を取り戻しつつある」と語った。

カイロ大学文学部哲学科教授（エジプト）のハサン・ハナーフィー氏はイスラム世界における伝統と革新について考察した。この中でハナーフィー教授は「西洋にあこがれるグループと伝統に固執しようとするグループがある」としつつ、「イスラム世界において近代性は伝統を否定するのではなく、伝統から生まれもので、継続性のある変化を求める」と語った。

このほか、シャヒード・ベヘシュティー大学教授（イラン）のモスタファ・モハッゲグダーマード氏は「時代は対話を必要としている。今日の様々な問題は文化の問題であり、協力していかないと甚大な被害を受ける。友愛・非暴力・誠実・平等という倫理観に基づいて、協力して行動することが重要だ」と訴えた。

最後に、司会を務めた山折哲雄・国際日本文化研究センター所長が、日本の平安時代、江戸時代といった長いあいだ平和な時代が保たれた要因に、神仏共存をあげ、「我々日本人として伝統的な宗教のあり方を日本から発信し、キリスト教、イスラム教を初めさまざまな宗教間の対話を進めていく必要がある」と発言し、東大寺別当の森本公誠氏は今回の座談会について「お互いが知り合い、相互補完的に生きていくことが大切であり、今回のシルクロードの遺産をきっかけとして集まった本座談会をシルクロードの終着点である東大寺で実施できたことは非常に有意義であった」とまとめた。

本座談会には、関係者をはじめ約120名の傍聴者が集まり、パネリストへの質問を行うなど、傍聴者と発表者が一体となった議論が展開された。

座談会I「シルクロードと仏教文化」

座長講評：平山郁夫

昨年11月に、奈良東大寺にて、「仏教文化とシルクロード」について、シンポジウムが開かれた。国別では、日、英、エジプト、イラン、イラク、アルジェリア、また国際機関としてはユネスコ本部からの参加があった。東西文化交流、シルクロードの文化について、専門的な意見が述べられた。

シンポジウムの真の目的は、文明の衝突を避けるための話し合いである。一神教であるキリスト教とイスラム教に対して、宗教的には日本の多神教的な文化が間に入り話し合いの糸口を見出すことにあった。国際的にはパレスチナ問題や、アフガニスタンやイラクなどの争いを考えることにあった。それぞれの立場から意見が述べられたが、シンポジウム開始の当初から、時間を経るに従って、共生しようとの意見もみられた。日本における異文化間の対話の第一歩である。こうした文化人による意見の交換が度々重ねられると、相手の立場を尊重しお互いに違いを認め共存することに繋がってくるのである。キリスト教やイスラム教は元来同根から生まれた宗教である。中東やヨーロッパにおけるの歴史的關係は深い。

全く異なった東洋の仏教文化も、美術的な面では交流の跡もある。とくに宗教的には寛容な日本が一神教の対立に少しでも潤滑油の役目を果たすならば、大きく国際貢献となるであろう。日本文化の源流を見ると、様々な面で東西文化交流の影響をみることができる。

日本はアジア地域を、第二次大戦で戦場とし、多大な迷惑をかけている。これを反省し、平和文化国家を日本の理念として60年を経ている。先進国の一員として、日本はODAなどによる国際経済協力を果たしてきた。が、中央アジア以西では、アジア諸国も含めて武器輸出をしていない先進国の1つである。今こそ、世界で多発している民族や宗教紛争に対して、文化によるソフトランディングを果たす日本の役割は大きく、国際的に期待されている。東大寺シンポジウムはその一歩である。

座談会 I 「シルクロードと仏教文化」

司会提言：山折哲雄

常識とされる考え方があった。

日本文化には、もともと発信機能などない、あったとしても微弱なものだ。しかし受信機能と言うことになれば、日本文化には燦然たる歴史と伝統がある、と。

この常識に、私は半ば賛成する。いや、同意せざるをえない。それこそわれわれの歴史と伝統が、そのことを証明しているからだ。

とはいえむしろ今日のわれわれは、この常識の前にただ腕をこまねいて膝を屈しているわけにはいかない。これからはその日本文化を、何としてでも世界に発信していかなければならない。そういう時代の中に投げだされているからである。そのために新たな戦略を立て、現実的な戦術を練り直さなければならぬ段階にきているからだ。

今日、海のかなたからいつでもきこえてくるのがグローバリゼーションの合唱である。西欧発信の普遍主義の声、声である。その合唱と声に抗して、われわれの発信機能をどのように再構築したらよいのか。外来の普遍主義という尺度にたいして、われわれ自身の黄金の尺度をどのように持ち出すのか。それにさしあたり三つぐらいの方法があるだろうと私は考えている。

1. 情理かねそなえる認知的スタンス
2. 文武両道にわたる伝統モデル
3. 神仏共生システムにもとづく多元主義

である。

第1の「情理かねそなえる」とは、理性に人情の血を通わせるという認知の戦略である。理性のディベートや理屈に終始するバトルは、せいぜい相手の頭か胸のあたりにしかとどかない。「理」を相手の腹の底に打ち込むためには、浸透力のある「情」の作用をはたらかせなければならない。今日、その情理が噛み合わないようなグローバリゼーション論議があまりにも多すぎるのである。

第2の「文武両道にわたる伝統モデル」とは何か。わが国には古来、公家的なものによって武家的なものをコントロールする非暴力的な技術の伝統が豊富にあった。身に寸鉄を帯びずして武力の発動を鎮める装置である。平安時代350年、江戸時代250年の、長期にわたる「平和(パクス)」は、その巧みな技術(人心掌握)によって初めて可能になったことを思いおこす必要があるのではないか。

第3の「神仏共生システムにもとづく多元主義」。わが国においては土着の神道と外来文化としての仏教が、いわば共棲する形でみごとな同伴関係を結んできた歴史がある。それが文明や文化を受容するときの基本パターンとなって、われわれの社会の形成に大きな影響を与えてきた。これこそまさに、一神教にもとづく一元的な合理信仰や一面的な市場信仰を相対化するための絶好の思想武器ではないか。これをこれからは世界にむかって積極的に発信していかなければならないだろう。

昨秋、東大寺で行われた文化庁主催の国際文化フォーラムは、そうした問題を考えるためのとてもよい機会であったと思う。

座談会I「シルクロードと仏教文化」

司会講評：山折哲雄

イラク戦争のさなか、中東やヨーロッパの研究者と日本の専門家10名が、奈良の東大寺に集まった。グローバル化がすすむ世界の中で、「文化の多様性」や「宗教の対話」について語り合うためだった。2004年11月8日のことだ。

これは文化庁が主催する「国際文化フォーラム」の一環として行われたものだが、そのメイン・テーマが「シルクロードと仏教文化」であった。

シルクロードはかつて、東西の豊かな文物が行き来し、エキゾチックな芸術や宗教が交流する文明の十字路だった。そのダイナミックな運動の中から、知られるように正倉院芸術が誕生し、東大寺の見上げるばかりの大仏が建立されることになったのである。

それが今日、どうしたことか、アフガニスタンではタリバン勢力によってバーミヤーンの大仏が破壊され、イラクの戦乱下では博物館の貴重な文化財が略奪と盗難にあっている。シルクロードにまつわる歴史遺産が危機にひんしているといっている。

シンポジウムでの討論はしばしば錯綜し、白熱化した。戦争と平和、宗教と芸術をめぐる激しい応酬が繰り返された。タリバン流の原理主義をどう克服するのか、文明間の対話はいわれているように果たして実現可能なのか。討論会場には、世界の紛争地域に噴出する困難な諸問題が重くのしかかり、息苦しい雰囲気が広がっていった。

たしかにわれわれは、共存の実をあげるために相手の立場を大切にしなければならない。異文化との共生、自己主張の抑制、多様な価値観の尊重、などである。討議の最後になって、ワラをもつかむような気持ちでつむぎ出されたのがそのようなキャッチフレーズであり、決意表明であった。

今のところわれわれにできることは、それしかないのかもしれない。このような対論をあきらめることなく、持続的につづけていくほかはないのであろう。世界政治の分野で国連がやろうとしてきたのがそうであったし、同じことを文化や芸術の分野でやろうとしてきたのがユネスコの運動だった。この「国連」的視野を確認し、「ユネスコ」的視点を強化していくことを、まずもって心掛けるほかはないのである。

ただわれわれは、このフォーラムの間隙をぬって正倉院を見学するとともに、あの大仏の威容に接し、日本庭園の静謐な空間にふれる機会をもった。まさにシルクロードと仏教文化の恩恵によって生み出された精華の一端である。多様な異文化を受容しつつ創造の歩みつづけてきた日本列島に固有の文化が、そこに息づいていたのである。シンポジウムへの外国からの参加者たちも、そのことを肌身を感じつつ帰国されたのではないかと思う。

われわれは国連的視野やユネスコの視点をもちとともに、日本の視野や日本文化の視点をもつことが、これからの文明対話の時代には必要ではないかと改めて痛感した次第である。

The background features a white space with several colored circles: a large blue circle at the top right, a medium green circle to its left, a large orange circle at the bottom left, a medium light blue circle at the bottom right, and a small pink circle at the bottom center. On the right side, there are several thin, parallel, curved lines that sweep across the page. A solid green horizontal bar is positioned across the middle of the page, containing the text.

座談会 II 「音楽における二つの維新」

座談会 II 「音楽における二つの維新」

明治維新時の洋楽の導入と、現在の、国際化や情報化維新によってあらゆる種類の音楽の流入状態という、我が国の明治と平成の音楽状況を対比させて、その違いと共通性について論じる。音楽に関する東京と関西の文化圏にも触れる。

開催概要

- 日時： 平成16年11月12日(金) 13:00~17:30
- 会場： 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール「中ホール」
- 主催： 文化庁、滋賀県、財団法人びわ湖ホール、
日本経済新聞社、京都新聞社、NHK、
関西元気文化圏推進協議会

プログラム

- 13:00 挨拶 國松善次(滋賀県知事)
- 13:05 挨拶 海老沢 敏
- 13:15 デモンストレーション
林 美智子
国本武春
- 13:55 パネリスト発表
- 15:15 休憩
- 15:30 パネルディスカッション
- 17:30 閉会



滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

美しい淡海のほとりで、歌う、踊る、奏でる……。びわ湖ホールは素晴らしい舞台芸術と出会い、観る人と演じる人が感動を分かち合うステージ。湖国から未来へ、芸術の翼をのびやかに広げ、はばたいていきます。オペラ、バレエ、ミュージカル、クラシックコンサートなど、ジャンルを超えて多彩な舞台芸術が集まり、優れたステージを繰り広げる大ホール。充実した舞台設備を備えた中ホールは、演劇向きホールです。小ホールは、室内楽など小編成のクラシックコンサートに適したアットホームなホールです。

●座談会 II パネリスト・プロフィール



海老澤 敏 (えびさわ びん)

(財団法人新国立劇場運営財団副理事長 (当時))

日本モーツァルト研究所所長、ザルツブルク国際モツァルトテーム財団中央モツァルト研究所所員、同名財団員、ポーランド王立音楽アカデミー名誉会員。芸術選奨文部大臣賞、紫綬褒章、オーストリア共和国有功勲章学術・芸術第一等十字章、フランス政府学術功労勲章オフィシエ他、多数の賞(章)を受く。「モーツァルト像の軌跡」、「モーツァルトの生涯」、「むすんでひらいて考」、「超越の響き」他、著書、訳書、編著、論文多数。



オットー・ビーバ オーストリア

(ウィーン楽友協会資料館長、図書・収集品ディレクター)

ウィーン楽友協会において同協会所蔵の資料、図書、収集品の統括を行う。1973年から2002年までウィーン音楽大学において、現在はウィーン大学において教鞭をとる。世界の多くの国際的音楽学会、出版協会、各種学術団体会員として、日本を含む多くの国で講演。18～19世紀に書かれた楽譜120点余りの編集出版を統括したほか、欧、米、日本などで開催される音楽関連の展示を学術的観点から統括、管理する機会が多い。



小島 美子 (こじま とみこ)

(国立歴史民俗博物館名誉教授)

東京芸術大学講師、国立歴史民俗博物館教授、江戸東京博物館研究員などを経て現在国立歴史民俗博物館名誉教授、日本民俗音楽学会会長。日本近代音楽史研究から出発し日本伝統音楽の研究に進む。日本列島全体の全階層を視野に入れた、音の聞こえる音楽史をめざしている。著書に「日本音楽の古層」、「音楽から見た日本人」などがある。



ヨーゼフ・クライナー ドイツ/オーストリア

(ボン大学日本文化研究所所長、アジア研究センター代表)

1961年より九州をはじめ西日本各地、特に沖縄を中心に実地調査を行う。長年にわたって日欧文化交流の歴史と現状、並びに西洋における日本観の変遷に関心をもって研究に携わる。ウィーン大学教授、日本学研究主任を経て77年現職に就く。88年東京にドイツ連邦政府によるドイツ-日本研究所の開設に尽くし96年まで初代所長を務める。ヨーロッパ学士院、ノルトライン・ヴェストファーレン学士院会員、オーストリア学士院通信会員。



渡辺 裕 (わたなべ ひろし)

(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

東京大学助手、玉川大学専任講師、大阪大学助教授を経て、現在東京大学大学院人文社会系研究科教授(美学芸術学)。著書に「聴衆の誕生」(サントリー学芸賞)、「文化史のなかのマーラー」、「音楽機械劇場」、「宝塚歌劇の変容と日本近代」、「西洋音楽演奏史論序説」。他、編著、共著、訳書多数。



林 美智子 (はやし みちこ)

(オペラ歌手)

二期会会員、新国立劇場オペラ研修所第1期生。「フィガロの結婚」、「ドン・ジョヴァンニ」、「ばらの騎士」などオペラ出演の機会が多い。ベーターベン「第九」、モーツァルト「戴冠ミサ曲」などのソリストとしても活躍。グレッツキ「交響曲第3番悲歌のシンフォニー」ではコルド指揮ワルシャワ国立フィルと共演。2003年ミトロプーロス国際声楽コンクールで入賞し、オペラ「エウメニデス」世界初演にコルフィ役に指名された。



国本 武春 (くにもと たけはる)

(浪曲師、シンガーソングライター)

1981年に東家幸楽に入門、翌年浪曲師としてデビュー。1995年文化庁芸術祭賞演芸部門新人賞受賞。2000年、芸術選奨文部大臣新人賞(大衆演芸部門)受賞。2002年、ニューヨーク・リンカーンセンター及びワシントンDC・ケネディーセンターにおいて上演のブロードウェイミュージカル「太平洋序曲」に主役として出演。2003年9月より1年間、文化庁文化交流使として米国テネシー州イーストテネシー州立大学に留学。

開催記録写真



海老澤氏座談会オープニング挨拶



秋篠宮妃殿下ご臨席



林氏による熱唱（デモンストレーション）



国本氏による三味線演奏（デモンストレーション）



日欧文化交流の歴史を語るクライナー氏



日本の民俗音楽について説明する小島氏



音楽関連の展示について語るピーバ氏



具体例をもとにした渡辺氏の論評



なごやかな中にも白熱した議論が…

座談会 II 「音楽における二つの維新」

サマリー

明治維新時の洋楽の導入と、現在の国際化や情報化維新によってあらゆる種類の音楽の流入状態という、我が国の明治と平成の音楽状況を対比させて、その違いと共通性について論じる座談会「音楽における二つの維新」が12日、大津市のびわこ湖ホールで開かれた。

また、本座談会は、秋篠宮妃殿下のご臨席を仰ぎ、300名近い傍聴者を集めて開催された。

座談会に先駆けて、オペラ歌手の林美智子さんの独唱と、文化庁文化交流使で浪曲家の国本武春氏の三味線演奏等が行われた。

座談会は海老澤敏座長の司会で進行。まず、パネリストのヨーゼフ・クライナー・ボン大学日本文化研究所所長、小島美子・国立歴史民俗博物館名誉教授、オットー・ビーバ・ウィーン楽友協会資料館長、渡辺裕・東京大学大学院人文社会系研究科教授の4人がそれぞれ持論を展開した。

小島名誉教授は「明治期の日本では音楽イコール西洋音楽という考え方が支配したため、当初は伝統音楽の存在が無視されたが、大正時代から徐々に伝統を生かした日本人独自の表現方法を模索し始めた」と解説。

オットー館長は「明治期に西洋は日本の音楽に多大な影響を与えたが、日本の音楽が西洋に影響を与えなかったのはなぜか」と疑問を呈し、渡辺教授は「日本は明治期に西洋音楽を受け入れたが、それは日本文化の延長線上で受け入れたに過ぎない」と主張した。

また、クライナー所長は、「文化は地域ごとに多様であり、お互い影響し合いながら変容する」としたうえで、沖縄の歌手やリズムが、現代の日本のポップスに与えた影響などをひもといた。

座談会是这样したパネリストの見方を軸に展開したが、日本における音楽の維新が、明治期と現在の2回に限られたものではなく、6-7世紀の唐楽、高麗楽などの流入や16世紀に琉球から伝わった三味線の影響など節目ごとに起きたという見方では一致した。

また、小島教授は「和太鼓や尺八は欧米の音楽家が注目しており、今後は日本の伝統音楽が欧米の音楽に影響を与えうる」とし、複眼的な視点の必要性を訴えた。

最後は海老澤理事長が、「滝廉太郎が短期間だったが欧州を体験し、日本の近代歌曲を創始したように、日本の音楽文化は今後も外国と向き合う形で変わらざるを得ない」と締めくくった。

座談会Ⅱ「音楽における二つの維新」

座長講評：海老澤 敏

この座談会の趣旨を「音楽における二つの維新」と題した座長の意図は、日本における近代(明治時代)と現代(二十世紀末、すなわち昭和末期と平成)が、いずれも大きな変革の時代に当たっているとの前提から、その二つの変革、革新の意義を、それぞれ異なった専門分野のパネラー諸氏に、多面的に検証していただくことにあった。

時間的な制約その他もあって、その座長の意図は必ずしもその方向で論議が尽くされたとは言い難い。しかし遂に日本における音楽の在り方について、重要な問題点に強い照明が当てられたことが印象的であった。

一つは伝統は変容しつつ受け継がれていくこと。一つは日本の音楽における革新、ないし文化的維新は、歴史的には、すでに以前に幾度か行われていること。その最たるものは大陸からの音楽文化の受容から生み出されたもので、他国の音楽を移入しつつ、それを日本風に変容させてきたこと。

さらには日本における音楽文化の多様な地域性の意義が強調され、かつ明治以降の西洋音楽文化の普及にあずかって貢献した音盤製作技術も、我が国伝統芸能の普及や変容にも活かされたとの指摘があった。

現代の音楽維新における伝統音楽、伝統芸能の重要性と今後の音楽教育への取り込みも話題となった。

十六世紀はるばる布教活動にやって来たイエズス会士オルガンティノが南蛮寺の境内で出会った老人から聞いた言葉が思い出される。

「泥烏須(デウス)もこの国へ来ては、きっと最後には負けてしまひますよ。我々の力と云ふのは、破壊する力ではありません。造り変へる力なのです。」こう語った老人は中国から伝えられた漢字、そして墨蹟についても言葉を続けるのだ。「彼等が手本にしてゐたのは、皆支那人の墨蹟です。しかし彼等(空海、道風)の筆先からは、次第に新しい美が生まれました。彼等の文字は何時の間にか、王羲之でもなければ褚遂良でもない、日本人の文字になり出したのです。しかし我々が勝ったのは、文字ばかりではありません。我々の息吹は潮風のように、老儒の道さへも和げました。」(芥川龍之介。「神神の微笑」より)

新しい日本の維新に、音楽の維新に必要なのはこうした日本人の古来の、生来の力の蘇りであろうか。

The background features a white space with several colored circles: a large blue circle at the top right, a medium green circle to its left, a large orange circle at the bottom left, a medium light blue circle at the bottom right, and a small pink circle at the bottom center. On the right side, there are several thin, parallel, curved lines that sweep across the page. A solid blue horizontal bar is positioned across the middle of the page, containing the text.

座談会 III 「日韓学生サミット in 大阪」

座談会 III 「日韓学生サミット in 大阪」

日韓両国の高校生、大学生が、日韓の高校生の交流と初恋を描いた映画「チルソクの夏」を観賞し、映画の感想とこれからの日韓の若者交流、文化交流について語り合う。

開催概要

- 日時： 平成16年11月14日(日) 13:30~18:00
- 会場： 国立国際美術館
- 主催： 文化庁、大阪府、大阪市、日本経済新聞社、NHK、国立国際美術館、関西元気文化圏推進協議会

プログラム

- 13:30 挨拶 宮島久雄 (国立国際美術館長)
- 13:40 映画上映 「チルソクの夏」鑑賞
- 15:30 休憩
- 16:00 座談会
司会進行・アドバイザー
大平光代、平田オリザ、寺脇 研
(日本側)
大阪市内の高校生4名
日韓交流に携わった経験のある大学生3名
(韓国側)
大阪市内の在日韓国人高校生3名
日韓交流に携わった経験のある大学生2名
金信愛・啓明大学大学院生
(平成16年度外国人による日本語弁論大会外務大臣賞受賞)
- 18:00 閉会



国立国際美術館

国立国際美術館は、1977年に文化庁の施設等機関として設置された4つの国立美術館のうちのひとつです。日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために必要な美術作品、その他の資料を収集保管して、公衆の観覧に供し、あわせてこれらに関連する調査研究および事業を行うことを目的としています。

●座談会 III 司会進行・アドバイザー・プロフィール



大平 光代 (おおひら みつよ)

(大阪市助役)

1990年司法書士、97年一回目の挑戦で司法試験に合格し、97年より大阪弁護士会所属弁護士。2003年12月に、当選したばかりの關淳一大阪市長に請われて助役となる。教育・文化施策などを担当。半生を綴った「だから、あなたも生きぬいて」はミリオンセラーとなるとともに、韓国語、中国語に翻訳・出版された。



平田 オリザ (ひらた おりざ)

(劇作家、演出家、桜美林大学文学部助教授)

劇団「青年団」主宰。こまばアゴラ劇場支配人。95年「東京ノート」で第39回岸田國土戯曲賞を受賞。新しい演出様式による「現代口語演劇理論」を確立する。「東京ノート」は現在5カ国語に翻訳され、国内および海外からも高い評価を得ている。97年「月の岬」(作・松田正隆)で第5回読売演劇大賞最優秀作品賞・優秀演出家賞受賞。2003年、日韓合同企画「その河をこえて、五月」で第2回朝日舞台芸術賞グランプリを受賞。



寺脇 研 (てらわき けん)

(文化庁文化部長)

1975年文部省入省。初等中等教育局職業教育課長等を務めた後、一時広島県教育委員会教育長に。再び文部省に戻り高等教育局医学教育課長、生涯学習局生涯学習振興課長、大臣官房政策課長、文部科学省大臣官房審議官生涯学習政策担当を務める。平成14年より現職。「生きていいの?」、「対論・教育をどう変えるか」、「21世紀の学校はこうなる」、「どうする学力低下」、「中学生を救う30の方法」など、著書多数。

開催記録写真



石田みつる先生のワークショップ



宮島館長の座談会開会の挨拶



映画「チルソクの夏」鑑賞



熱の入った討論



韓国側パネリスト



座談会を進行する寺脇氏



座談会を進行する平田氏



レセプションでの大平氏の挨拶



レセプションでの歓談



レセプションでのアトラクション



熱の込めった討論



パネリストの一团

座談会 III 「日韓学生サミット in 大阪」

サマリー

日韓両国の高校生、大学生が日韓の高校生の交流と初恋を描いた映画「チルソクの夏」を観賞し、映画の感想とこれからの日韓の若者交流、文化交流について語り合う座談会「日韓学生サミット in 大阪」が国立国際美術館で開かれた。

座談会には、日本側から大阪市内の高校生4人と、韓国人家庭にホームステイしたことのある学生など大学生3人、一方、韓国側から大阪市内の在日韓国人高校生3人と、日本留学の経験がある学生など大学生3人が参加した。司会進行・アドバイザーとして、大平光代・大阪市助役、劇作家の平田オリザ氏、寺脇研・文化庁文化部長が加わった。

韓国側からは、日本に留学している大学生が「韓国人は日本に負けてはいけないという感情の中で生きているし、親の反対で日本人との結婚をあきらめた人もいる」と、反日感情が残っていることを指摘した。その反面で、「日本に留学して良い体験をして、日本人一人ひとりには良い感情を持っている。お互いに友好を築ける関係にあり、相手をもっと知るべきだ」と述べた大学生もおり、個人レベルから交流が広がる可能性を示した。

在日韓国人で大阪の市立高校に通う生徒は「中学まで民族学校に通っていたが、公立高校に入って友人たちに温かく迎えられ、友情や恋愛には国境がないと思えるようになった」と言う。

日本側からは、「討論して、韓国の歴史や自分の国のことへの勉強不足を痛感した。韓国と日本を国家レベルでつなぐために、互いの意識が友好に向くよう、対話することの大切さを強く感じた」と若者同士の交流に期待を示した大学生もいた。

学生たちの活発な議論を受けて、平田オリザ氏からは、「となりの国である韓国とは、これからも近所付き合いをしていくことになるが、相手のいやなことはしないことが大切である。そのためにもお互い最低限のことを知るために学ぶことが必要ではないか。」と、相互理解の必要性を強調し、大平光代氏も日本の着物に対する韓国の国民が持つイメージの違いに驚いた経験を元に「相手を理解し、また、自分自身の考えを伝えることによって理解が深まる」として、隣国でありながらも文化の違いを認識し、付き合っていくことが大切だと述べた。

最後に寺脇氏は「日韓にとって不幸な100年の歴史を知らなければならないのは当然だが、半島から漢字をもたらしてくれるなど、恩恵を受けた両国の長い歴史を知って、次の100年、2000年に向けての交流を考えていく必要がある」と総括した。

本座談会には、大阪市内の高校生や大学生、また、現在日本に留学している韓国人大学生など、100名近い傍聴者を集め、両国の学生達の繰り広げる議論に耳を傾けた。

また、座談会終了後には、参加者、傍聴者を集めたレセプションが開催され、その中で大阪府立東住吉高校の生徒による長唄三味線が披露され、座談会に花を添えた。

The background features a white space with several colored circles: a large blue circle at the top right, a medium green circle to its left, a large orange circle at the bottom left, a medium light blue circle at the bottom right, and a small pink circle at the bottom center. On the right side, there are several thin, parallel, curved lines that sweep across the page. A dark blue horizontal bar is positioned across the middle of the page, containing the text.

座談会 IV 「日韓若手芸術家・文化人会合」

座談会 IV 「日韓若手芸術家・文化人会合」

2004年1月の韓国における第四次日本文化開放および2005年の「日韓友情年2005」の実施を踏まえ、映画、現代演劇、音楽、アニメ、マンガ、サブカルチャーなどの分野で活躍する日韓の若手・中堅の芸術家・文化人が一同に会する機会を設け、日韓文化交流について分野を横断した討議を行うとともに、「共創」を志向する新しい文化交流の方向性を打ち出す。

開催概要

- 日時： 平成16年11月15日(月) 13:00～17:00
- 会場： NHK大阪放送局「テレビ第2スタジオ」
- 主催： 文化庁、大韓民国大使館韓国文化院、
大阪府、大阪市、日本経済新聞社、NHK、
関西元気文化圏推進協議会

プログラム

- | | |
|-------|--------|
| 13:00 | 開会・座談会 |
| 15:00 | 休憩 |
| 15:15 | 座談会 |
| 17:00 | 閉会 |

●座談会 IV パネリスト・プロフィール

**赤坂 真理** (あかさか まり)
(小説家)

1990年より、カルト的なアート誌「SALE2」の造本をその発行者より一任され、編集と執筆の仕事始める。1995年「起爆者」で作家デビュー。1996年「ヴァニョ」と「ヴォイセス」を発表し、一躍高い評価を受ける。1997年初の長編「蝶の皮膚の下」が三島賞候補に。2000年中編「ミュージック」が野間文芸新人賞を受賞(韓国語訳あり)。1999年発表の「ヴァイブレーション」が芥川賞候補となる。同作は2003年、廣木隆一監督に映画化され共感呼んで異例のロングランを記録、国内外で数々の賞を受けた。映画「ヴァイブレーション」は韓国の映画祭にも出品される。ほかの著書に「コーリング」「彼が彼女の女だった頃」などがある。

**江川 達也** (えがわ たつや)
(漫画家)

1983年本宮プロダクションアシスタントとして漫画界に入り、84年「BE FREE!!」で漫画家としてデビュー以後、「まじかる☆タルネートくん」、「東京大学物語」、「GOLDEN BOY」、「日露戦争物語」、「源氏物語」など長編シリーズを次々発表。現在、週刊、月刊コミック雑誌五誌に作品を掲載中。映像化、D.V.D化、ゲーム化、単行本化作品多数。

**阪本 順治** (さかもと じゅんじ)
(映画監督)

1989年「どついたるねん」で鮮烈デビュー。以後、91年「王手」、94年「トカレフ」、96年「ピリケン」などを発表。2000年「顔」では各映画賞を総なめにする。同年に「新・仁義なき戦い」。02年には金大中事件の謎に迫った「K T」が韓国でも話題に。03年「ほくんち」。近作は04年「この世の外へ クラブ進駐軍」。次回作は「亡国のイージス」05年夏公開予定。

**原 恵一** (はら けいいち)
(アニメーション監督)

CM、PR映画製作会社からシンエイ動画入社。制作進行から演出へ。関わった作品は「ドラえもん」「エスパー魔美」「クレヨンしんちゃん」など。アニメーション映画「クレヨンしんちゃん」はヒット・シリーズとなるとともに、作品「クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ アッパレ! 戦国大合戦」(Crayo n Shinchan Arashi wo Yobu Appare! Sengoku Daigassen)は2002年度【第6回】文化庁メディア芸術祭大賞(2003 (6th) Japan Media Arts Festival Grand Prize)を受賞した。

**平田 オリザ** (ひらた おりざ)
(劇作家、演出家、桜美林大学文学部助教授)

劇団「青年団」主宰。こまばアゴラ劇場支配人。95年「東京ノート」で第39回岸田國士戯曲賞を受賞。新しい演出様式による「現代口語演劇理論」を確立する。「東京ノート」は現在5カ国語に翻訳され、国内および海外からも高い評価を得ている。97年「月の岬」(作・松田正隆)で第5回読売演劇大賞最優秀作品賞・優秀演出家賞受賞。2003年、日韓合同企画「その河をこえて、五月」で第2回朝日舞台芸術賞グランプリを受賞。

**宮台 真司** (みやだい しんじ)
(東京都立大学人文学部助教授)

1989年の「権力の予期理論」によって硬質な社会システム理論家として高い評価を得る。93年いわゆるブルセラ論争をきっかけに一般にも注目を集める。その後「制服少女たちの選択」、「終わりなき日常を生きる」によって成熟社会へと向かいつつある不透明な社会を分析する社会学者としての位置を確立。テレクラ、援助交際、オウム問題、専業主婦、少年犯罪、学級崩壊、盗聴法など多くの分野で発言。改革プログラムなどにも参加。

**全 成太** (ジョン・ソンテ)
(小説家、中央大学校芸術大学院講師)

94年、小説が「実践文学新人賞」に当選し文壇デビュー。99年、小説集「埋香」(Maehyang)刊行後、その才能を認められ、デサン創作基金、シン・ドンヨブ(Sin Dong yub)創作基金から助成を受ける。01-02年、民族文学作家会事務局長を歴任。03年、評伝「全泰壹」刊行。

**張 允炫** (チャン・ユンヒョン)
(映画制作者・監督、CNフィルム代表)

日本でもお馴染みの映画「接続」、「カル」の監督。その他、「恋風恋歌」、「テルミーサムシング」、「花の島」等、ハン・ソツキユ、シム・ウナ、チャン・ドンゴンら超一流俳優がキャストに名を連ねる。今年に入って既に3本の作品を世に送り出している。映画「接続」は、第35回大鐘賞最優秀作品賞、新人監督賞をはじめ数々の賞に輝いた。

**金 侏鍾** (キム・ヒュジョン)
(秋渓芸術大学校文化産業大学院院長)

米国ペンシルバニア州立大学経済学博士(産業組織論)。主な研究分野は、文化産業における経済学、日本の大衆文化産業、スポーツと経済の経営戦略の分析等。現在、文化観光部文化産業政策諮問委員、文化観光部韓日文化交流政策諮問委員、韓日文化交流会議委員、韓国ゲーム産業開発院理事、韓国文化コンテンツ学会編集理事、韓国文化経済学会編集理事。

**李 正鎬** (イ・ジョンホ)
(アニメーションプロデューサー、(株)マゴ21代表)

光州民営放送局事業準備チーム長、ケーブルTV漫画チャンネル事業準備チーム等、放送分野の立役者として活躍。企画から制作、演出までオールマイティーの敏腕家である。主な作品に、「漫画特急ブンブン」企画・演出、日本アニメ「スレイアース」等海外作品約200編の録音演出、韓国創作アニメ「靈魂騎兵ラジェンカ」企画・録音演出。長編アニメ「オセアム」は、04年フランスアマシー国際映画祭でグランプリを受賞。

**梁 正雄** (ヤン・ジョンウン)
(劇団 旅行者代表・演出家、京畿大学講師)

代表作に「縁 Karma」(Yun Karuma)、「真夏の夜の夢」、「幻」、「椅子たち」、「ソウルの気の悪い女」(「椅子たち」以外はすべて作・演出)。01年文化振興院新進演劇人評論家協会21世紀期待の星に選定。02年密陽夏公演芸術祝祭大賞・人気賞受賞。03年「縁 Karma」(Yun Karuma)で、エジプトカイロ国際実験演劇祭大賞(作品賞)受賞。同年、東亜日報主催プロが選定した我々の分野の最高次世代演出家5人に選定される等、若手作・演出家として最も注目を集めている。

**尹 胎鎬** (ユン・テホ)
(漫画家)

高校卒業後、漫画家ホ・ヨンマン氏、チョ・ウンハク氏に師事。93年、月刊ジャンプ「非常着陸」でデビュー。主な作品に、「関氏別曲」全2巻、週刊ヒット「怪しい子供たち」全2巻。99年、ハクサン文化社「ヤフー(yahoo)」全20巻は文化観光部主催の今日の我々の漫画賞受賞。01年、グッドデイ新聞「ロマンス」全1巻は大韓民国出版漫画大賞著作賞受賞。

開催記録写真



座談会進行の様子



談笑する江川氏



熱心に議論に参加する阪本氏



真剣に聞き入る原氏



参加者の意見を静かに聞く平田氏



にこやかに聞き入る宮台氏



冷静に意見を聞く金氏



微笑みを浮かべて意見を発表する梁氏



質問に回答する李氏



相手の意見を真剣な表情で聞く張氏



真剣な表情の尹氏



思わず微笑みが… 全氏



寺脇氏による未来志向の提案



ユーモアを交えて討論に参加する赤坂氏

座談会 IV 「日韓若手芸術家・文化人会合」

サマリー

2004年1月の韓国における第4次日本文化開放および2005年の「日韓友情年2005」の実施を踏まえ、映画、現代演劇、音楽、アニメ、マンガ、サブカルチャーなどの分野で活躍する日韓の若手・中堅の芸術家・文化人が一同に会する機会を設け、日韓文化交流について分野を横断した討議を行うとともに、「共創」を志向する新しい文化交流の方向性を打ち出す座談会「日韓若手芸術家・文化人会合」がNHK大阪放送局で開催され、寺脇文化部長による司会の下、日韓の文学、漫画、映画、アニメーション、現代演劇で活躍する中堅・若手の芸術家、研究者ら12人が活発に意見を交換した。

劇作家の平田オリザ氏は「演劇の世界は市場規模が小さいだけにネットワークが軽く、すでに日韓での共同制作作品も評価を受けており、最先端の交流をしている」と現状を報告した。韓国の劇団旅行者代表の梁正雄(ヤン・ジョンウン)氏も「公演は海外中心になっており、実際に日本の劇団との合同公演も模索している」と順調な演劇交流を明らかにした。

観客のニーズをとらえた市場志向の作品づくりで急激に成長した韓国映画をリードする張允 炫(チャン・ユンヒョン)監督は「米国の具体的圧力の前で、積極的に攻勢に出るために、日本との違いを挙げるより、共通性を見だし協調していきたい」と発言し、日本の小説家の赤坂真理氏も「隣国同士の争いのために違いが強調されすぎたが、韓流ブームで近づくきっかけができると案外近い文化だったことに気付く。境界を超える力はあるはず」と二国間協調の可能性を期待した。

漫画家の江川達也氏は「日韓で共同して創作活動をするときに、西洋的な文化を接着剤としてつながるのではなく、東洋的な心の共通性を求めなければならない」との意見を述べ、韓国の漫画家の尹胎鎬(ユン・テホ)氏は「差があることから文化に興味をわく側面もあり、違いを認めたくて同一性を探る方法もある」と語った。

文化を経済的に分析する金侏鍾(キム・ヒュジョン)秋渓芸術大学文化産業大学院院長は「韓国、日本に中国を加えれば、米国、ヨーロッパに対抗する三番目のアジアの市場を形成できる。交流の障害となる過去の話は歴史家の手に委ね、具体的な交流を考えていく必要もある」と指摘した。

本座談会は、100名近い傍聴者を集め、関心の高さをうかがわせた。なお、本座談会の模様は、2005年2月にNHK 衛星第2放送の番組で紹介された。

The background features a white space with several colored circles: a large blue circle in the upper right, a medium green circle in the upper left, a large orange circle in the lower left, a medium light blue circle in the lower right, and a small pink circle at the bottom center. On the right side, there are several thin, parallel, curved lines that sweep across the page. A horizontal bar with a purple-to-pink gradient is positioned across the middle of the page, containing the text.

座談会 V 「文化の多様性への対応－21 世紀の美術館の課題－（その2）
～国際化時代における美術館の在り方～」

座談会 V 「文化の多様性への対応－21世紀の美術館の課題－（その2） ～国際化時代における美術館の在り方～」

国際化が進展する現代において、美術館と現代美術の活動はパブリックアートやコミュニティ活動など従来の枠を超えた活動を行っている。こうした活動と社会との関係、国際的なつながりや多様性の問題などについて、各参加者が、各国の事情も紹介し、国際化時代における美術館や現代美術の在り方を探る。

開催概要

- 日時： 平成16年11月23日(火・祝) 13:00～17:20
- 会場： 兵庫県立美術館
- 主催： 文化庁、兵庫県、兵庫県教育委員会、
日本経済新聞社、神戸新聞社、NHK、
関西元気文化圏推進協議会
- 協力： 国際交流基金

プログラム

- 13:00 歓迎の挨拶 木村重信
- 13:05 開会の辞及びパネリスト紹介 高階秀爾
- 13:15 発表
- 14:45 休憩
- 15:00 コメント及びディスカッション
- 17:00 質疑応答
- 17:00 閉会



兵庫県立美術館

2002年4月、阪神淡路大震災からの「文化の復興」のシンボルとして、神戸市東部の臨海部に位置する神戸東部新都心(HAT神戸)に開館。新しい美術をめざすとともに、洋の東西、時代、ジャンルを問わず、県民の興味を喚起するテーマに基づく幅広い芸術活動をめざし、展覧会だけでなく、コンサート、映画、パフォーマンスなどさまざまな活動を

展開している。延床面積約27,461m²という日本最大級の空間を世界的に活躍する安藤忠雄氏が設計。周辺は、北には六甲山系を、南には瀬戸内海と神戸港の風景を臨む美しい環境。「人間のこころの豊かさ」の回復・復興を、美術を中心とする芸術活動の積極的な展開を通じて図ることを目指している。

●座談会 V パネリスト・プロフィール

**高階 秀爾** (たかしな しゅうじ)

(大原美術館長)

国立西洋美術館研究官、東京大学教授、フランス・ボンピドー芸術文化センター客員教授、コレージュ・ド・フランス招聘教授、ハーバード大学招聘研究員などを歴任。1992年、東京大学名誉教授。97年パリ第一大学名誉博士。1992年～2000年まで国立西洋美術館長。2002年より大原美術館長。

**ザイノル・アビディン・B・A・シャリフ** マレーシア

(ギャラリー・ベトロナス館長)

1998年ベトロナス・ギャラリーがクアラルンプールのベトロナス・ツインタワー内に新装開館するに当たり館長に就任。同館における企画展、教育活動などの統括、同館コレクション拡大の責任者を務める。現職就任前は、78年から98年まで国内各地の大学で美術史、スタジオ美術を講義。90年以降、マレーシア国立美術館で各種特別展の客員学芸員として展示の指揮を取る。

**パオロ・コロンボ** イタリア

(国立21世紀美術館長)

2001年よりローマのMAXXI国立21世紀美術館館長を務める。1989年から2001年までは、ジュネーブ現代美術センターを統括。1999年イスタンブールビエンナーレ学芸員を務め、第25、26回サンパウロビエンナーレではイタリアの展覧を統括した。最近では、フランシス・アリス、カラ・ウォーカー、ミヒャエル・レデカー、マルゲリータ・マンツェッリ、エド・ルーシャ、フランチェスコ・ヴェツォーリ展を指揮した。

**アン・ダノンコート** アメリカ

(フィラデルフィア美術館長)

美術史家、美術行政官として国際的に知られる。1967年フィラデルフィア美術館助手となって美術行政官の道を歩み始め、71年20世紀美術専門学芸員、82年同部長、96年にはさらに選任CEOを兼任。部長就任後は美術館収蔵品の拡大に成果を上げ、また、多数の特徴的な建物群による「美術館キャンパス」構想を打ち立てて展示規模の拡大、財政基盤の確立に貢献。多くの重要展示企画、重要書籍の出版にも成果をあげている。

**ヴェンツェル・ヤコブ** ドイツ

(ドイツ連邦共和国美術展示ホール館長)

美術展示、放送番組制作など多くを手掛け、39年以降の現代美術に焦点を当てた「西洋美術展」の共同企画、ラジオ番組「名作百選」ドイツ語版制作(西ドイツ放送協会委嘱)などが知られる。「ドキュメンタ8」、ARDドイツ放送協会委嘱作品「13 x ドキュメンタ」シリーズの制作にも関わる。第42、44回ベニス・ビエンナーレ顧問、第46回同審査員を務める。ドイツ連邦共和国美術展示ホール創立委員を務め90年館長に就任。

**木村 重信** (きむら しげのぶ)

(兵庫県立美術館長)

文学博士。京都市立芸術大学美術学部教授、大阪大学文学部教授、国立国際美術館長などを歴任。民族芸術学会会長。世界全域で美術調査を行う。毎日出版文化賞など受賞多数。著書に「木村重信著作集(8巻)」、「カラハリ砂漠」、「現代絵画の解剖」、「アフリカ美術探検」、「美術の始源」、「はじめにイメージありき」、「世界美術史」など多数がある。

**ジェラルール・レニエ** フランス

(国立ピカソ美術館長)

ジョルジュ・ボンピドー・センター収蔵品主任学芸員として同センターにおいて開催の数多くの展覧会の総合監督を務めるほか、各地の美術館において展示の指揮を取る。95年ベニス・ビエンナーレ百年祭では総合監督を務めた。60年以来ジャン・クレールの筆名で執筆活動も行う。「現代芸術史」編集長を務めた後「国立近代美術館評論」誌を創刊し87年まで主幹として活躍。「感覚に関する小論」(Court traité des sensations)ほか著作多数。

開催記録写真



美術館の在り方について提言するダノコート氏



斬新な設計の新美術館について語るコロンボ氏



パネルディスカッション風景



外国の美術に目を開こう、と木村氏



美術館の重要性について言及する高階氏



異文化の相互理解について提言するヤコブ氏



会場風景



美術館長としてのコメントを述べる養氏



海外美術館長の発表に対して感想を述べる福原氏



貴重な意見を述べる酒井氏



真摯な感想を述べる安永氏



美術館運営のむずかしさについて語るシャリフ氏

座談会 V 「文化の多様性への対応－21世紀の美術館の課題－(その2) ～国際化時代における美術館の在り方」

サマリー

国際化が進展する現代において、美術館と現代美術の活動はパブリックアートやコミュニティ活動など従来の枠を越えた活動を行っている。こうした活動と社会との関係、国際的なつながりや多様性の問題などについて、各参加者が、各国の事情も紹介し、国際化時代における美術館や現代美術の在り方を探る座談会「文化の多様性への対応－21世紀の美術館の課題－(その2)～国際化時代における美術館の在り方～」が、神戸市の兵庫県立美術館で開催された。

はじめに、ヴェンツェル・ヤコブ・ドイツ連邦共和国美術展示ホール館長が、「無知の衝突を回避すること」を美術館の課題の最重要項目に挙げ、異文化相互理解のきっかけづくりに貢献できることを紹介した。

ザイノル・アビディン・B・A・シャリフ・ギャラリー・ペトロナス(マレーシア)館長は、元植民地で経済市場主義が幅を利かせる多民族国家での美術館運営の難しさに言及。

パオロ・コロombo伊国立21世紀美術館長は、現在ローマ郊外で建設が進んでいる同館を完成予想CGを使い解説、「斬新な設計で曲線を生かした回廊を歩くうちに(古代ローマの遺跡が集積する)フォロ・ロマーノ一帯を散策するような刺激を体験できる」と述べた。

アン・ダノンコート・米フィラデルフィア美術館長は、経済活性化や市街地再開発など、美術館が地域社会に果たす貢献例を挙げた上で、教育面の大切さを強調。「住民に日ごろから幅広く良い作品に親しんでもらうのが重要。そうすれば地球上の遠く離れた美術同士が思いがけず近いことに気がついてもらえる」と述べ、パリ・ノートルダム聖堂のバラ窓とイスファファンのモスクのタイル天井装飾をスライドで見せ、相似性を指摘した。

欠席したジェラルド・レニエ仏国立ピカソ美術館長は「現代美術では破壊的・衝撃的な作品が増えてきた。アーティストの作品を一般に橋渡しする役目の美術館としては、来館者の理解を得にくく、両者の板挟みに苦しむことになりそうだ」とのメッセージを寄せ、これからの美術館運営の難しさを示唆した。

木村重信・兵庫県立美術館長は「日本は20世紀まで、中国や西洋を世界の文化の中心と考え、それ以外の文化に無関心すぎた。隣国の、あるいはアフリカや南米の美術に目を開こうとする態度が必要」とし、同館の運営方針「文化相対主義」を説明した。

また、コメンテーターとして座談会を傍聴していた、福原義春・東京都写真美術館長、安永幸一・福岡アジア美術館長、蓑豊・大阪市立美術館長、酒井忠康・世田谷美術館長より、海外の美術館長の発表を受けてそれぞれ感想を述べた。

こうした発言を受け、高階秀爾・大原美術館長は「幼いころの美術館体験はその後の人生を豊かにする。子どもにそんな機会を、また人々に多様性を理解し合う機会を提供する場として、これからの美術館の重要性はますます高まるだろう」と締めくくった。

本座談会には、200名近い一般の傍聴者に加え、国内の美術館、博物館の館長等関係者が訪れるなど、非常に高い関心を集めた座談会であった。

座談会 V 「文化の多様性への対応—21世紀の美術館の課題—(その2) ~国際化時代における美術館の在り方~」

座長講評：高階秀爾

兵庫県立美術館において開催された「国際化時代における美術館の在り方」を主題とする座談会は、マレーシアのザイノル・アビディン、イタリアのパオロ・コロombo、アメリカのアン・ダノンコート、ドイツのヴェンツェル・ヤコブ、日本の木村重信、高階秀爾の六名によって行われた。当初参加予定であったフランスのジェラルド・レニエ氏は、来日が不可能となったので、発表原稿を代読するというかたちで参加した。

座談会では、それぞれの美術館の内容と活動が紹介されると同時に、文化の多様性の時代に美術館がどう対応すべきかについて、さまざまな視点から議論が重ねられた。その内容を要約すれば、ほぼ以下のとおりである。

美術館は第一に、古くからある優れた文化遺産を保存し、公開し、後世に伝えるという役割を持っている。それと同時に、第二に、世界のさまざまな地域、さまざまな国の優れた文化遺産をも人々に知らせるという役割を担っている。特に世界の多くの国々や民族が互いに接触、交流、交渉を深めている「地球化」時代の今日においては、この役割は重要である。異文化との接触は、しばしば無理解に基づく摩擦や紛争、すなわち「無智の衝突」の危険を孕んでいるからである。したがって、「地球化」(グローバル化)とは決して均一化のことではなく、それぞれの文化の違いと価値を認めて共存を図るという相互理解と寛容の精神が必要である。優れた文化遺産という具体的な事例を通して、文化の多様性を目に見えるかたちで直接訴えかけることのできる美術館は、このような相互理解に貢献することをその重要な責務と考えなければならない。

そのために、美術館の持つ教育的役割は従来にも増して大きくなっている。優れた文化遺産の実例を集めて提示することはもとより基本的な役割であるが、それと同時に、それぞれの美術作品や文化遺産の歴史的意味や文化的価値をいっそうよく知らしめるためにさまざまな方策を実行することが求められている。すでに多くの美術館で実際に行われていることだが、単に作品を提示するだけでなく、資料の整備、解説の充実、美術教室、講座、シンポジウム、ワークショップ、出版等の活動を通じて一般の人々への啓蒙を図ることや、あるいは次代を担う子供たちを対象とした普及事業に力を入れることが今後ますます必要となってくる。特に現代美術に関しては、同一社会のなかにおいても前衛的実験的試みは必ず一般の人々に受け入れられず、時に激しい反発を招くという状況がしばしば見られる。この点においても、美術館は、優れた試みは積極的に取り上げて人々の理解を求めるという「価値の多様性の擁護」の原則を貫く必要がある。少数の人々に深い感動を与えるものも大切に、同時に広く多勢の人々に訴えるという二重の課題に対応することが、この多様化の時代における美術館の役割なのである。

対 談

■ 対 談：「映画と映画祭－これまでとこれから」

■ 対 談：「日韓文化交流の未来」

対談：「映画と映画祭－これまでとこれから」

開催概要

- 日時： 平成16年10月26日(火) 16:00～17:00
- 会場： オリベホール
- 主催： 文化庁、日本経済新聞社、NHK

出演者



李 滄 東 (イ・チャンドン)

(映画監督、前文化観光部長官 (韓国))

1983年に「戦利」で小説家としてデビューし、文学賞を多数受賞。93年に助監督、脚本家として映画界入り。96年発表の初監督作品「グリーンフィッシュ」は、バンクーバー国際映画祭をはじめ、国内、国外の多くの映画祭で受賞。第2作「ペパーミント・キャンディー」はNHKとの合作で、韓国で日本映画が部分解禁されて以来初の日韓合作となった。2002年の「オアシス」でもベニス国際映画祭ほか多くの映画祭で受賞。



山 田 洋 次

(映画監督)

1961年の初監督作品「二階の他人」から最新作「隠し剣鬼の爪」まで松竹における監督生活43年間に78作を発表。代表作に「家族」、「故郷」、「同胞」、「幸福の黄色いハンカチ」、「遥かなる山の呼び声」、「息子」、「学校」、2002年の「たそがれ清兵衛」などがある。69年に始まった「男はつらいよ」シリーズは96年の48本目まで続いた。芸術選奨文部大臣賞ほか国内、国外で多数受賞。「山田洋次作品集」などの著書がある。



●司会進行

寺 脇 研

(文化庁文化部長)

1975年文部省入省。初等中等教育局職業教育課長等を務めた後、一時広島県教育委員会教育長に。再び文部省に戻り高等教育局医学教育課長、生涯学習局生涯学習振興課長、大臣官房政策課長、文部科学省大臣官房審議官生涯学習政策担当を務める。平成14年より現職。「生きてていいの?」、「対論・教育をどう変えるか」、「21世紀の学校はこうなる」、「どうする学力低下」、「中学生を救う30の方法」など、著書多数。

対談：「映画と映画祭－これまでとこれから」

サマリー

「男はつらいよ」「たそがれ清兵衛」などの作品で知られる山田洋次監督と前韓国文化観光部長官（日本の大臣に相当）で、映画監督の李滄東（イ・チャンドン）監督がそれぞれ東京国際映画祭の審査委員長と審査委員を務めるに際し、「映画と映画祭－これまでとこれから」をテーマに日本、韓国の映画に関して最近印象的だったことや映画の作り手は映画祭に何を望むかなどについて対談を行った。

対談は、主に山田監督が、李監督に対し、韓国の映画界の状況について質問する形で行われ、李監督から、韓国では、今日の韓国映画隆盛の背後に、1996年頃から、国産映画の上映時間の拡大を求める映画ファンの自発的な運動があったことが紹介された。

また、本年6月まで韓国の文化担当の大臣を務めた経験を踏まえ、李監督から、現在の日本における「韓流」ブームについて、日本において韓国の文化が好意的に受け入れられ始めたことは、今後、日韓両国の間で水が流れるように文化交流が進む契機であるとの期待が表明された。

山田監督は、日本での韓国への親近感の急激な高まりには、韓国映画の寄与が大きいとして、映画の持つ、言葉を越えた芸術作品の力を強調しつつ、日本人々が、表面的な類似性にとらわれて韓国の人々の風俗、文化を日本と同じだと見てしまうことは問題で、自国の伝統と文化を理解することで、初めて韓国の文化の理解が進むと語った。また、最後に山田監督の代表作品である寅さんについて、「寅さん韓国に行く」や韓国の俳優で寅さんのような作品を撮ってみたいとの話がなされた。

会場は、100人を超える映画関係者で満席となり、日韓映画界を代表する両監督のやりとりに熱心に耳を傾けていた。

対談：「日韓文花交流の未来」

開催概要

- 日時： 平成16年11月17日(水) 17:00~18:00
- 会場： メガボックス(ソウル)
- 主催： 文化庁、メガボックス・シネプレックス、日本経済新聞社、NHK

出演者



李 滄 東 (イ・チャンドン)

(映画監督、前文化観光部長官(韓国))

1983年に「戦利」で小説家としてデビューし、文学賞を多数受賞。93年に助監督、脚本家として映画界入り。96年発表の初監督作品「グリーンフィッシュ」は、バンクーバー国際映画祭をはじめ、国内、国外の多くの映画祭で受賞。第2作「ペパーミント・キャンディー」はNHKとの合作で、韓国で日本映画が部分解禁されて以来初の日韓合作となった。2002年の「オアシス」でもベニス国際映画祭ほか多くの映画祭で受賞。



河 合 隼 雄

(文化庁長官)

京都大学名誉教授。国際日本文化研究センター所長を経て、現在、文化庁長官。スイスユング研究所で日本人として初めてユング派分析家の資格を取得。臨床心理学者としての立場から、教育、政治、文化に幅広く貢献。「神話と日本人の心」等著作や論文は多数。



●司会進行

寺 脇 研

(文化庁文化部長)

1975年文部省入省。初等中等教育局職業教育課長等を務めた後、一時広島県教育委員会教育長に。再び文部省に戻り高等教育局医学教育課長、生涯学習局生涯学習振興課長、大臣官房政策課長、文部科学省大臣官房審議官生涯学習政策担当を務める。平成14年より現職。「生きてていいの?」、「対論・教育をどう変えるか」、「21世紀の学校はこうなる」、「どうする学力低下」、「中学生を救う30の方法」など、著書多数。

対談：「日韓文化交流の未来」

サマリー

韓流ブームを引き起こした現代韓国映画を代表する映画監督であり、2004年1月まで韓国文化観光部長官を務めていた李滄東(イ・チャンドン)監督と文化庁長官の職にあり、同じに臨床心理学者で、神話と説話の研究で一家を成した日本の代表的知識人である河合隼雄長官が対談を行い、2004年1月の韓国における日本文化開放、日本での韓流ブーム、グローバリゼーションのとらえ方、若い世代への期待、そして、文化交流と日韓両国の未来について語り合った。

文化観光部長官の職にあった当時、韓国における日本文化開放を推し進めた李監督から、韓国で日本文化を積極的に開放することによって、日本も韓国の文化を自然に受け入れるだろうと確信していたこと、また、今、日本で見られる韓国ブームと韓国文化に対する関心は、韓国が日本の文化を積極的に受け入れるようになったことと同時進行的に行われていることが述べられた。

次いで河合長官から、心理学実験の例をひいて、各国の人々それぞれに多様なものの見方があり、グローバリゼーションはアメリカ文化による標準化でなく、それぞれの文化の多様性を尊重し、確保するものとなるべきことが述べられた。

日本と韓国の若い世代への期待を込めて、李監督から、現在、両国の若い世代により、実質的で創造的な交流が既に始まっていること、及びそのような交流をいかに多様化して、深く進めることができるか考える必要があることが指摘された。

また、李監督から、私たちが迎える未来の姿として、政治経済的な問題を文化によって解決できるような、文化が政治経済を牽引していく時代となる可能性について語られるとともに、李監督と河合長官の両者から、日韓両国の未来の姿として、文化を通じて両国がお互いを癒すという関係、お互いの交流でお互いの心が癒される関係へと発展していく可能性について語られた。

この対談は、韓国で日本映画の上映が禁じられていた1965年から1998年に制作された娯楽映画を中心に日本映画46本を、韓国ソウルの映画館で2004年11月に2週間にわたり上映した「日本映画：愛と青春1965-1998」を記念する特別対談として行われた。

対 談

■ 対 談：山折哲雄と河合隼雄

■ 対 談：山崎正和と河合隼雄

■ 対 談：李 御 寧と河合隼雄

対 談

山折哲雄と河合隼雄

河合 先日、ここ(東大寺本坊)が座談会の会場でしたね。

山折 そうです。ここでした。

河合 山折先生は、「シルクロードと仏教文化」の座談会の司会して下さったんですね。どうでしたか。

山折 多様な意見が強烈に出ましたので、とてもまとめることはできませんでしたけれども、話し合いをしたことは非常によかったと思いますね。

河合 そうでしょうねえ。珍しいんじゃないですか。

山折 そう思います。特に、こういう日本の典型的なお庭を背景にして座敷でやったということが、外国からおいでになった方々が日本の文化あるいは仏教文化というものを理解するいいチャンスだったと思いますね。

河合 ここはシルクロードの終着点ですからね。そういうところへみんな集まってきて。

山折 そうですね。エジプト、アルジェリア、イラン、イラク、イギリスからもおいでになりました。そういう方々に、午前中は大仏殿をご案内したんです。その後、正倉院にまいました。

河合 どうですか、その感想は。

山折 そばで拝見しておりまして、やはり大仏を見て驚かれたと思いますね。驚かれると同時に、シルクロードを通して、その影響下にこの大仏が奈良の地につくられたという歴史をお感じになられたんじゃないでしょうかね。あれは雲崗とか敦煌の大きな仏さんと類似の仏さんではないかということを感じられたのではないのでしょうか。だから、一方では、そういうユーラシア大陸の文化的雰囲気を感じられたかもしれないですね。

その後、正倉院にまいました。あそこは1000年以上前の木造建築で、そこにシルクロードを通して伝えられた、当時の世界最高水準の芸術作品と申しますか、生活用品が保存されている。そこに日本の文化を感じられたのではないのでしょうか。

河合 そうでしょうねえ。

山折 実は、私はそのときまで知らなかったんですが、正倉院の北に、八幡様という神社が祀られているのを見つけて、外国からの参加者たちに、これが日本なんですよということをちょっと申し上げて、通訳の方に説明していただきましたら、皆さん、うなずいておられました。外来の仏教、あるいは仏教とともに伝わってきた由緒を伝える文物が、日本の神道の世界では見事に融合している、そんな感じが私はいたしました。

河合 それを実感として感じた場合に、何か雑多なことをやっているなといった反応はなかったですか。

山折 そういうふうには受け取れませんでした。それはもしかすると、その周辺の若草山とか春日原生林の緩やかな山並みといった自然的な景観が背後に見えておりまして、そこ

に何となく調和がとれた自然というか、落ち着きというものを、私自身感じましたし、イラン、イラクなどの中東の乾燥した世界からおいでになった方々には、身に染みて感じていただいたのではないかと気がします。

河合 そうでしょうね。やっぱり調和性ということは大変大事なことです。それが言葉でじゃなくて、見れば実感できますからね。それはよかったですねえ。

山折 シンポジウムでは比較的議論が白熱しました。それも大事ですけども、私が痛感したのは、やっぱり感ずるといことが先にないといけないということでした。文化でも宗教的な雰囲気でも、そういうものがあって初めて話し合いが実のあるもの、お互いに心に届くものになるんじゃないかという感じがしました。

河合 そういう点で、この場はとても適切な場ですね。

山折 そう思いました。

河合 こういう感じで畳に座っていれば、みんなつながっているわけですから。

山折 聴衆の方はちゃんとお座りになって聞いておられるから。お座りになった方々は、長時間だったので、ちょっと拷問のようだったかもしれませんが。でも、たまにはこういう雰囲気の中で……。

河合 それはよかったと思いますよ。

山折 おかげさまで。それで最後に、今度の座談会の座長をお務めになった平山郁夫先生が、きょうの会は非常によかった、シルクロードを通して伝えられた仏教文化の豊かさ、多様性というものをお互いに知ることができた、だから、これからシルクロード全体を世界遺産に登録してもらうように運動しませんか、というメッセージを述べられまして、(笑)大変いいご発言が出たなと思っておりました。

河合 あれだけの昔に、それだけの道があって、しかも来たものが正倉院宝物としてこの地にちゃんと残っているというのはすごいと思いますよ。しかも、埋蔵物じゃなくて、そのまま生きて保存されたというのは日本の誇りだと思いますね。

しかし、シルクロードといえば、バーミヤンのあたりが今は大変ですね。

山折 世界の宗教的な紛争、民族的な対立の発火点のような感じになっておりますね。

河合 現在はパレスチナもそうですし、大変深刻な状況ですが、そこに宗教というものが絡んでいる。その難しさ、あるいは問題点をどう思われますか。

山折 10年ほど前の湾岸戦争のときを思い出すのですが、あのときイラクのフセイン大統領がクウェートに軍隊を送ったためアメリカを中心とする多国籍軍が反撃に出ました。そのとき、あるニュースで知ったのですが、多国籍軍のアメリカの兵士たちが、印刷した紙片をそれぞれ懐に忍ばせていたというんですね。

その紙には、旧約聖書のある言葉が印刷されていた。それはこういう言葉でした。「神は我々の砦である。マムシと毒ヘビを踏みにじて進軍しよう」。この言葉は旧約聖書の詩篇に出てくるのだそうです。もちろんモーゼの時代の話ですから、その場合のマムシと毒ヘビというのは、当時の異教徒を意味しているんですね。

ところが、多国籍軍に持たせた時点におけるマムシと毒ヘビは、明らかにイスラム教徒を指していたと思いますね。それに対してイラクの方では「ジハード」というコーランの言葉を持ち出した。

だから、やはり宗教戦争的な要素があるなど、私はそのとき感じたのですが、もちろんあの紛争をすべて宗教的な対立、戦争に還元しようとは思いません。いろんな歴史的な事

情もありますし、政治経済上の諸問題もありますから、そんな単純なことはいえないと思いますが、それでも、2000年あるいは3000年という歴史を貫いて人々の心の底に流れ続けていた、ある宗教的な感情、これは否定できない。そういう全体をどう考えるかということが非常に難しい。

河合 もっと極端な見方をすれば、石油がたくさん出ますから、それこそ経済的な問題の戦いを正当化するために宗教が利用されているなという感じを私は持つのですが。

山折 そういう側面ももちろんありますね。利用されたような形で、逆に自己主張を強めていくという悪循環がありますね。

河合 そして、いったんこうなると、どちらが正しいかといった感情的なものが出てきますから、宗教的な面がもっばら前面に出ますけど、この辺が宗教というものの難しさですね。

その点でいうと、このごろ非常によく言われることですが、日本人の宗教観、お寺の中に神社があったりといった寛容性についてはどう思われますか。

山折 1995年のことでしたけれども、初めてイスラエルに参りまして、聖都エルサレムに入りました。そこには、ユダヤ教の聖地の「嘆きの壁」と、イスラム教の聖地の「黄金のドーム」というのがありまして、マホメットがそのドームに包まれている岩を伝って昇天したといわれています。もう一つ、キリスト教の聖地として、かつての「ゴルゴダの丘」の後に教会が建っておりまして、一神教の三つの聖地が、危うい均衡といった状態でそこに存在しておりました。

ところが、イスラム教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒は、それぞれ自分たちの聖地にだけお参りして帰ってくる。相手方の聖地には決してお参りしないのです。これは一神教の非常に厳しいところだなと思いつつながら日本に帰ってまいりました。

日本の場合には、山岳と森に恵まれているので、天上に唯一の神を求める必要がない。むしろ山に入り森に入ると、そこに神の気配を感じたり、仏の言葉を聞く。こういう多神教的な風土を私は強く感じまして、そこから外来の仏教と土着の神道が共存する日本的なシステムが自然にでき上がったと思うのですが、だからといって、我々の歴史・伝統の中で、過激で原理主義的な運動がなかったかということ、そうではないんですね。15世紀には、例えば一向一揆というすごい宗教戦争をやっているわけです。つい最近のことでいえば、オウム真理教事件もありましたね。

河合 第2次世界大戦にしても、ある程度日本人の原理主義的な面が出ていたともいえる。そういうのを全部考えていくと、簡単にはいい切れませんね。

山折 ですから、今の段階は、一神教対多神教という二元対立的な図式だけでは考えることができないだろうと思います。

河合 一神教はだめだけども多神教は正しいという人は、逆に一神教的論理なんです。(笑) だから、みんなもっと広い目で見ても、一体なぜ宗教があるのか、どういうことが宗教なのかといったことを考え、教団とか何々教というのを超えて、人間の宗教性というものにもう少し思いをいたしたらいいんじゃないかと私は思っているのです。

山折 実は、この間の座談会も「シルクロードと仏教文化」というテーマでしたので、それに触発されて考えていたことがあります。宗教性ということを考える前に、例えばシルクロードの終着点といわれている奈良の法隆寺に、聖徳太子ゆかりの「玉虫厨子」という宝物がありますね。先生もよくご存じですけど、あの厨子の側壁に「捨身飼虎」の仏教絵画

があります。あれは7匹の飢えた虎に自分の体を食べさせるというシッタルタの慈悲物語ですけれども、僕は前からちょっと残酷な場面だなと思っていました。もしかして、あれはお釈迦様の本来の思想だったのではないのではないか、ガンダーラに「捨身飼虎図」もありますので、ひょっとするとキリスト教の十字架の犠牲の思想の影響がああ絵には表現されているのではないかと思うようになったんですね。

そうすると、今から2000年前、ギリシア・ローマの文明とインドの仏教文明があそこで合流して、仏像もああ地で作られましたし、同時に「捨身飼虎図」のような、キリスト教の精神と仏教の思想が融合したような絵が描かれたのではないか。そんなことを考えたことがあります。

宗教性という点では、やっぱり両方ともそういう問題意識を持っていたと思うんですね。それで手を結ぶことができるんじゃないかということが考えられるのです。

河合 実際にギリシアの思想でも、仏教の影響を受けているのではないかと思うのもありますね。

山折 逆にそういう面もあるかと思えますね。

河合 だから、どの考え方で行くというふうにパッと決めなくて、自分の宗教体験をもっと深めていくということを考えると、宗教が悪いんじゃなくて、宗教を利用する国、そこから問題が起こってくるのであって、宗教を深める方にみんなが思いをいたすと、大分違ってくるんじゃないかと思えます。

山折 ですから、文化と文化、民族と民族が接触、交流することによって新しいものが生まれてくる。その可能性ですよ。

そういう点でいいますと、「捨身飼虎図」は、後になってシルクロードを伝わって、例えば敦煌とか雲崗の石窟に描かれるようになって、どんどん東の方に伝えられてまいります。そのとき、北方狩猟遊牧民が南下してきて、中国で王朝をつくりましたね。その影響もあるのではないかというようなことを考えるようになりました。それは美術史家の上原和先生もいっておられたことです。つまり、狩猟民というのは動物解体の生活慣習を持っており、狩猟社会というのは動物と人間との関係が対等な世界ですね。

河合 そのとおりです。

山折 そうすると、食うか食われるかの関係、あるいは、動物を獲って食べることは我々人間にはできるけれども、同時に動物が人間を襲って人間を食べるかもしれない。そういうことを覚悟する社会でもあるわけです。もしかしたらああ絵には、狩猟民の影響もあったのかなということを考えましたね。

河合 宮沢賢治じゃないですけど、熊と人間とは一体ですからね。どちらが神かわからないほどの一体感がありますから、それを必ずしも残酷とはいえないところがありますよね。それはおもしろいかもしれませんね。

山折 地球との共生とか動植物の世界との共生ということを口ではいいますが、それをいうならば、本来の狩猟社会というのは、先ほど先生がおっしゃった宮沢賢治の「ナメトコ山」の熊のように、熊と人間が最も対等な形で、人間も動物もともに食物連鎖の中に生きているという感覚を共有することによって、これからの地球との共生とか動物たちとの共生という問題を考え直していく。契機にはなるんじゃないでしょうか。

河合 そうなると思えますね。そういうふうに宗教ということを深めていけば、簡単に対立的というか戦闘的にならずに考えられるんじゃないかと思えますね。これはキリスト教

でもイスラム教でも、指導者の中にはそういうことを考えている人がいると私は思いますけど。

ただ、一遍ファナティックになって火がついた場合は非常に難しいんでね。だから、今いろいろなことが起こっていますが、それに対してどうするのか、どうできるのかというのは難しい問題ですね。

山折 河合先生もよくいっておられることですが、一神教のヨーロッパ世界において、その歴史の中にも多神教的な世界、伝統というものがあるのであって、それを新しい価値の源泉として見つけていこうという試みがあります。ユング心理学の世界はまさにそうですね。我々の多神教的な世界においても、一神教的な原理の重要性をもう一遍再認識する。お互いに異質なものを受け入れていく、そういう意味での寛容性も非常に大事だと思いますね。

河合 だから、ちょっと命がけというか、うっかりしたら自分が危なくなるほどの気持ちでやらないとね。自分が正しいと思って、こんなのがあるというのではなくて、一神教のすごさというものを日本人はもうちょっと身をもって体験して、その上で多神教も考えるということでない、こっちは安閑としていて、こっちは寛容ですよ、というのではだめなんですね。

そういう点では、この前山折先生に司会を務めていただいた座談会の意義は大きいですね。

山折 そのときもちょっと感じてはいたことなのですが、最近のパレスチナの紛争などを見ておまして、歴史的な宗教はそろそろ賞味期限が切れ始めているのではないかなと思うんですね。

ちょっといい過ぎかもしれませんが、キリスト教にしてもイスラム教にしても、そして仏教にしても、教団としての歴史的な宗教というのは、もう地球大の大きなさまざまな問題に対応することができなくなっている。地球温暖化の問題にしても、砂漠化、飢餓、難民等々の問題にしても、ほとんど処方箋を書けない。だからといって、仏陀、イエス、マホメットの思想そのものが無効になったとは思いませんけどね。ますますそういうものが必要になってくる。

河合 本当にそのとおりですね。

山折 そういうことを考えるときに、今から5000年前、1万年前の時代を考えたらどうだろうということをふっと妄想することがあります。キリスト教も仏教も存在しない。そうしますと、結局、地球上の民族は、どの地域に住む民族も、天地万物に命があるという信仰といいますか、自然観の中で生きていたのではないかなという気がしますね。だから、これからは、教祖もいない、教義も存在しない、攻撃的な伝道活動も存在しない、万物に命があるんだよという意識ですね。

河合 それをどこまでその人が深めていくことができるか。個人が土台になるのですが、それを深めていくとつながりますよね。みんな命があるのだから。おっしゃっているように、自分は何教に属しているからこうじゃなくて、自分の体験を深めてみんなとつながるという方向へ世界が向かってほしいと思うし、そのためには対話が大事で、どんどん対話の機会をつくっていく必要があるのではないのでしょうか。

日本は、この場を座談会の会場に提供できたように、そういう対話の場をもつことが非常にやりやすいから、もっともっとそうしていきたいと思いますね。

山折 そうですね。私は一回か二回の対話で、理屈の上で理解し合うなんて無理だろうと思うのです。ただ、おっしゃったように、そういう機会を何度も何度も積み重ねていく、何よりも自分とは違う異文化の風土の中でそういう対話を深めていって感じてもらう、ここいう試みが非常に重要じゃないかという気がしました。

河合 全く同感です。そういう点で日本の役割は大きいという気もしますね。

山折 そういう点で先生が唱えられた今度の国際文化フォーラムの共通テーマ、「文化の多様性」という問題については、諸宗教の方々と話を重ねることで、文化の多様性の豊かきみみたいなものができていくのではないかと思います。

河合 おっしゃるとおりで、これからも続けてやっていきたいと思います。

山折 お願いいたします。

河合 一気に過去に戻って、万物に命あり、というのが宗教性の根源だというのは僕も大賛成なんですけど、それを現代へ持ってこないといけませんね。この辺はどういうふうに思われますか。

山折 いろんな宗教の代表者との話し合いをしたりシンポジウムの中に出たりいたしますと、どうしても教理、教義の自己主張が前面に出てくるんですね。それを何度も何度も繰り返しているうちに、教理、教義の自己主張では諸宗教はなかなか手を結ぶことができないのではないかという気がしますね。

河合 そうですね。もう一つというと、組織防衛になりますよ。

山折 逆に組織防衛になっちゃいますね。私は、あるとき、結局我々が共通にできることは祈りの心しかないなと嘆息交じりにいって、みんなそれぞれ祈ろうと呼びかけたことがあるんですが、ここで大体一致できるんですね。祈りの心というのは、宗教性を深めることとしてしか出てこないような気がいたしますね。

ですから、そういう点からすると、賞味期限が切れ始めた諸宗教がお互いの教義、教理の垣根を低くする努力をすることも一つですね。

河合 その根本に祈りということも、一つ大事なことですね。

山折 もう一つは、仏教というといろんな諸宗派に分かれています、仏教とはこういうことだよということを、一つ、二つ、三つ、非常に数少ない言葉で象徴的に表現するという努力ですね。それはキリスト教も一緒だと思います。宗教的に言語はやがては一つのものに統一されていく、そういう運動を進めていくことが必要なという気がいたします。最終的に世界は、教祖にこだわらない、教義にこだわらない、攻撃的な伝道活動は控える、そうならざるを得ない状況にだんだんなりつつあると私は思いますね。

河合 そうなりつつあると私も思います。そうになっていくとありがたいですね。

山折 でも、現実なかなか……。

河合 そういう点でいうと、シルクロードというのは、ずっと長い道にいろんな宗教を持ちながら形成されてきたわけですが、そのシルクロードがあった地域は、どうなりますかね。

山折 どうでしょう。2000年前のシルクロードというのは、いろんな人物が西から東へ、東から西へ往來しました。同じように、正倉院芸術に象徴的に見られるように、いろんな文物が移動しました。人の移動、物の交流、そういうものの中で宗教的な観念とかイメージというのも交流している。宗教性そのものが非常に豊かになる土壌は、そういうところにあったと思いますね。

ところが、どうも最近のアフガン戦争を含めてシルクロード沿線上の戦争というのは、そういう文物の豊かな交流がない、いわば時を経て賞味期限の切れたような枯れた思想が裸でけんかし合っている、そういう感じがしますね。

河合 今お聞きして私がふと思ったのは、宗教とほとんどきびすを接して芸術があるということ。だから、考えたら、シルクロードはもちろん絹でもあるし、芸術的なものもたくさんつくられたわけでしょう。正倉院に東方の楽器がいっぱいある。だから、そういう意味の芸術・文化の交流、これをもっと考えたらいいかもしれませんね。

山折 本当にそう思いますね。過去の宗教のすぐれたものは、ほとんど芸術性ということと結びついていますね。だから、私は常日ごろ、宗教の最高形態は芸術である、芸術の最高形態は宗教であると思っていますのです。芸術と宗教とを分けちゃいけない。

河合 そうそう。何でも分ける時代がありましたからね。特に西洋の近代の考え方ですが、哲学も分ける、何でも分ける。ところが、考えたら、仏教はその点一番分けていないのですね。仏教には、心理学も入っているし、哲学も入っているし、芸術も入っているし、みんな入っているでしょう。だから、そういう意味で宗教的な交流の中にも芸術交流、文化交流があるのだから、これも見直そうじゃないかということが、シルクロードの道の意味をもう一度高めるかもしれませんね。

山折 私はシルクロードを北緯40度線といっているんですが、不思議なことに、北緯40度線というのは北京からイスタンブールなのですね。東西の最高の文明があそこを行き来していたわけですから。

そういうことを思いますと、我々は宗教を宗教の問題だけに限定したり、科学と宗教の世界は違うのだという考え方から自由にならないといけない。

河合 私もそう思います。でも、科学というのも含めて、実は全部文化なのですからね。そういう考え方の文化交流。

山折 ですから、現代は文化の多様性ということの問題にする。今度、先生が考えられた企画も、まさに文化の多様性ということが中心のテーマでしたが、そういうことを考える場合に、シルクロードの1000年、2000年の歴史がいろんな意味を持っているように思いますね。

河合 そこで交流したものの豊かさ、多様性といったものをもう少し調べたり話題にすることが、我々にヒントを与えてくれると思うんですね。先ほど「捨身」の話がありましたけれども、あれなんかもそうですね。たった一つの絵だけど、たくさんのもが入ってきますから、あれは考えたら芸術ですよ。

山折 しかし、わかり易いんですね。あの世界がとてもはっきりしたイメージで迫ってきますからね。

河合 そういう研究も、今後考える必要があると私は思います。

対 談

山崎正和と河合隼雄

河合 日本人は、シルクロードが好きですね。

山崎 そうですね。

河合 かつてのシルクロードは一種の黄金時代的な感じがありますね。

山崎 ほんとにそうですね。日本人にとってみれば海の境目の無い、広びろとしたつながりで、しかも、まだ近代国民国家などというものが生まれる前の、非常にのどかなイメージですね。

河合 はい。

山崎 恐らく、民族というような意識は多少あったでしょうが、人々が村ごとに集まっていて、長老がいて、伝統に従って静かに生きていた時代なんですね。

河合 そうそう。

山崎 ですから恐らく、その集団同士の争いというもの、若干の牧草地の取り合いのようなものはあったにしても、大々的な殺し合いとか、戦争というようなことのない時代だったんですね。日本人は近代国民国家に暮らしてきましたから、ある意味ではノスタルジアを感じるということなのでしょうね。

河合 ええ。しかし、国民国家になったこと自体は事実であるし、こうしなかったら世界の中で生きていけないということがありましたね。

山崎 もちろんそうです。

河合 このための問題というのは非常に大きいと思います。

山崎 ええ。国民国家というものも実は、本当は融和といいますか、統一のための一つの働きだったと思うんですね。

河合 そうそう。

山崎 村ごとに暮らしているのでは、いろいろ不便がある。そうすると、かなり広域の人々を集めて、打って一丸となって何か仕事をする。特に産業を興すということについて、国民国家の果たした役割は非常に大きかったと思います。

河合 そうそう。

山崎 ただ、本来、国民国家というものは、法律があって、お互いに守りましょう、制度があって、それによってお互いに助け合ひましょう、という約束事であった。ところが、どうもそれだけで済まなかったのが難しいところで、やはり国家ができると、他国と競争しなければいけない。そうなってくると内側で団結する必要が出てくる。

河合 そこが難しいところですね。

山崎 法と制度だけでは、なかなか気持ちの上で団結しませんから、例えば、よその国と戦う際に、文化であるとか、伝統であるとか、あるいは歴史によって、国民の共通の記憶などをかき立てるといった習慣ができた。それ以来、我々は今抱えているような問題を全部

背負い込んだのだらうと思うんです。

河合 なるほど。だから、いまおっしゃった歴史にしろ、宗教にしろ、それ自体の問題よりも、それをどう使ったかというところに大きな問題があるんでしょうね。

山崎 文明と文化という概念がありますが、文明というのは、物の考え方、見方なんですね。それを制度とか技術という形にしてあります。そういうものは本来頭で理解するものですから、これはお互いに分からないはずがないんですね。それ自体は争いの原因にはならない。私はそんな意味で、文明の衝突という考え方にはまったく賛成できない。

河合 ほんとは文化の衝突というべきでしょうね。

山崎 実は、文化も、本来の姿を考えると、先ほどの穏やかな長老支配の伝統の中にあつた、しきたりとか、身についた癖、習慣のようなものなんです。だからこれも本当は戦いの原因にならないのですが、国民国家形成のときに、人々を団結させて、本来あつた多様性を押しつぶして一つにまとめるために、文化を一種の道具として使つた。その経験が、あとあと尾を引いているんだと思います。

河合 今、その手法の頂点に来ているといった感じですね。

山崎 先進国は二度の大戦を経験して、国家の限界というものを悟つたと思うのです。よく言われますが、少なくとも民主主義国家の間の戦争というものは、もうほとんど無くなつてしまつた。問題は、そのときに国家をつくり損ねた人たち、あるいは国家が非常に未成熟な状態の下で生きてこなければならなかつた不幸な人たちが、近代国家に対して、ある種の負い目、引け目、恨みやねたみを感じたときに、「民族主義」というものをつくり上げた。

河合 そうですね。

山崎 「民族主義」というのは、「民族」とはまったく違ふと私は思うんです。民族というのは先ほども申し上げたように、非常に保守的なもので、おじいさんがいて——村の長がいて、若者はそれに従つて穏やかに暮らしているんですが、これに対して大体、民族主義というのは青年将校がリーダーになるんですね。これは基本的なイメージですが。

河合 いや、「主義」が付く限り……。

山崎 おっしゃる通りです。「主義」が付きますと……。

河合 もう青年将校。

山崎 違ふものになる(笑)。

河合 はい。

山崎 それが現在の世界の様々な問題を引き起こしている。もちろん、そのような、近代化に後れを取つた人たちがばかりが悪いわけではない。先進国も意識的に、あるいは無意識のもとに、いわゆる帝国主義的な支配をやつた。それに対する反発として出てくるんですね。私は、そういうときに口実として使われたのが、伝統文化であつたり民族の魂であつたりするのだらうと思うのです。

河合 はい。

山崎 ですから、300年か200年という期間の、近代国家という非常に難しい時期が、やつと今、ある意味で終わりに来ている。先ほども申し上げたように、先進国間の国家戦争というものは無くなりつつある。しかし、残つた民族主義者の人たちを、どういうふうにして、この近代の文明の中に組み入れて、そこでの基本的な約束事、人権や、広い意味での民主主義になじんでもらうか、というのが現在の本質的な問題だらうと思うんです。

河合 ただ、それを解決するとか、乗り越えていくというのは、そう簡単なことではないですね。

山崎 はい、簡単ではないと思います。しかも、一方でグローバリゼーションという波が押し寄せてきて、国家の枠組は、先進国ではかなり緩くなりました。早い話が、企業というものは、もう国家を超えて仕事をしていますし、我々個人も、実はもう国家の枠組みを超えて生活しているわけです。特に知識人はそうだと思います。

河合 ええ。

山崎 しかし、やはり国家がまだ必要であり、重要な枠組みであるということは終わっていないわけですね。

河合 それは終わってないです。

山崎 ですから、そのいわばズレのようなところが、たいへん難しいことだろうと思うのですね。

河合 そのことをきちんと認識しないと、どっちかを悪者にしてしまうことになってますが、それではダメなんですよ。

山崎 はい。

河合 だから国家はやっぱりあったほうがいい。でも、あったほうがいいから国家でまともと強調すると、これは失敗になっていくわけです。

山崎 はい。

河合 そこを超えていくには、やっぱり国家や文化を超えて、いろんな交流が必要になります。交流したら平和になるというような甘いことは絶対に言えないのですが、長い目で見ていった場合、だんだん意味を持ってくるのではないかと思います。

山崎 そう思いますね。というのは、一方で、グローバリゼーションが国家の境目——垣根を少し低くすると同時に、たいへん面白いことですが、日本でも今、地域ということを非常に言いますし、国家の内側から今度は地域化が進んでいる。ヨーロッパですとEUという枠が広がるのとちょうど反比例して、それぞれの国の中の地域というのが重要視されていますよね。

河合 はい。

山崎 さらにもっと大きいのは、例えばアメリカがその典型ですが、国家の中の民族ともいうか、エスニック文化というのが今、非常に盛んですね。

河合 そうです。

山崎 東京などでも、エスニック料理が流行になっています。さらに、今のところはっきり見えているのは若者文化ですが、ある世代の文化というものができてきた。これはもう最初から国家を超えているわけで、日本人の描いた女性漫画がパリで読まれている。

河合 そうそう。

山崎 しかもフランス人は、それを自国の漫画だと思っているそうですからね。そういうエスニックであるとか、地域であるとか、世代であるとかいう、要するに横のつながりで、文化はますます多様化していると思うのです。

河合 ええ。

山崎 ですから、たいへん面白い現象が進んでいて、文明のレベルでは世界が徐々に一つになりつつあるわけです。

河合 多様化と共に、一つになる傾向もある。

山崎 つまり、我々は誰でも、どんなに変わった人でも、近代医学のお世話になるし、工場生産もあったほうが良いと思っているし、人権、民主主義になると、まだ完璧とはいえないけれども、趨勢としては、やっぱり民主主義が良いなという、タテマエはできているわけです。

河合 はい。

山崎 日本の近くにある国でも、実際の体制はともかく、国の名前を見ると人民民主主義共和国と書いてあるわけです。

河合 そうです。

山崎 ですから一応、そういう形で文明は一つになりつつある。それと反比例して文化は多様化している。

河合 それが面白くもあり、難しいところでもありますね。

山崎 それが今、ちょうど私たちの置かれている場所なのだろうと思うのです。

河合 その「文化が多様化する」を、もう一步詰めたら、個人になってきませんか？

山崎 はい。おっしゃる通りです。日本ではもうすたれかかった言葉ですが、「教養」という言葉があります。

河合 はい。

山崎 「教養人」とか「あの人には教養がある」とか。

河合 はい。

山崎 この教養というのを英語に訳せば、カルチャーなんです。ですから私は、文化というのは最終的には個人のものであると思うのです。

河合 まさに個人のカルチャー。

山崎 はい。ですから、例えば河合先生ですと、もう純然たる日本人でいらっしゃって、日本のためにお考えになっているわけですが、ご趣味はフルートであって、尺八ではない。

河合 ええ、そうです。

山崎 そうすると、つまり河合先生の教養の中には、すでにもう世界が入り込んでいるわけです。

河合 そうです。

山崎 私たちも、みんなそうだと思うんですね。ですから最終的には、一人一人の文化ということになれば、私は、世の中は平和になるはずだと思うんです。ただ、そこまでに、しかも全世界が足並みをそろえてそこまで行くというのは、たいへん時間のかかることですね。

河合 長い目で見た場合にそうなるということに、私は大賛成です。ただ、一つ、これも長い目で見れば大丈夫なんでしょうが、今の日本の状態としては、個人について言うと、個人が生きる倫理が弱すぎるような気がします。

山崎 はい。

河合 今まで、あまりにもイエの意識の中で行動してきたように思います。そんなことをするとみんなに笑われるからやらないとか……。

山崎 そうですね。

河合 それを無くしよう、好きなことしたらいいというと、その場で倫理が消えてしまう。私のような臨床心理学者は相談を受ける側ですから、そういう問題が多く起こってき

ているのがわかるんです。

山崎 おっしゃるとおりだと思います。これは、俗に言うアイデンティティーの問題ですね。つまり自分が誰であるかという。

河合 そうそう。

山崎 長い間、家族であれ企業であれ、特に日本の場合、企業というのは大きかったけれども、そういう集団の中で自分を位置づけていた人たちが、そういう様々な集団がいま揺らいでいるため、一人になってしまう。

河合 孤独になりますね。

山崎 そのときに、まったく絶望的になってしまう人がかなり出ていることは、事実でしょうね。

河合 そして、どう生きていいか分からない。

山崎 はい。

河合 そうすると、一方では、おれの好きなように生きようということになり、極端に言えば、人を殺したっていいじゃないかということまで言うんですね。

山崎 そうですね。

河合 そういうときに、個人主義が出てきたヨーロッパやアメリカでは、まだキリスト教倫理がある程度は生きているんですね。その厳しきで個人を守っているのですが、日本の場合は、個人の倫理をどう守るかというのが一つの課題だと思っています。

山崎 おっしゃるとおりだと思います。ただ、一面で見ますと、若い人を含めて、今までの組織とか、生まれつきの血縁とか、そういうものとはちょっと違う人間関係、要するに友だちとか、お付き合いとか、そうした関係を求める力も強まっているように思います。

河合 そういえば、山崎先生は、最近の御著作で、社交のことを書かれていますね。

山崎 はい。

河合 大変面白く読ませていただいたのですが、日本人は社交というと、なんか上っつらのお付き合いのように思う人が多いけど、あれはヨーロッパで個人主義の中から必死になって作り出されてきたものですよ。

山崎 そうですね。日本人が社交を忘れたのは、それこそ近代国民国家の成立期、つまり明治以後であったと思います。それ以前は、むしろ日本人は社交文化の中で生きてきた。

河合 ああ、なるほど。

山崎 茶の湯は、社交そのものを芸術にしまったわけでしょう？それから、古い例ですが、連歌というのがあって。

河合 そうそう、連歌。

山崎 一つの歌を、一人で作るんじゃなくて、何人も集まって作る。そういう社交の文化というのが長らくあったんです。

河合 連歌は素晴らしいものですね。

山崎 それを明治の殖産興業で、人々を組織化して、工場で働いてもらうために、そういうものを全部、贅沢あるいは無駄とみなして切り捨てました。

河合 ええ。

山崎 今、それが少しずつ復活しているような気がします。

河合 いや、だいぶ復活してきています。

山崎 もちろん社会の事柄というのは、いつも両面があって、良くもなり悪くもなるので

すが、今、若い人が、あんなに携帯電話をかけ続けているというのは不思議なことだと思います(笑)。

河合 ええ。

山崎 いまサヨナラと言って別れた高校生が、電車の中で、お互いにまた携帯電話で話していますね。

河合 ええ。

山崎 その上に、例のメールというのがあって、それでまたお話ししている。これは単なる相互依存、あるいは甘え合いで、個人主義からの逆行だという見方もできると思います。ですが、よく解釈すれば、これは社交の始まりなんですね。

河合 そうです。

山崎 大人たちも、例えば最近、家庭の主婦とか、長生きするようになった定年後の中高年も、やはり探している場所は社交なんですね。

河合 最近是同窓会が増えているようですよ。

山崎 いろんな趣味の会やボランティアなどがある。ボランティアというのはもちろん役に立つ仕事ですけれども……。

河合 ボランティアは、ものすごく自分の役にも立っているのです。

山崎 そうなんです。ですから、一方で、今までの固定的な組織を離れた人間関係をつくっているようにも見えますね。

河合 それは言えると思います。その中でみんなが個人を生きる倫理を考えながら、いろいろつくってくれと面白い。

山崎 私は、そこに二つ積極的な見通しがあると思います。一つは、現代の生き方、さっき言った工場生産を離れ、組織を離れたときに、人間、みんな不安になります。今までですと、いろんな事柄について予測ができた。企業である程度の仕事をすると、ほとんど合理的にというか、見通しよく、お返しがくるわけですね。

河合 そうです。

山崎 会社で業績を上げると、上司が見ていて、出世させてもらえる。定年まで勤めたら——昔は55歳ですね——年金が入るとといったように、全部わかります。

河合 で、適当にお迎えが来ると(笑)。

山崎 ですから、そういうときには、例えば運命、つまり運の良し悪しといった偶然性の恐ろしさというものをあまり感じない社会ができるんですね。

河合 そうそう。ものすごく守られていますから。

山崎 自分の一生について予測がつくわけです。ところが、現代のようになってきますと、例えばサービス業に就く人にとってその商売が繁盛するかどうか、あるいは高度の知的産業に就いている人がうまく発明ができるかどうかといったことが、運にかかっている。

河合 そしてガラッと変わることもある。

山崎 そういふことがありますね。そうすると人間、何かを恐れる——例えば運命を恐れるとか、科学的な合理的な説明のつかないものに目を向けるようになるんですね。

河合 大体そうなりますね。

山崎 ですから私は、その意味では宗教、広い意味の宗教というものがもう一度復活してくるだろうと考えています。

河合 私もそう思います。

山崎 私のような宗教的に素朴な人間でも、やっぱり神様に助けてもらおうと思ったら、悪いことは少し慎もうなどと思いますからね(笑)。これは取引の宗教で、よくないと言えばよくないのかもしれないけれども(笑)。多少の支えにはなると思うんですね。

河合 ええ。

山崎 もう一つは、もっと現実的で、お互いの付き合いの中で、必然的に相手を必要としますね。

河合 はい。

山崎 従来の近代の西洋型個人主義というのは、これは主張し要求する個人なんです。

河合 そうそう。

山崎 だから結局は相手を屈伏させるわけです。

河合 自分が正しいわけですから。

山崎 はい。ところが、今の個人主義というのは、誰かに認めてほしいとか、褒めてもらいたい。褒められないまでも、そこにいと認めて欲しい。

河合 そうそう。

山崎 この動機は、わりあい信用できると思います。なぜなら、もともと悪徳だからなんです。要するに虚栄心ですね(笑)。人間は悪徳好きですから、虚栄心には弱い。ところが、虚栄心には不思議な構造があるのです。例えば私は河合先生に認めてもらいたいと思っています。つまり、私は河合先生を尊敬してるから、そういう人に認めてほしいわけですね。例えば、私は猫に認めてもらっても、ちっとも嬉しくないわけですね(笑)。ということは、虚栄心というのは必ず相互依存だと思うのです。

河合 ええ、相互依存。

山崎 ですから、これがうまく働いてくれば、お互いを尊敬し合う関係が必然的に生まれ、従来の利己的個人主義でない個人主義が生まれてくる。

河合 そうそう。利己的個人主義を超えていかなければいけませんからね。そのときに、御著作にも書いておられたけれど、昔の言葉でいうと友情とか、信頼感といったものが大事になってくる。その一方で、山崎先生も広い意味の宗教と言われたけども、宗教は、下手をするとちょっと堅くなりすぎる。しかも宗教の怖いところは、初めの我々の話にあったように、下手に利用されるとものすごく怖いわけです。

山崎 そうです。恐ろしいです。

河合 つまり、宗教そのものは問題ではないが、ファナティックな宗教というのが大変なんですね。

山崎 近代にも例のあることでね(笑)。犯罪にまでつながるわけですけども。ただ、私は、いったん人間が個人主義に徹して、それから目覚める宗教というのは信用できると思うんです。

河合 そうです。その場合に、もう一つ進んで組織——宗教組織とか教団については、どう考えればよいのでしょうか。

山崎 古い形を考えても、ある宗教的リーダーがいて、その人の人格などを通じて、あるいはその人の自己犠牲を見て、あるいは身を投げうって真実を示してくれたことに対して、後でお弟子さんができて、それに従う人間が生まれてくるのはごく自然だと思うんです。

河合 弟子をつくらなくても、できますからね。

山崎 できます、できます(笑)。大抵の偉大な宗教家は、必ず最初、教団などは持たないと言うんですね。

河合 そうです。

山崎 しかし、不思議なことに、中興の祖みたいなのが現れて、これを非常に強固な集団にする(笑)。

河合 不思議といえば不思議ですが。

山崎 ただ、中世や古代の社会的な状況の中で、迫害があったりして、そうしないと身が守れない。私は少し甘すぎるのかもしれませんが、今の状況がこのまま進んでいけば、宗教を信じる人たちが大変な被害意識を持つことは少ないから、乱暴な集団ができることはないだろうと思います。近年のオウムなどは、リーダーを含めて……特にリーダーである人が、迫害されているという意識が非常に強かったですね。

河合 そうそう。

山崎 でも、現実に迫害されるような状況のない中で、本当に、個人であるということへのおそれから、あるいは運命のおそれから目覚めた宗教というのは、従来よりも安全であるはずだと思うんです。

河合 そうですね。そして、そういう自由な——心の自由な場というか、自分で祈ることができる自由というか、そういうものの保証が大事だと。それをあえて教団とか組織とまで言わなくても、いけるんだと。

山崎 そうですねえ。

河合 しかしこれは、何となく国民国家の議論と似てますね。無いと、ちょっと困るんだと。

山崎 ある時期に特に、無いと困るんでしょうね。

河合 そうそう。急にバツと否定してしまったら大混乱ですから。

山崎 現在の教団というものが穏やかに、しかも相互理解のもとに寛容な心で生み出されたら、それはそれでいいことだと思います。

河合 それで、このごろ注目してるのは、教団が布教ということをそれほど大事にしないことです。つまり自分たちの宗教体験を深めることは大事にするけど、これは正しいから、お前もやれと、よそへ言いに行くのではなく、こういう体験と一緒に深めていこうじゃないかというような方向にあるように感じます。

山崎 そうですね。もう一つ、工業化時代というか、宗教が衰えた時代には、宗教の必要を感じる人、つまり偶然に振り回される人は、非常に高度な知識人か、あるいは反対に社会的に虐げられた人、病気であるとか、あるいはほんとうに貧乏であるために社会的地位を占めにくい人たちでした。この両極だったのです。高度な知識人の場合は、成功するかどうかとも運命に関わるわけです。

河合 ほんとうにそうですね。

山崎 例えば、地位を持った芸術家とか大学教授は、「私は実は怯えています、宗教に目覚めています」とは言いにくいわけです。だから宗教について語らない。

河合 そうそう。

山崎 また、虐げられた人たちは、自分の言葉を持たないので、その知識人と虐げられた人たちの沈黙を利用して、悪徳の人も出てくるという状況だったのでしょうか。

河合 そうですね。しかし、現代は、その両極端がだんだん一般の中につながってきている。確かにみんな、まだ言葉も持ちにくいし、どうしていいかわからない状況にはあるけれど、しかし、単純に今の国際紛争の原因を宗教に置くことは……。

山崎 ああ、それはまったく間違ってると思いますね。

河合 そうですね。だからそういうことじゃなくて、宗教性ということに持っていった場合に、むしろ個人の非常に多様性こそが大事になってきますね。

山崎 ほんとに個人だと思いますね。

山崎 文化交流とか、あるいは文化的な国際関係という場合も、過渡的かというと、今の状況の中では、国家というものの果たす役割は十分あると思います。

河合 そうです。

山崎 私は、日本文化というものを、あまりにも単純に定義して、現在存在すると言われている伝統文化、いわゆる括弧付きの、明治以前の「文化」というものに限って、日本文化だと決めてしまって、それを外国人に押しつけるというようなことには、あまり賛成ではないんです。

河合 そうですね。

山崎 しかし、そうは言っても、やはりこの千何百年の間に日本人が作り上げてきた生活習慣や感受性などはもう身についたものですね。

河合 そうそう。

山崎 そういうもののまともにはあるわけですから、ともかくそれを国家が、よその国に紹介する窓口になる。あるいは、本来的に文化は個人が個人に伝えるものですから、それを側面から援助する。個人から個人へといっても、旅費もかかれば、いろいろ時間もかかるわけですから、それを国が間接的に支援するというのは、非常に大事なことだと思います。

河合 そうですね。そういう点で言うと、私は今の日本と韓国の状況はなかなかいい感じになってきていると思うんです。

山崎 特に最近ね。

河合 ええ、まさに草の根的に動くでしょう。非常にいい感じを持っているんです。

山崎 そうですね。今の若い人たちは、大人はいろいろ批判しますが、感心なことに、いわゆる他民族に対する、あるいは他国民に対する偏見が非常に減っています。

河合 それはほんとうだと思います。私たちは、もう大分無くなったけれど、どうしても、白人が来るとみんな偉い人のような気がしたりします(笑)。戦争に負けましたから、それを克服するのに長い時間がかかりましたが、今の若者はそんな劣等感は別に持っていませんからね。

山崎 そうですね。だから、どこかへ旅行するときにも、ほんとに素直な興味で、面白いところへ行くんですよ。

河合 そうそう。そして、すぐに現地の人とつながりますからね。

山崎 はい。国内的にも、若い人たちの偏見のなさというものには大いに期待できると思うんです。今後、どう考えたって日本の場合、社会を国際化せざるを得ないですよ。いくらロボットで労働力を置き換えようと思っても、できない部分がある。例えば、これから看護とか介護の分野で、外国の人たちに来てもらう必要が出てくる。そういうときに、今の受け入れ側の若者には、かなり信頼ができると思うのです。

河合 はい。

山崎 それはね、先ほど韓国の話がありましたが、今の若い日本の女性が、韓国の美容整形に行って韓国風の顔に整形してもらおうという噂がありますね。

河合 ああ……。

山崎 これはもう、観念ではない文化交流ですよ。

河合 そうです。それとね、韓国の歌を歌うためにハングルを習ってる人がいるとか。

山崎 ああ、そうそう。ほんとにそういう人が多いですよ。

河合 シャンソンを歌うためにフランス語を……(笑)。そういうほくらの時代は、昔の時代だと。今はもっと自然な交流が進んでいるというのは、ほんとにありがたいことだと。

山崎 そう思いますね。

河合 そういう意味で、地球は、ある点においては一つですから、一つの共通性を持ちながら、しかし、もう個人に解体してもいいぐらいの多様性があることが重要なのではないかと思います。

山崎 はい。私は、20世紀というのは、人類史上の珍事と言ってもいいぐらいの革命が起こったと思う。文化は多様ですが、ほとんど世界中が一つの文明の中に入りました。

河合 そうだと思います。

山崎 私たちがアラビア数字を使い、自然科学を尊重し、近代簿記を覚え、暦もほぼ同一になりました。時間とか物を測る単位も同じになりました。そして、例えば芸術の分野でも、遠近法とか記譜法、楽譜を記録する方法ですね、あるいは映像表現の決まりごと、そういうものが今、ほとんど一つになっているんです。こんな時代はなかったわけですよ。これは恐らく後ろへは戻らないでしょう。

河合 そうそう。

山崎 この文明に何と名前を付けるか考えると、今のところ「近代化」としか言いようがないんですが、その流れをちゃんと見据えた上で、今の過渡期をどうするか、ということだろーうと思うんですね。

河合 そう思います。その過渡期的な性格ということ踏まえていないと、片方が善で、片方が悪であるというようになってしまいそうで恐いわけですが、そこを踏みしめ踏みしめ行くことが一番大事なことだと思います。

山崎 実は、あるとき小泉総理に申し上げたんです。小泉さんがドイツへ行って、バイロイトの音楽祭に鑑賞に出かけられた。これは日本の文化を輸出する以上にドイツ人にアピールしたと思うんです。つまり、ドイツ人の側から見れば、日本の総理大臣が自国の音楽を理解してくれた、つまり、彼の教養の中に共通のものがあるということを見つけたわけですよ。

河合 ええ。

山崎 今後の国際交流、文化外交の中でも、そういう普遍性——日本人は、もちろん固有のものを持っていますが、それと同等に、外国のものを理解する、それも骨身にしみて理解するというを武器にしていくべきだろうと思います。

河合 そういう点で、今日は若者のお話も出ましたが、なかなか日本も希望が持てるということでしょうか。

山崎 ええ。もちろんすべての事柄には両面がありますから、放っておけばいくらでも悪い方へ転びますが、なるべく楽天的に物を見て、いい方へ行くように努力するのが、それ

ぞれの義務だろうと思います。

河合 どうもいろいろありがとうございました。

対 談

李 御 寧 と 河 合 隼 雄

河合 今日はどうもありがとうございます。

先生は、日本のこともよくご存じですから、お話するのがうれしいのですが、今日はシルクロードから話を始めたいと思います。かつては、ずっと西方から来たものが韓国を経由して日本に入ってきたわけですが、シルクロードから来たものの受け入れ方は、日本と韓国では随分違いますよね。

李 そうです。一口に言えば、日本では、シルクロードの終着点が正倉院だというんですね。そこに、中国経由、韓国から入ってきたいろいろなものが今も保管されているんです。それでも足りないので、広島の大宮の神社に、舞楽とか楽器とか、そういうものがまだあるから、いや、シルクロードの終着点は正倉院じゃないんだ、ここにもあるよというんですね。遠い西域、つまり西洋全体から、中央アジアを過ぎて中国に来て、韓国に来て、最後に日本に来たと。日本はそれを引き寄せるんです。

河合 なるほど。

李 日本には、国引き神話があるんですよ。「余りある国があれば来い」といって引っ張るんです。そうして、神様も、山にご神体があると、奥の宮から、中の宮から、村の宮から、そして村の神社に来て、それでも物足りないので、おみこしを担いで、最後には家の神棚まで入ってくるわけです。

日本はシルクロードの終着駅で、遠い西域の文化を教えてもらった、学ぶ文化なんですね。

河合 そうそう、日本は学ぶのが好きなのです。

李 日本のよさというか、日本の歴史には、そういう異国のもの、違った文化をよく学び、今までそれをキープして、自分は文化の終着駅だと思うところがあります。

しかし、韓国では、いや、そうじゃないんだ、もちろんシルクロードを通じて中国から入ったが、自国を経由してそれを日本に与えたじゃないか、そうすると、終着駅じゃなくて、ここが発信地だと。

河合 なるほど。

李 ここは起点だ、ということで、新羅の文化は…。

河合 新羅はすごかったですよね。

李 そうです、ソラボル(慶州)は国際都市で、中国、イスラム、外国の人と文化がたくさん共生していたんですね。だが韓国はどちらかといえば学ぶよりは教える方が好きな国なんです。

河合 ええ、おもしろいですね。

李 唐の高仙芝という有名な将軍がありますが、西暦751年に、タラス(今のタシケント)というところで敗北して、2万ぐらいの捕虜がみんな今のイラクとか西域に行き、そのときに

製紙技術が伝わったのです。

河合 ああ。

李 韓国では今でも、高仙芝は韓国人で、高句麗人で、シルクロードの英雄としてあがめられています。

河合 そこで道ができた。

李 遊牧民、匈奴たちを征伐して、シルクロードを確保した。特に、一万の兵を連れて4000キロメートルの高いヒマラヤのパミール高原を越えて唐に対抗していた国々を征服したというのです。その点アルプスを越えて攻めたハンニバルよりもナポレオンよりも偉いんだといっているんですね。

河合 すごいですね。

李 そういう高仙芝を通じて、韓国人はシルクロードの主役だ、そうやって紙まで伝えて、西洋の文明の父、文明をつくった人だ、そういう誇りを持つんですよ。

河合 なるほどなるほど。

李 だから、教える文化と学ぶ文化が、シルクロードを通じてよくわかるんですね。

河合 逆になっていますね。

李 それが本当か本当じゃないかは問題じゃない。そういうイメージを持って、文化を取り入れる。取り入れても、自分は教える立場になろう。こういうところが日本と韓国との違ったところですよ。先生にもご意見をお聞きしたいのですが、そういうものを比較するときに、シルクロードというのは重要な考え方のルートだと。

河合 日本は本当に、そういう意味でいうと、徹底的に学ぶ立場ですよ。

李 そうです。

河合 ただ、学んでちょっと変えるのがうまいというか、それからもう一つつくるのがうまいということがあるんですね。

李 ちょっと変えるんじゃなくて、自分自身のもをつくるんですね。漢字からかな文字をつくったように——ハングルは漢字とはまったく違ったもので似ていませんが——。

河合 かな文字をつくったのは大きかったですね。

李 シルクロードといえば、「絹」でしょう。その絹は、やはり中国、韓国から日本に伝わってきたのです。日本は、初めは、それをそのままもらうんですが、あとでは応用するんです。例えば、お医者さんのシーボルトから体温計を受け、それを、蚕を飼う養蚕の技術に応用するんですね。西洋のお医者さんから体温計の知識をもらうというのは当然ですけども、その学んだものを、ぜんぜん違う養蚕技術に使ったというイノベーションの仕方がすごいんです。それで尾高藍香は、世界で最初に年に二度、春と秋に繭をつくる技術を開発した。そうすると生産性が2倍に上がる。

河合 そうですね。

李 先生もよくご存じだと思いますが、新羅の時代から韓国の養蚕や絹作りの業はすごいもので、漢の成帝が愛していた飛燕とか明末の美女抱小姐はみな体が小さくて繊細で、韓国から輸入した軽い絹、沙鉢布でないと着ることができなかったといわれています。中国式の誇張かもしれませんが、李漁という学者がちゃんと文献に残していますね。だがその技術は日本とは違って、蚕の特徴に合った原理原則を守って蚕にまじめに仕えることでした。蚕は食べ物も生理も実に貴族並で本当にうるさいんですね。それを一々面倒みてあ

げるのだから、蚕を何度飼ったかによって、お嫁の身分が違う。蚕を3度、4度つくった経験があったら、もう花嫁として最高だというんです。

河合 原理を変えないのですね。

李 しかし、日本は、面倒を見るよりも蚕の生理を利用したというんです。蚕は普通4回眠ったら繭をつくりますが、人為的に3回だけ眠らせて繭をつくらせるように仕掛ける。すると睡眠不足の蚕からとっても細かい糸がつけられるというのです。それが三眠糸と呼ばれる絹糸で、三味線などに使ったと言われています。だが西洋人たちはその三眠糸でふるいをつくって、性能が高い細かいパウダ(火薬)をつくるんですね。蚕一つだけ見ても、日本は、養蚕技術を開発して、美しい楽器文化を発展させたが、ヨーロッパでは戦争の武器に使ったわけです。

こういう、シルクロードにかかわった養蚕業一つをとって見ても、東西の文明が違うことがよくわかる。お互いの文明の違いから、日本は西洋人から疑われたんですね。日本の貿易商品で、最初に西洋に進出して、世界を制圧したのがまさにシルクで、日本人は屋根の裏に牧場を隠しているという噂話とともに貿易摩擦などが起こったと言われていますね。どうしてあんなに多量の絹を生産するのか、何か怪しい秘密があるに違いないと思われたんです。ネズミが蚕を食べるんですから、そのために猫を飼う、そうすると猫が足りなくなる。養蚕業がどんどん流行ると、猫一匹の値段が馬一頭より高く売れたというんです。『甲子夜話』の記録ですからウソではない。こういう国は世界に類がないと思いますね。

河合 そうですね(笑)。

李 まねして捨てる技術は学問にもある。漢文の大学者、菅原道真は、もう遣唐使はやめましようと言ったし、新井白石も、もう韓国から通信使は要りませんと言った。

河合 そこは現代でも同じパターンですね。

李 そうです。

河合 ぱっと視点を変えて、外に出すのは思想とか哲学じゃなくて物を出すんですね。

李 そうです。

河合 すごい物を出す。これは、ずっとやってきたことかもしれませんね。

李 日本の物づくりは、発明というより開発ですね。いろんなものを融合する力、応用する能力だと思います。例えば、「胡」という文字ですが、今の中央アジアのイランやイラクを経由して入ったものにはみんな「胡」が付いていますね。だから、桃でも、胡をつけるとう桃(クルミ)になるんですね。

河合 これは、韓国でも胡桃と書くんですか。

李 胡桃と書いて漢字の音読みでそのまま「ホド」といいます。同じ西域から入った果物でも、日本に入ったものは用途が違う。戦国時代の武家社会では武田信玄などがやったように隠し兵糧として――。

河合 ああ、なるほど。あれは腐らないですからね。

李 ゴマ(胡麻)にも「胡」が入っていますね。もとはアフリカ産といいますが、やはりシルク・ロードから入ったものだということがわかる。言葉というのは文化の化石のようなもので、歴史が刻まれていますね。アラビアン・ナイトになぜ「開けゴマ!」という呪文があるわかりますね。日本にくるとその呪文は、「ごますり」と言う出世の呪文にかわる(笑)。

河合 ごまかすとか(笑)。

李 ええ、ごまかす。

ごますりというのは、何か油で炒めることをいうんですね。しかし、韓国でのゴマ文化は、よくご存じのように、ビビンバです。ビビンバは、ナムルとかいろんな異質の食材を入れて一つに混ぜる。味の交響楽といいますけれども。そのときどうしても欠かせないものが、油、ゴマの油です。だから、日本より、ゴマの油をたくさん使った。ビビンバが精神の領域に入ると儒仏道三教の習合になる。日本では儒仏神ですけれども——そういう東アジアの融合の仕方は、特に今のように宗教の葛藤が、文明衝突を起こしている世界に対して発信して行くべきです。違う宗教をゴマの油で融合してビビンバを作っておいしく食べる。こういう文化を韓国の有名な佛僧、元曉(ウォンヒョウ)大師は「円融会通」と説いた。その精神が世界にも類がない新羅千年の歴史を開いたパワーだった。武力ではなく文化の力で世を治めるパックス・シラギを実現したんですね。

河合 日本は、急に西洋のまねをしようとしたから、大変ばかなことをしてしまう。その時期は特別ですが、ずっと昔から見ていくと、両国は、そういう点は非常に似たところがありますね。

李 そうです。

河合 ただ、さっきちょっとおっしゃいましたが、そういうシルクロードができていくというところで、戦いがありますね。

李 そうです、そうです。

河合 これも忘れてならぬことですよね。

李 そうです。一番初めの前漢の武帝のときに、張騫が大月氏の国と連合するためにスパイをしたけれど、匈奴に捕えられて、そこで初めていろいろなものが中国に入ってきたというんですね。戦争は一つの道を開く。戦う者は、輸送路としてその道を使いますが、その戦争によって、かえって物とか文化が入ってくるんですね。

河合 そうですね。

李 おもしろいことに、シルクロードはペーパーロードともいわれますが、もしあのときに高仙芝がタラスの戦争で勝ったとしたら、もっと中国は強くなって西に向かったはずなんです。

しかし、その場合は文明を与えないんですね。特に紙の技術などは与えない。負けたから、そこから技術が伝わって、スペインまで入っていった。

河合 紙が向こうに入るわけですね。

李 そうですね。紙以上の知識のメディアはないんですから。特に紙の上に一度書かれたものは消すことができない。しかし、パピルスとか羊皮に書いたものは、すぐ消すことができるわけです。だから、ごまかすことができるんですね。

河合 紙とパピルスの違いですね。

李 官吏が都合のいいように自分勝手に直すんですから、上様から見ると信用ができなくなる。だから、紙はありがたいものですね。

河合 その背後に戦いがある。それから、戦いに負けることがあるというのもおもしろいですね。この辺に人間の、一筋縄でいかないというか、単純に交流すれば平和ですよというふうにはなかなかいかないところがある。戦いがあるから交流ができた。しかし、そうすると、負けたから伝わったとかね、その辺のところが……。

李 おもしろい。偶然が歴史をつくる。

河合 ちょっと連想し過ぎかもしれませんが、戦いといえば、スポーツの戦いはいいんですよ。

李 そうです。まったく同感です。

河合 ワールドカップ・サッカーがありました。サッカーでは、日本が負け組で韓国は勝ち組になった。あれで結局、今うまくいっているような(笑)。

李 そうです。それで日韓関係がよくなりました。特に若い世代がそうだった。一緒に応援したりして——。よかった。

河合 という感じがします。

李 負けるが勝ちということでしょう。

河合 そうそう。

李 そのときもし日本が勝ち続けたら、共催者として韓国はまたうらみを持ったかもしれない(笑)。韓国は途中脱落したのに日本は準決勝に上がった。経済や科学技術に加えて、サッカーまで制圧すると、なかなか親しい友達にはなれないんですよ。

河合 ええ。

李 そのとき韓国のレッドデビル(赤い悪魔)と声を合わせて、日本の若い人が一緒に「テハンミング」といった。

河合 日本の若者も興奮していました。

李 ふとそばを見ると、すばらしい隣の友人がいたんですね。そこで韓国の若者たちもフィール・ジャパンのムードが生まれてきた。

河合 そうですね。

李 今まででは地中海と大西洋の国だけのスポーツだったサッカーが、韓国や日本によって太平洋のサッカー、文字どおり世界のサッカーになりました。21世紀の幕開けを韓国と日本の若い世代が成し遂げた。

河合 そうそう。

李 両国の間には、政治経済には悪い記憶がありましたが、文化的には、シルクロードから仏教が入り、飛鳥の時代から韓国の人と一緒に文化をつくりました。万葉集には山上億良など韓国人の歌が収録されていますね。また近代以後には日本は西洋文明の変電所のような役割を果たした。もちろん侵略の形であったのですが。

このように文化論的立場で見ると、本当に重要な、目に見えないシルクロード、西洋と中国と韓国、日本まで結んだ大シルクロードが見えてきます。今では砂漠のラクダではなく、海や空のルートとかインターネットのルートを通じて結ばれています。

だがシルクロードといえば、絶滅した恐竜のような好奇心で、まじめな歴史の時間に教わることだと思われ、今でも生きている東西を結ぶ心の文化の道だと考える人は多くありません。

河合 そうですね。

李 パキスタン、アフガニスタン、イラン、イラクなどは、自分とはあまり関係ないと思うのに、石油とかアメリカとのテロの問題などの関係で、あの地域が世界史を変えている。空港の保安の厳しいチェックを受けるとき直接それを感じる。シルクロードを巡る激しい戦い、同時に、仏教や紙やいろんな知識が物と共に往来した文化の道。そういうパラドックスが、現在もまた起こっていると思います。

河合 パラドックスに満ちていますね。

李 言い過ぎかもしれませんが、歴史を動かす主体と、歴史に変数を与えるパワーがあるんですね。私たちは、歴史のうわべだけを見ているのですが、その歴史のうわべを変える何らかの要因がある。それが「胡」という文字の「隠し」。もともと胡という文字には、隠し、だます、という意味がある。ひげに隠された顔なんです。やはり、あの国にはひげがあるんですね。だから、身柄を拘束されたフセインがひげを剃られたときに、怒ったでしょう、イスラムが。比喩的ですが、歴史のひげ、素顔が見えないものを見えるようにする、透明にする、そして理解する、そういうものが今後の新しいシルクロードの…。

河合 我々の態度とか、あるいは考え方で今ネガティブに見えていることからプラスのものが何とか引き出せるように、あるいは意味を持つように、ということでしょうね。

李 そうですね。私は「縮み志向の日本人」という本を書いたとき、先生の世界的にインパクトを与えた先生の箱庭療法におおいに刺激され、大変勉強になりました。

河合 日本人は、いろいろ取り入れて学ぶのが上手だった。ところが、箱庭療法というのは、これまで私自身でいろいろ発信をしてみても、実は最近も韓国の学会に行っても話させてもらったんですけど、これはよほど気をつけないと、下手に教えるとだめだと思いました。ともに学ぶ姿勢でいかないと……。

李 いえいえ。

河合 いや、本当に。

李 韓国には、箱庭とか坪庭とか、そういうのはないですね。

河合 今では中国でも台湾でも随分、箱庭療法が盛んになりまして、私も何度も行っているのですが、そういうときに気をつけないとだめですね。日本人は取り入れるのは上手ですが、教えるのは下手ですから。

李 私は、縮まることによって広がるという逆説が持論です。

河合 なるほど。

李 日本が広がろうとしたら、下手なことをして、やむを得ず縮まるんですけども、縮まったときは、必ず世界的に広がる。日本は今、失われた10年といいますけれども、その前に何があったかという、広がり志向があって、どんどん世界の不動産を買って、バブルが起こったでしょう。

河合 そう。

李 そして、バブルが消えるとやむを得ず、戦争に負けたときのように、10年のあいだ縮み志向に行った。だがあまり縮まりすぎて不況が長く続いたんですね。

河合 大事なのは、今度広がるときは、広がり方をもうちょっと勉強しないとイケませんね。下手にやると、また同じ問題が起こりますから。

李 そうですよ。シルクロードの終着駅だという意識を持つと、その終着駅から発信ができるわけですね。

河合 ええ。

李 なのに、終着駅だということを忘れて、何かをつくって、それを発信しようと思うと変なものになる。そういうことを考えますと、本当に日本には聞き上手といわれる方がいますね。

河合 はいはい。

李 今、こうして私がしゃべって、大先生が聞き上手で聞いていらっしゃるんですけども(笑)。

河合 私は聴くのが専門なので。

李 まあ、韓国には聞き上手という言葉はないんですね。

河合 ああ、そうですか。

李 世界の文化をよく聞き、それを取り入れて日本的なものを開発して、半導体とか今話題の液晶パネルといったものをつくる。しかし、物だけを与えるんじゃなくて、心も一緒に伝えるのが大事だと思います。

河合 日本の心も共に伝わるのですね。

李 失われた10年のときに、ようやく日本が心を発信したんですね。それがあの、ポケモンのピカチュウとか文化庁でやり始めたプログラムだと言えます。

河合 はいはい、ポケモン。

李 もともとモンスターというものは、キングコングとか恐竜とか大きいはずですね。

河合 そうそう、あれを縮めてね。

李 日本が初めて、ポケットの中に入るモンスターをつくったんですね。あれが世界中の子供たちの心を沸かせました。日本のアニメも同じです。そういうものがアジアの心を世界に伝える。その心には、縮み志向的な、繊細で、美しくて、やわらかいものがある。そういう日本の縮み志向が本当の広がりをもたらすというのは古事記の美しい枯野の船の話でしょう。大きな木を切って船をつくると、その木の影よりもっと遠くまで行き、あとで、その船を壊して薪にして塩をつくり、残った木で琴をつくると、その琴の音は7つの海に響いた、という話は日本の広がりの方を暗示していると思います。韓国とか日本のアジア・メッセージは、宗教の衝突ではなくて融合の力の発信だと思います。日本と韓国が世界に広がる新しいシルクロードの起点になるというのが、今からの望みじゃないですか。平和との融合ですね。

河合 希望もありますが、裏も表もというか、両方考えていかないと。

李 そうですね。

河合 すーっと単純に考えていたんではダメです。

李 そうです。

河合 日本と韓国の特徴を考えながら、その一長一短を自覚しつつ、今のシルクロードを考え直すという意味では、大変すばらしいお話をお聞きしたと思います。

先生は、日本文化、日本人のことを「縮み」というコンセプトでうまく説明されたと思うんですが、そのことについて、少しお話しいただけたらと思います。

李 はい。

縮み自体は、全世界の原則にもあるわけです。広がりとは縮みは考え方の両面ですから。だから、そこに「志向」という言葉を加えたんですね。

河合 ディレクションですね。

李 よく日本の方たちが世界に、これは日本的だよといって示すものの普遍的な共通性は五・七・五の俳句に見られます。俳句は世界で一番短い歌ですね。

河合 そうです。

李 それはただ短いじゃなくて、広い宇宙を一点に集中して縮めたわけです。また、観光客は世界中で大きなものを見物しますが、小さいものを見物するために来るのが京都の龍安寺なんですね。

河合 ああ(笑)。

李 小さいですね。あの小さい石庭から、ベルサイユ宮殿のガーデンより広い世界や宇宙を縁側でじーっと見る。あのすばらしさは、宇宙や海洋を縮め、方丈の額縁を通して手に入れ目にいれる。

河合 小さなものが大きなものを含んでいる。

李 日本は、広いものや大きなものは縮めないと手に負えないんですね。

河合 あはは(笑)。

李 手に入れないものは手ごわいものになる。

河合 そうそう。

李 日本の俳諧の発句、それだけを切って、俳句の歌をつくるパターンが、庭をつくるとか、いけばなをつくる原理ですね。切り取るというもの。お茶を飲むときに、豪邸を持った人も狭い四畳半の空間をつくって、亭主と客が膝を交えながら一期一会を感じる。そういう日本独特な志向で外から入ったものを縮小し、濃密にし、気を張り詰めて繊細な文物をつくっててきました。

河合 はいはい。

李 日本人が韓国の文化を見て一番誤解するのは、あぐらをかく姿勢ですね。特に女性でも、またを開く姿勢。

河合 そうそうそう。

李 それに、日本人はびっくりするのです。

河合 広がり志向に驚くのですね。

李 しかし、韓国では、自然な広がりであぐらをかいている。日本人は正座をして、背骨がぴんと伸ばしただけで、あの人は立派な人だという。正座文化ですね。縮み志向といって日本に大きいものがないというわけではありません。

俳句だけではなく源氏物語もあるし、奈良の大仏もある。小さいもの、縮み志向に行ったときの日本と、広がり志向、伸び志向に行ったときの日本を歴史的に見ると、秀吉は初め、謙虚で、ぞうり取りから始めていく。朝顔を一輪だけ残して茶会を開いたという千利休は豊臣の縮み志向の教師であったといえます。たが豊臣は、次第に、金の茶室をつくったり、広がり志向で大陸を攻めようとし、変なことが起こった。

秋の七草とか、月や星を愛でるとか、近代の日本の軍国主義者になって細かい視線をなくし太平洋の広い空間に行きますと、もう茶室に座った日本人ではない。仕法がないということですよ。

河合 そうそう。そのときは、全く訓練がないわけですからね。

李 そうです。経済もそうです。小さいトランジスタをつくったり緻密にこつこつやっただけはすごい力があつたのですが、世界にどんどん広がって、不動産売買などをやるとバブルになってしまう。石橋をたたいて渡るといふ日本人が、どうしてこんなことをするんだらうかということになる。

河合 そうそう。

李 日本人自身が、それに対して疑いを持つ。言葉のレベルでの俳句、庭づくりでの石庭とか坪庭、政治経済も一点に集中して一生懸命に働く。そういう締める心構えなんですけれども。

もともと締めるという漢字には結ぶという以外の意味はないんですが、日本に来るときゅっと結ぶという緊張の言葉になります。日本の高速道を走ると、ドアを締め、ベル

トを締め、心を締めよ、という交通安全のスローガンがあるますね。会社に行くと、取締役があります。取って締める役なんですね。

河合 ええ。

李 手のひらは、開いているとゆったりして、ゆとりがあるものですが、これを締めると拳になる。この拳になったときに恐ろしいんですね。

河合 そうそう。

李 広がったものを締めるということですね。凝縮されたら力も強くなる。この拳が外に向かったときは脅威論になってしまい、経済が強くなったときに、脅威を示す。軍事脅威になると、周囲の人は驚く。

河合 急激に変わるときに下手をしてしまうのですね。

李 こういうことをお話しすると、神話を研究する方から怒られるかもしれませんが、天照大神を天の岩戸から引き出したときは、初めから力でやったわけではないのです。鳥の鳴き声をしたり、鏡をつくって太陽のイメージをつくりたしたりし、舞いもした。物づくりであり、歌づくりであり、舞い事である。しかし最後は、天照大神がそっと戸を開けて外を覗こうとしたところを手力男命がぱっと引く。最後の仕上げをするのはやはり力だったのですね。この世の中には力がないとだめだ。しかし力とともに、ああいう繊細なイメージの空間が融合しないとだめです。そのバランスが壊れると大変なことが起きます。

河合 そうです。

李 広がる志向は中国に見られます。中華思想というのは恐ろしい思想で、本当は中国の歴史を見ると、儒教の仁とか、徳とか寛容の文化と思われませんが、実は自分が世界のセンターだという、我儘勝手にふるまう高慢なところがあります。自分以外はみんな野蛮人だと思える独善もある。

いつも外の世界を支配する広がり志向で歴史をつくってきた。

日本は島国であるから、その中で内密に広がるよりは、内に向かっていく。だから、豆をまくときは、外にある人はかわいそうですが、みんな「福は内、鬼は外」と言ってやるのですね。

そうすると、韓国は、半島で、島の縮み志向と大陸の広がり志向の真ん中であって、日本から見ると広がり志向であるし、中国から見ると、これはどうも縮み志向だと思うんですね。このバランスをとるべき半島が弱かったので、日本と中国の日本大東亜共栄圏と中華思想とが東アジアで競り合って不幸な戦いをしたわけです。

半島は、じゃんけんのゲー、チョキ、パーでいえばチョキなんですよ。このチョキが働けば、順々に回るでしょう。だれも勝ち負けがない。金、銀、銅じゃないんです。ダイナミックな東アジアの文化をつくるためには、中間文化、地味ではあるけれどグレーゾーンがあって、大陸から流れて、島から流れていく。その中間がなくなると、このゲーとパーはいつも負けるか勝つかということになります。中間の存在が深く関係しているわけです。

西洋で見ると、中国、日本しか見えない。しかし、東アジアで見ると、中国を見るためにも、日本を見るためにも、半分が島で半分が大陸につながっている韓国があります。地政学的に見て、これほど近い国同士、三つに分かれた風土を持って、1000年、2000年を一緒に暮らした国というのは、この地球上にはありません。

河合 ええ、そうです。

李 その違った文化を持った大陸文化と島の文化と半島の文化がいかに多様性を持って東アジアのダイナミックな構想をつくるか、これは本当に希望の世界地図だということをしみじみと感じます。私が縮み志向といったのは、ただ日本だけの話ではありません。広がり志向に行こうという中国、その半分にあるバランスのとれたグレーゾーンの韓国、そういう地政学的な役割を知っておれば、だれを主とするかということではなく、グルグルグル回る三すくみのパワーバランスのもとに、本当にすばらしい、融合された文化があらわれるのですが、まだまだ東アジアでは一つの文明をつくるどころまでいっていません。

河合 もう一極集中の時代は終わって……。

李 終わったんです。

河合 それが終わって、ネットワークの時代になった。

李 そうです。

河合 そういう意味で、韓国の役割といいますか、中国と日本とをつなぐネットワークの一つの基点として韓国が力を持ってこられるというのは、非常に意味があると思いますね。

李 日本と韓国、それから中国でもチャイチャイといってやっていますが、ジャンケン
の関係を重視するんです。

ジャンケンには、チョキを出して勝つこともあるし、負けることもある。しかも双方同時に出す。日韓親善といっても、あれも戦いなんです。韓日なのに、何で「日韓」か。いや、日本でするときは「日韓」、韓国では「韓日」でやろうということでは親善にならないんですよ。しかし、ジャンケンは一緒に出すんです。先、後がないんです。ですから、先後の順番を決めるときにはジャンケンになるのです。鬼ごっことか碁を打つときもこれをやる。そしてジャンケン型という新しい文明は、東アジアの文明の原型だと思うんです。だれがアジアの覇権国家になるのか、だれが東アジアの中心になるのかを争って昔の歴史を繰り返すと、大変なことが起こると思います。

河合 三国のバランスというのが非常に大切です。

李 このバランスをとる。韓国がバランスをとるといったから、韓国にだけ責任があるというのではなくて、中国も日本も韓国も、そういう広がり縮みと、中間のグレーゾーンの3つを持った各自の文化の役割を持っているのですから、金、銀、銅のランクではなく、ゲー、チョキ、パーの一人勝ちがない循環型のダイナミックな関係をつくっていく必要があります。

河合 上下ではなく、循環型ですね。

李 アジアは上で呼んでも下で呼んでも「アジア」は「アジア」ですから(笑)、そんな理屈で考えれば恨みも持たない。だれが一番になっても威張ることはない。最後に来てもがっかりすることはない。こういうものを現実的につくっていくときに、日本はやはり成功した国で、力を持った国ですから、日本の縮み志向に基づく広がり志向の戦略に行くと本当の意味でアジアのリーダーになれると思います。実際に貿易でもジャンケン構造になっているのです。韓国は中国に黒字をだし、日本は韓国に黒字をだしている。そしてまた中国は日本に対して黒字ですね。中国はパー、韓国はチョキ、日本はコブシです。

河合 はい。

李 韓国には広がり志向の一面があって、日本に比べると教える側だと。だから、韓国

人で余り警戒心がない者は、酒一杯飲むと、みんな会社の秘密の話をする。日本人はじっと聞いているんですよ(笑)。だから、本当は怖いんですね。外から見ると、しゃべる人が何だか陽気に見えて、元気がいいように見えるけれども、もう一方はじっと聞いている。そういう関係が本当におもしろいんですね。

本当に形だけの交流とか、楽しく平和に行きましょうという、そんな甘い言葉じゃなくて……。

河合 何でも甘い言葉では上手くゆきませんね。

李 けんかをしてもいい。ただジャンケンのように勝負をすることです。韓国、日本、中国が葛藤しても、その根底にある大きなルールと融合の力で共生循環することをしっかり守っていく。それがアジアのダイナミックな発展に繋がっていくと思います。当たらずさわらずで問題を避けていくと停滞してしまう。また一時に吹き上がって爆発してしまう。だから、お互いに競争しながらも、いいところを補いながら、お互いに違った文化を持って、それで一つの大きな文明圏、東アジア文明圏をつくる。それが21世紀の大きな課題であるし、今後の可能性ではないでしょうか。

河合 上下とか敵か味方かという二分法ではなく、三者のダイナミズムを大切にすることですね。

李 韓国はちょっと強くなったので、恐らくバランスがとれると思います。大東亜共栄圏でも中華主義の東アジアでもない、この東アジアの三すくみがつくられ、プラスアルファのASEANがつくられる。今、ASEAN・プラス・東アジアというけど、そんな話はない、東アジア・プラス・ASEANなんだということをASEANの方で話していますが、どこが先か後かではなくて、東アジア・プラス・ASEANという地域がつくられると、西のヨーロッパのように…。

河合 ヨーロッパは既に相当やっているわけですからね。

李 既にEUになっていますね。アメリカは大きな島国ですが、アメリカとカナダとか、NAFTAや強力な東アジアを中心にした…。

河合 一極集中ではないがちゃんとつくれているんだという形をアジアでつくる。これが非常に大事だと私は思います。

李 東アジアはヨーロッパのEUとアメリカの中間にあって、バランスをとって仲よく暮らすようにすればよい。今はドルとユーロが競り合いアジアはどの貨幣で決済するか、未来の行く末が注目されていますね。

大陸パワーと海洋パワーの中間に韓国半島があって、それが大きくなると、東アジア全体が海洋勢力と大陸勢力を融合する、葛藤じゃなくて融合する力を持った、キリスト教まで含めてすべての宗教を融合する力を持つ存在になりえるんですね。日本が縮み志向で、いろんな食べ物をコンパクトに幕の内弁当に入れるように、世界の個別的な文化を融合するノウハウを日本は知っているんだから、未来の世界が三地域の一つの文化として、三すくみがつくられるときでも、日本、韓国、中国が貢献する道はあるのではないかと。それが縮み志向の最後のたどりつきではないかと思っています。

先日京都に出張して、文化庁開催の「文化の多様性」をテーマにした国際文化フォーラムに参加したのですが、世界の文化の多様性の前に、東アジアの三国が多様性を認めるべきだと思います。韓国、日本はすべて中国から学んだのではない。日本には仮名が韓国にはハングルがあって多様性をもつ東アジアの文化が作られた。なのに中国がいや中華だ、日本

がいや大東亜だというと、きりがいい。

河合 水かけ論ですね。

李 ええ、水かけ論です。最後まで押し問答で、絶対に共通点がないのです。

河合 先ほどは絹の話がありましたが、西域から入ってきたものでは、何かもっとおもしろい話がありますか。

李 その代表的なものがガラスだと思うのです。遊牧民たちは砂漠で暮らしているの、夜は寒いから、たき火なんかをやると砂が溶けるんです。そこで…。

河合 ガラスができる。

李 ええ。だから、ガラスは遊牧民の砂漠の地方でつくられたと。いろいろな説がありますが、神様が人間にくれたものではなくて、人間自身がつくったものとしてはガラスが代表的なものです。それが韓国に入って、日本にも入ってきました。このガラスは本当に珍奇なものとして今、慶州の博物館に行くと、ベルシャあたりから来た美しいガラスの製品がありますが、シルクロードを伝わってきたものは、ガラスといわないで瑠璃、まるで宝石みたいに瑠璃といったんです。韓国は今でもユリというんです。

河合 そうですか。

李 ですから、同じものが入って、日本でも瑠璃だったんですけども…。

河合 そうそう、初めは瑠璃でした。

李 しかし日本ではガラスでしょう。シルクロードから入ったものには「胡」、近代になって海から入ったものにはみな「洋」の文字がついていますね。

河合 さっきの「胡」をつけるみたいで、洋楽とか洋食とか…。

李 洋食とか洋服とか。「洋」の海のシルクロードは直接黒船が持ってくる。もちろん昔も大陸から船のルートで入ってきたんですけども。ガラスと瑠璃と同じものですが、近代文明のガラスと、昔の古い宝物としてベルシャなどから瑠璃として入ったものを言葉で見ると、やはり韓国系はシルクロードの古い意味での瑠璃が、今までユリとして伝わっています。日本は近代のイメージとしてのガラスだと言えます。

河合 日本は近代に、海から入ったものをばっと採り入れて使いましたね。

李 近代になって、西洋の物産はみな舶来品。ラクダではなく舟で運ばれました。

河合 ガラスは舶来ですよ。

李 ラクダが持ってきたものは瑠璃。

河合 瑠璃はラクダが持ってきた。

李 そうです。ラクダの背に負われてきたものと、海から船でもらってきたものと、この両方の西洋のあり方がある。言葉でもガラスだけではなくて、「法律」とか、「社会」という言葉とか、これは漢字でつくられて、みんな日本が近代化時代に、西洋の概念に基づいてつくったものですね。

河合 日本人はなかなか上手に訳語を作ったのです。

李 古来の漢字に含まれている西洋の名残りとは違って、近代化以後の漢字は舶来品から手配したものです。シルクロードで手配したのではなくて。漢字の使い方では日本独特のものとして、国字というものをつくったことがあります。同じ漢字を受けても、韓国はなるべく本物の漢字を純粋な形で保つことが重要だったのです。だから、勝手に字をつくったりしなかったのです。しかし、日本は、漢字をもらって、初めはそのとおりに使ったんですが、時間がたつと、国字をつくりました。「峠」は山に上、下と書いて「峠」という

んですね。英語のマウンテンは上がる意味しかないんです。しかし、峠は上がったり下ったり両面を見るのです。西洋のマウンテンは、上がっても下りることはできないんです。マウントするのですから。言葉は本当に魂、心の鏡で、日本の漢字用法を見ても、ガラスとって、石へんに肖と書くでしょう。それはガラスの材料そのものの科学的な使い方なんです。「瑠璃」は、人間がつくっても、まるで自然の宝石みたいに目立っている。日本の言葉遣い自体が、大陸系と海洋系の2つを融合して…。

河合 融合して海洋系を一挙に採り入れて近代化していくという。

李 近代化を地理的にいえば海の発展なんですね。日本は海洋国家だったんですけれども、シルクロードを通じてもらった西洋文化は大陸文化であった。しかし、近代の西洋文化はイギリスを中心にした海の文化だったといえます。だから、ヨーロッパにも海のヨーロッパがあるし、大陸のヨーロッパがある。海のヨーロッパが入ってきて、昔は大陸志向で大陸を見たんですけれども、今度は太平洋からずっと海を見た。

シルクロードから韓国を通じて入ってきた古い大陸文化と、舶来品みたいに、アメリカを経由して入ってきた海洋文化が融合されないままに、一方的に海洋の日本になってしまったんです。これが韓国を通して中国に目を向けると、昔のような大陸文化にまた向かうわけです。このように、自然に何かぶつかり合う。それはおそろしいことではない。大いにぶつかっても、それが一神教みたいに、一つを残して他を殺すんじゃなくて、おのこの地政学的な立場をいかに融合するかという激しい、ダイナミックな抗争、話としては実に甘い言葉ですけれども、本当はつらいもので、こういうものが私たちの前に待っているということが、ガラス一枚にも透明に浮かんでいるのではないのか。それがガラス窓の向こう側の風景なんですね。

河合 非常によい例だったと思いますね。

昨年秋、文化庁は、ソウルで、日本の大衆映画を一挙に紹介する催したのですが、韓国の人々に、日本人も泣いたり笑ったりしているんだということを知ってもらういい機会になったと思います。

李 それと、日本には繊細な文化があるでしょう。韓国のはちょっと粗削りでしょう。だから、繊細なものを見ると、自分が持っていない部分で感激、感動する。また日本は粗削りなものを見て、何かすがすがしくなる。こういう相補う文化の流れは広がる。政治、軍事、経済は皆勝ち負けがありますが、文化には勝ち負けはない。だれも損をしない。

河合 そういう意味で両国の文化交流は大切なことです。

李 また、なくなるはない。文化は、特に「冬のソナタ」などは、日本の何千万人が見ても、韓国の「冬のソナタ」が減るとか、なくなるということはない。もっと増えるんですね。

河合 それはおもしろいですね。

李 お互いの文化のマーケットが広がる。

河合 そうです。

李 生き方への共感を基にして、分ければ分けるほど深くなったり広がったり…。

河合 文化庁では、韓国の文化観光部と相談して、去年、ユネスコの無形遺産の傑作宣言を同時に受けた韓国のパンソリと日本の文楽を一緒に公演しようと準備しています。

李 それはいいことです。

河合 本日は長時間にわたり、本当にありがとうございました。



日本經濟新聞特集記事

関西

فرهنگ

Kültür

Kultur

วัฒนธรรม

πολιτισμό

ثقافة

văn hóa

Culture

культура

Cultura

วัฒนธรรม

문화

Cultura

文化

Kultur

πολιτισμό

ثقافة

תרבות

فرهنگ

文化

World Cultural Forum 2004

Cultural Diversity

World Cultural Forum 2004

内外の著名な文化人・芸術家が関西に集い

「文化の多様性」を共通テーマに

世界に向けて文化のメッセージを力強く発信します。

